

年報

平成 17 年度



Oita University of Nursing and Health Sciences
大分県立看護科学大学

法人化と大学評価

今ほど、大学を取り巻く環境が変化し、大学の変革・改革が求められる時期はかつてなかったと思います。

国公立大学とは関係のないキーワードであると思われていた（大学関係者だけが勝手に思っただけかもしれませんが）「効率」「競争」「評価」などが怒濤のごとく大学を襲っております。

このような中で、本学も平成18年4月から法人化し、「公立大学法人 大分県立看護科学大学」として新たなスタートを切ることになりました。

時期早尚ではないかとの意見もありますが、国立大学は、すでに平成16年に一斉に法人化して2年が経過し、公立大学においても法人化が時代の潮流であることを考えると、本学にとって時宜を得た判断であったと受け止め、規制緩和などの法人化のメリットを十分活かした大学運営に全職員あげて真摯に取り組んでいかなければならないと考えております。

法人化に伴い組織に求められることは、強固なガバナンスの下での自主的・自律的、効率的な大学運営と、成果の評価と公表です。学問の自由、大学の自治の名の下に、大学が社会的に聖域として扱われ、ともすれば組織人としての意識が希薄であった大学人には、組織運営に関する大きな意識改革が求められていることを自覚しなければなりません。

大学は、中期目標に沿った数値目標も含む6年間のより具体的で特色、魅力ある中期計画を立案し、毎年、その達成度を第三者によって評価されることとなります。

大学評価の基盤は、自己点検・自己評価です。常に、組織および個々の職員としての自己を見直し反省することが大学の進化・発展につながります。本学では、自己点検・評価の一環として平成10年の開学以来、年報を発行し、本学の活動の実態を学内外に公表してまいりました。

年報を通して、本学の全職員が教育・研究・地域貢献に心血を注いで努力している姿と、看護系大学の特徴、魅力を社会のみなさまに知って頂き、率直なご批判をいただきたいと思っております。

平成18年3月

学長 草間朋子

1 委員会／ワーキング・グループの活動

平成17年度委員会構成図



1-1 教授会

構成員：全科目群の教授・助教授・講師、事務局長

事務局：総務課長、教務学生課長

各委員会よりの分掌事項に関する進行状況の報告、ならびに提案議題について審議を行うと共に、大学運営に関わる重要事項の意思決定を行った。

1-2 運営委員会

委員：草間 朋子、栗屋 典子、高橋 敬、市瀬 孝道、稲垣 敦、関根 剛（吉村 匠平と交互に出席）、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、G.T.Shirley、小林 三津子、小西 恵美子、高野 政子、宮崎 文子、影山 隆之、平野 亙、桜井 礼子、中村 喜美子、八代 利香、三浦 洋一（事務局長）

事務局：小手川 元晴（総務課）、三浦 始（教務学生課）

各章委員会よりの分掌事項に関する進行状況の報告、ならびに提案議題について審議を行うと共に、予算に関する審議を行った。

1-2-1 教務小委員会

委員：佐伯 圭一郎、宮崎 文子、中村 喜美子、平野 亙

新学期の履修関係のオリエンテーション、平成18年度時間割作成、平成18年度シラバス作成の作業などを中心に活動を行った。

1) 助産学履修者選考WG

構成員：教務小委員会メンバー、吉留 厚子、林 猪都子、小西 清美、梅野 貴恵

平成18年度の助産学実習履修者の選考作業を4月に実施した。22名の希望者から学業成績と口頭試問（実技を含む）により選考し、運営委員会において13名の許可が決定された。また、次年度の選考方法を検討し、選考の準備作業を行った。

1-2-2 教育・実習小委員会

委員：草間 朋子、稲垣 敦、栗屋 典子、市瀬 孝道、甲斐 倫明、小西 恵美子、宮崎 文子、G.T.Shirley

本委員会は学生の教育を効果的かつ円滑に行なうための教育関連の活動及び教育・研究予算（学部・大学院）の策定を行なっている。

看護学実習については、実習施設の確保、実習日程調整、教員配置、担当教員の指導等を担当した。特に、本年度は個人情報の保護に関する法律の施行に伴い、実習施設の患者への対応に関する大学と実習施設との誓約書について検討した。また、総合実習WGは、新たな実習施設を開拓し、学生用のマニュアルも全面的に改訂し、名称も「しおり」とした。

国家試験対策に関しては、例年どおり国家試験対策WGが実務を担当し、国試対策マニュアルをもとに学生が主体的に進めてゆく体制を整備し、また、国家試験対策について学生に調査を実施した。

卒業研究に関しては、2つのSGを立ち上げ、卒業研究発表会SGが卒業研究要旨集の作成や発表会の準備・進行を担当し、卒論生研究室配置・看護研究の基礎1SGが次年度の研究室学生配置と看護研究の基礎1の準備と進行を担当した。また、今年度は卒業研究優

秀賞の審査をより公平かつ適切なものにするため、2段階で審査した。

4年生を対象とした総合人間学は地域住民にも公開しているが、おおいた県民アカデミア大学の連携講座への登録も継続した。本委員会は、その企画から講師への依頼や連絡、当日の対応や司会を担当した。今年度は県内外から8名の講師が講演し、好評であった。

学内の研究助成に関しては、プロジェクト研究と奨励研究の募集、審査委員会の準備等を担当し、今年度は奨励研究11件、プロジェクト研究1件が採択され、研究成果がアニュアルミーティングで報告された。来年度からは、教授も個人で申請可能な先端研究というカテゴリーを設置することとした。

短期海外派遣に関しては、募集や審査を担当し、3名の教員をニュージーランドや米国の大学等に派遣し、それぞれ帰国後に報告会を開催した。

また、基礎学力向上WGは進級試験WGとあらため、進級試験（試行）の問題作成依頼、編集、実施、結果の分析を担当した。また、本学も厚生労働省の国家試験問題プールに問題を提供することとし、進級試験WGが担当することになった。

大学院に関しては、予算の管理や中間発表会、研究計画報告会、修士論文報告会、審査委員会の準備を担当した。

教育・実習予算等に関しては、これを管理し、申請された物品について毎月審議し、研究・教育の質の向上を図った。

また、本年度は、大学評価・学位授与機構による認証評価を受けたため、本委員会の担当分野の執筆も担当した。

1) 国家試験対策WG

構成員：宮崎 文子、林 猪都子、藤内 美保、吉田 成一、工藤 節美、品川 佳満、高波 利恵、佐藤 俊実（教務学生課）

昨年度の国試合格率は看護師98.8%、保健師91.8%、助産師100%であり、3職種共に全国平均を上回った。今年度は、完成年次から5年目に当たり、3職種共に100%の合格率を目指すことを目標に掲げた。昨年は、学生の国試対策マニュアルが完成したため、学生の国試対策委員の作業（国家試験ガイダンスの企画・実施、模擬試験の作成・印刷、・実施・結果の分析、それを踏まえた補講計画・実施、受験手続きの指導、受験の周知徹底）については順調に進み、学生が主体的・効率的に行った。また、今年度は補講の出席をとる等、学習の推進を図った。補講終了後には、国試対策に関するアンケートを実施した結果、補講内容・時期・期間については約7割の学生が満足であった。来年度の改善点としては、学生から学内模試を国家試験直前に行って欲しいという要望があったため、これを実施する予定である。

2) 総合実習WG

構成員：関根 剛、大賀 淳子、高波 利恵、安部 恭子

総合実習WGは、看護実習の最終段階にあたる総合実習を円滑に行うことを目的として設置されている。平成17年度の総合実習は、6月27日から7月8日までの2週間を当てて実施

した。また、平成18年1月には次年度のための総合実習ガイダンスとオリエンテーションを実施した。今年度は、実習施設一覧の追加・削除が簡便になるように該当ページのマニュアルの体裁を全面的に変更した。また、学生に配布する資料も、総合実習の趣旨である自律的に考える態度を重視することから、マニュアルではなく「しおり」と名称を変更することとした。また、平成18年度の総合実習施設の増減があった。一部の企業における実習先は減ったものの、新たに養護学校、保健福祉センター（旧保健所）、訪問看護ステーションを加えることで、より幅広い実習先を確保することができた。

3) 進級試験WG

構成員：高橋 敬、小西 恵美子、佐伯 圭一郎、伊東 朋子、小野 美喜、
藤内 美保

本年度も進級試験（試行）の主な出題範囲は「健康の地図帳」、「病気の地図帳」、「からだの地図帳」とした。本学講師以上の教員に、学生が1、2年次に学んだ基本的なもので、かつ考えさせる問題を1人5問程度作成するよう依頼し、メモリースティックで回収した。4回の会議をもって120問の試験を編集・印刷し、2月21日（火）に本試験、2月28日（火）に再試験、3月10日（金）に再再試験を実施し、全員合格ラインに達した。各問題に対する得点数などは数値解析して難易度の参考に供し、来年度は、実施時期、問題数、結果発表時期等について検討する予定である。

4) 実習関連WG

構成員：栗屋 典子、桜井 礼子、藤内 美保、伊東 朋子、小野 美喜、
大村 由紀美、八代 利香、吉留 厚子、大賀 淳子、山下 早苗

実習関連WGは第3水曜16時からを定例会議として、以下の内容について検討を行った。主な活動としては、実習に関する事項についてガイドライン、ガイドブック等の作成・見直し、実習環境の整備、学生の技術指導の企画・運営等である。今年度は新たな課題が多く分担をして作業を進めたが、技術指導等に関しては、各研究室からの協力が得られスムーズに進行することができた。

1. 個人情報取り扱いに関するガイドラインの作成

「個人情報の保護に関する法律」（平成15年5月に公布、平成17年4月1日施行）、「医療・介護関係事業者における個人情報の適切な取り扱いのためのガイドライン」（厚生労働省・平成16年12月24日）等に基づき、医療・介護施設においても、個人情報の取り扱いに関して、情報管理および情報利用に関する利用者への同意といった視点で対策が図られている。これらに対応して、「看護学実習における個人情報取り扱いに関するガイドライン」を作成した。ガイドラインの主な内容は以下の通りであり、看護全体会で承認をうけ使用を開始した。

このガイドラインに基づき、実習施設と学生が担当する対象者に関する個人情報の取り扱い、同意書の必要性等について、協議して実習を進めることとした。また、実習記録に

関しても、ガイドラインに基づき見直しを行った。

看護学実習における個人情報取り扱いに関するガイドライン第1版

—平成17年4月作成—

I. 個人情報取り扱いに関するガイドラインの作成にあたって	・ ・ ・ ・ ・ p 1
II. 看護学実習における個人情報の規定	・ ・ ・ ・ ・ p 2
III. 大学と実習施設との協定	・ ・ ・ ・ ・ p 4
IV. 看護学実習における個人情報の取り扱い	・ ・ ・ ・ ・ p 5
1. 教員に関する事項	
2. 学生に関する事項	
V. 参考資料	・ ・ ・ ・ ・ p 7

添付資料：

臨地実習説明書・同意書

2. 実習ガイドブックおよび事故対応マニュアルの作成・見直し

1) 実習ガイドブック2005年度版の作成

個人情報保護の観点から、また市町村合併に伴い地域実習の領域の変更や実習施設の変更等もあり、今年度の実習ガイドブックは、4年次生の地域実習（5月）に間に合うよう前年度から準備し5月半ばまでに作成を行った。また印刷部数を500部とし、各学年および実習施設に配布できるよう準備した。

2006年版についても年度末に事故対応マニュアルの見直しとともに検討を行い、2006年5月には完成予定とする。

2) 事故対応マニュアル

具体的な事故に対応した事項として、「針刺し事故」に加えて、「結核患者との接触した場合」が追加された。マニュアルについては、学内の人が関わる部分を目立つように色をつけるよう修正した。

3. 看護技術修得プログラム

1) 第1段階（7月～9月）

第4段階実習前の3年次生を対象に、対象への安全・安楽に配慮した看護基本技術の実践能力を身に付け、自信をもって実習に臨むことを目的とし、看護技術チェックを行った。今年度は、チェック前の練習に教員が関わるようにしたところ、学生が気づけていない点や誤った方法で実施している点について指導することができ、学生の技術練習を効果的に刺激することができた。学生もまた、評価にこだわるのではなく実習のための技術チェックであることを認識し、大変熱心に取り組んでいた。

2) 第2段階（10月～11月）

4年次生を対象とし、総合看護学として課題6事例（母性、小児、成人・老年の急性期、

周手術期、ターミナル期、在宅) について、設問に対して事例を展開し、ロールプレイを含む発表を行った。今年度はグループワークの過程で教員が関わるようにしたこと、また発表の際のロールプレイの患者・家族役を教職員に依頼したことで、ロールプレイにリアリティがあり、発表内容も充実したものとなった。また、学生同士のディスカッションも活発に行われ、さらに理解が深まったと考える。

3) 第3段階 (2月～3月)

4年次生を対象に、国家試験終了後から卒業式の間を利用して、看護系全教員による最終段階の看護技術チェックを行った。日常必須の看護技術にもかかわらず、習得度が低い項目について、正確な知識、冷静な状況判断に基づいた的確な実践能力を養い、卒後への自信を深めることを目的としている。昨年度卒業生へのアンケート結果に基づき、看護技術項目を精選した(蘇生法、静脈血採血、点滴静脈注射、筋肉内注射)。静脈血採血においては、真空管採血に関する最新知識の提供を行い、卒後の実践に活かせるよう配慮した。さらに昨年の課題に基づき、技術修得が不十分な学生への指導を行うための再チェック期間を設定した。

4. ビデオ教材作成

看護技術習得プログラムで活用できるビデオ教材の作成を行った。作成期間は2006年2月～3月、作成ビデオは①急性心筋梗塞事例 ②肺切除術後事例 ③蘇生法 ④採血 ⑤点滴静脈注射の5本である。学生が自己学習を進められるよう、インターネットでの画像配信を予定している。

5. 実習センターの運営・管理および各実習施設の整備

1) 実習センター

教員室に新たにデスクトップ型パソコンを2台配置し、講義室での講義に使用できるよう整備を行った。また、実習期間に学生が実技練習をできるよう物品を追加配置した。

2) 各実習施設整備

大分赤十字病院、大分丘の上病院、別府発達医療センター、母性・助産実習施設等に対して、シュレッダー、学生用プリンターの配置等、学生の学習環境の整備を行った。

1-2-3 学生受入小委員会

委員：小林 三津子、高橋 敬、高野 政子、八代 利香

事務局：竹下 敏彦(教務学生課)

本小委員会の役割は、編入学生、科目等履修生、聴講生、研究生の受け入れや大学間の単位互換に関する事柄について、その手続き、認定、条項・内規などを検討することである。

本年度は、3年次編入学生4名の既習得単位の認定および科目等履修生、聴講生、研究生、大学間の単位互換の受け入れ可能開講科目の決定や募集要項などの検討を行った。また、その他として、学生の通常の授業及び定期試験に対する学習意欲の向上を図るための一方策として、再試験・追試験手数料徴収の可能性について検討した。

1-2-4 学生生活支援小委員会

委員：市瀬 孝道、影山 隆之、桜井 礼子、関根 剛、吉村 匠平、
原田 幸代（保健室）、三浦 始（教務学生課）

本委員会は学生の大学生活全般を充実させ、効果的な教育が受けられるように学生を支援することを目標にしている。委員会の活動事項は学生の基本的な健康管理から奨学金による経済支援、自治会活動、サークル活動、種々の学生相談など多岐に渡る。本年度は幾つかの新しい試みを導入し、学生生活の活性化を図った。

- 1) 1年次生～3年次生に学年担任（主担任と副担任）を配置し、修学相談や進路相談等の学生相談窓口を拡大させると共に、毎月ホームルームを開催し、マナー教育や学年全体への連絡や周知事項の徹底化を図った。各学年担任は以下のとおりである。
1年次生：吉村匠平、林猪都子
2年次生：関根 剛、赤司千波
3年次生：影山隆之、八代利香
- 2) コンタクトグループをパワーアップする試みとして、7月25日にコンタクトグループ対抗球技大会（ユニホックゲーム）を開催した。これによって教職員・学生間の交流、学年を越えた学生間の交流が例年になく深まった。この試みは後期のコンタクトグループの自主的な開催に繋がり、多数グループの自主開催が報告された。
- 3) 学生の健康管理に関しては、健診結果説明と保健指導、メンタル面の健康調査（GHQ）や入学時の保健調査票による面接のほか、問題を抱えた学生の心身両面からの相談を行った。また禁煙月間（12月）には喫煙調査や禁煙標語の募集等を行い、優秀作品には優秀賞を贈るとともに、当該月より毎週水曜日を禁煙日とした。
- 4) 本年度も交通安全教育の一環として、自動車と自動二輪車を対象に大分県自動車学校にて交通安全体験教室を行った。地域実習前の運転技術チェックとして好評であった。
- 5) 自治会・サークル活動の支援としては、これら課外活動が円滑に行われるように、自治会規約とサークル規約の見直しと改訂を指導し、課外活動の活性化を図った。
- 6) コンソーシアム主催の大分8大学の学生による「みんなのお祭り」に、本学学生、教職員も参加し、また本委員会メンバーも支援することができた。これが来年度開催される「看護科学大学地域ふれあい祭り」のきっかけにもなった。
- 7) 学生生活実態調査は本年度から毎年実施の方向で行うこととし、調査項目を見直すと共に改訂版を作成して6月中旬～7月上旬にかけて学生生活実態調査を行った。これによって学生の要望やニーズ等を把握することができた。
- 8) 宿泊オリエンテーションを来年度から導入することとし、その企画調整を行った。
- 9) 来年度からオフィスアワーを導入するための企画調整を行った。
- 10) 教務学生課との連携によって日本学生支援機構奨学金及びその他の奨学金の紹介や給付支援を行った。
- 11) 本年度行われた大学評価・学位授与機構による認証評価によって、学生支援等に対する改善点などを十分に把握・認識することができた。今後はオフィスアワーによる各授業科目の教員との学習相談体制を整備すると共に、ホームページにおける学生ペー

ジの整備・充実を図ることが重要である。

1-3 自己評価委員会

委員：粟屋 典子、佐伯 圭一郎、赤司 千波、伊東 朋子、吉田 成一、
小西 清美、吉村 匠平、工藤 節美、高橋 厚至郎（総務課）

本年度、当委員会は以下の活動を行った。

1) 年報の編集：

章ごとに分担して記事を集め編集を行い、10月にWebに公開した。本年度、大学評価学位授与機構の認証評価を受けることになり、その自己評価書の根拠資料となることを意識して編集を行った。自己評価書の作成作業と編集作業が重なり公開時期が大幅に遅れた。

編集作業の効率化を図ることが懸案であったが、次年度、情報ネットワーク委員会の協力を得て各教職員が直接入力するシステムにする予定である。

2) アニュアルミーティング：

平成17年度アニュアルミーティングを平成18年3月1日に開催し、奨励研究11題、プロジェクト研究2題、一般演題3題の発表と意見交換が行われた。昨年度は一般演題発表の応募がなかったため、本年度は教授会およびメールを用い、教員の個人研究発表を呼びかけたところ、上記のように一般演題発表があり、活発なものであった。

事後に採ったアンケートでは、発表時間に関する意見が多く、発表者に対し、委員会から進行に関する説明を丁寧に行う必要があると言える。また、ポスター発表の実施希望や、多くの先生に発表して貰いたいとの意見もあり、来年度以降、どの様な形が望ましいか、委員会で検討する必要がある。

3) 授業評価アンケート：

昨年度の試行を受け、授業担当者が各自の授業を見直すための基礎資料とすることを目的に、本年度から「学生による授業評価アンケート」の運用を開始した。アンケートは大学全体の傾向を把握するための共通質問項目（自己評価委員会で集計）と授業担当者が独自に作成する選択質問項目（担当者が各自で集計）の二部構成とした。本年度の実施実績は、前期が31コマ（対象学生数1980名）、後期が35コマ（対象学生数2119名）であった。

アンケート「共通質問項目」の集計結果は以下の通り（全て5段階評定、数値が高いほど肯定的）。出席状況「前期：4.7」「後期4.6」、授業への参加度「前期：3.7」「後期：3.8」、学生の満足度「前期：3.6」「後期：3.6」、主観的な習得度（学んだことがどの程度身についたと考えているか？）「前期：3.7」「後期：3.7」。各授業科目の「共通質問項目」の集計結果は、大学全体の集計結果と併せて授業担当者に個別にフィードバックした。授業評価アンケートの結果に関しては、各授業担当者が年報上の教育活動報告に反映させることになっている。なお次年度以降はマークシートによる集計を行う予定であり、それに伴ってアンケートの実施方法の変更を予定している。

4) F D活動：

平成17年12月23日（祝・金）に熊本大学医学部保健学科でのF D活動推進会議第5ブロックの会議において、各大学のF D研究能力開発についての情報を得た。また、看護現場を変えるために必要な研究、教員に求められる研究能力、組織的な人材育成についてディスカッションを行った。

教員対象のFD活動としては、アニュアルミーティングのほかに今年度は特に企画していない。次年度に向けて、新人教員のための教育計画の検討に取り掛かったところである。

5) 大学認証評価のための自己評価書の作成：

本年度大学認証評価を受けるにあたり、まず、昨年度末から取り組んだ自己評価書を作成した。分担執筆者からの原稿と機構側から示された各基準と観点の趣旨との確認、誤解を生じない文章にする作業や校正、根拠として提示する資料の収集・整理、提出するための製本作業など予想を遥かに超えた作業量であった。しかし、各委員の努力で7月末の提出期限までに無事提出することができた。

大学評価・学位授与機構からの訪問調査は10月26日～28日に行われた。訪問調査員により大学責任者、教職員、在学生、卒業生との面接、学内視察、授業視察などが行われた。

1-4 入試委員会

構成員は非公開としている。本委員会では平成17年度に実施した入学試験に関わる全ての事項について審議した。入学試験に際しては全学教職員の協力を得て、大過なく実施した。

1-5 図書委員会

委員：甲斐 倫明、高橋 敬、市瀬 孝道、中村 喜美子、林 猪都子、大賀 淳子、
吉留 厚子、平野 互、小野 永子（図書館）

事務局：牛島 聡子

図書館の管理運営に関する諸問題の検討、および図書・雑誌の購入に関する決定を行った。今年度の具体的な活動内容は以下の通りである。

- 1) 平成17年度の個人選定図書については科目群で責任者を決めて、科目群として本学図書館に備えるべき図書の選定を行った。委員会選定、視聴覚資料については教職員および学生からのリクエストなどをもとに図書委員会で選定した。
- 2) 公立大学協会図書館協議会、九州地区大学図書館協議会、大分県大学図書館協議会の会員校として、関連会議への参加および情報連絡・調整等を行った。
- 3) 休日開館について検討し、5月～7月の地域実習、総合実習期間中、12月～2月の国試

準備期間中の開館（計22日間）を行った。

- 4) 平成18年度の法人化に向けた検討を行った。とくに、法人化後の費目、図書と雑誌の予算配分、卒業生の相互利用、卒論生の相互利用の電子化、休日開館について検討し、平成18年度から実施できるための条件を整理した。
- 5) 継続図書および雑誌の一部見直しを行い、保健医療福祉関係で欠けているものを追加することにした。
- 6) 今年度の蔵書点検は、昨年度と同様にできるだけ合理化した作業を行うことで閉館の期間を短くし、1週間でいう方法をとった。
- 7) 本学に所蔵する図書を教員が学生に紹介するコーナー「図書紹介」を本学HP上に開設し、毎月実施している。

1-6 地域交流・公開講座委員会

委員： 稲垣 敦、G.T.Shirley、小林 三津子、平野 亙、伊東 朋子、高野 政子、
小西 清美、関根 剛、三浦 始（教務学生課）

1) 公開講座

一般を対象とした3回の公開講座の企画・広報・調整を担当した。テーマは「中高年の健康登山」（11/12）、「高齢者の家庭看護—移動と食事の援助—」（12/10）、「小児の救急法」（12/17）であり、全て実技指導を中心とし、万年山（玖珠町）および本学の看護実習室で実施した。講座終了後に、広報、時期、内容などの評価や改善を希望する点、今後取り上げてほしいテーマなどのアンケート調査を実施した結果、3回とも受講者の満足度は高かった。

2) エル・ネット「オープンカレッジ」

大学コンソーシアム大分の加盟校として、文部科学省の「地域における教育情報発信・活用促進事業」のモデル地域に応募し、受託した。本学では、エル・ネット「オープンカレッジ」のコンテンツとして上記3つの公開講座を選び、株式会社映像新社が収録・編集を担当した。3講座とも2月～3月にかけて全国の社会教育施設、学校など2000施設に通信衛星を介して2回ずつ配信された。このコンテンツは本学ホームページで公開し、本学図書館にもDVD・VHSとして配架する予定である。

3) 大分県教育庁生涯学習課・大分県立生涯学習センター関係

おおいた県民アカデミア大学インターネット講座に、本学教員が講師を務める講座を開講するにあたり、生涯学習センターとの連絡、講師の依頼などを行なった。開講した講座は以下のとおりである：関根 剛「犯罪被害者を支援する」（全4回）、稲垣 敦「中高年の健康登山」（全9回）。また、本学の総合人間学（公開講義）の「おおいた県民アカデミア大学」の連携講座への登録を延長することになった。

4) 若葉祭（大学祭）

より多くの学生が参加できるようにするため、本年度から若葉祭の開催は春になった（5/21～22）。若葉祭を地域交流の場として、また、大学をアピールする機会として重

視し、今年度から大学・研究室紹介や学生と教員の共催イベントを企画し、その調整にあたった。また、学生生活支援小委員会および広報委員会と協力して、学生による企画・準備・運営のサポートにあたった。

5) 大分七夕まつり

本年から旧・野津原町が大分市と合併したこともあり、地域との交流の一環として、大分市主催の「大分七夕まつり」(8/5~7)の「チキリンばやし市民総おどり大会」(8/6)に教員・学生・卒業生42名で初参加した。大分市商工部観光課との連絡、参加者募集、踊りの練習会や衣装準備、当日の対応などを担当した。

6) 大分地域大学等生涯学習協議会

県内13の高等教育機関などからなる大分地域大学等生涯学習協議会に参加して意見交換した。今年度は協議会主催の生涯学習プログラムを開催することが決定し、実行委員会が組織され、その準備が進められた。

7) 大分県工業団体連合会産学官連携推進会関係

産学官連携グループに参加および参加者を募集した。また、産学官連携推進会事務局と連絡をとり、各種イベントへの参加を呼びかけた。

8) 学外からの問い合わせへの対応

地域交流、産学連携、公開講座などに関する省庁、大学、研究所などからの照会、調査依頼などに対応した。

9) 講師依頼

外部からの講演・研修会などの講師派遣依頼の窓口となり、適切な講師を探した。

10) 施設利用

サイボウズによる学内施設利用の申請について随時審査を行い、総務課と連携して指導した。また、外部からの施設解放の要求について対応し、来年度以降の施設利用についても検討した。

1-7 研究倫理・安全委員会

委員：草間 朋子、伴 信彦、赤司 千波、大賀 淳子、関根 剛、吉田 成一、
吉留 厚子

学外委員：西 英久（大分大学）、二宮 孝富（大分大学）

事務局：玉田 逸子（総務課）

当委員会では、本学の教員及び学生が主体となって行う研究について、倫理・安全面の審査を実施している。今年度は、延べ100件の研究計画について審査を行った。

また、今年度は審査データを一元管理するデータベースを作成して審査事務の合理化を図るとともに、研究計画書等の様式類の見直しを行った。

1-8 広報委員会

委員：影山 隆之、安部 眞佐子、大賀 淳子、工藤 節美、小西 清美、
高橋 敬、中村 喜美子、玉田 逸子（総務課）

本学の活動について、県民、受験関係者、看護関係者等に広く周知を図るため、以下のような広報活動を展開した。

<Webを介した広報活動>

- 1) 大学Q&Aを5月に改訂し、Web上で学外・学内の閲覧に供した。
- 2) 大学見学申込みの案内を1月より大学Web上に掲載し、メールやファクスでの申込みもできるようにした。申込みのあった見学者（年間9グループ）には随時対応し、学内案内や進学相談に応じた。

<見学者対応ツールの開発>

- 3) 全教職員が学内見学業務に対応できるよう、主な見学箇所についての説明を集めた「学内名所ガイド」を編集し、年度末より学内ネットワークを介して共有できるようにした。

<行事を通しての広報>

- 4) 今年度初めて、若葉祭（5/21～22）において、研究室・サークル・研究プロジェクト等を紹介するパネル展を企画し、研究交流棟1階で展示した。学生実行委員会と協力し、若葉祭についての広報活動を行った。
- 5) オープンキャンパスを8/2に開催した。受験説明会・相談コーナーの他、全研究室の参加により、企画プログラムを大幅に増強した（模擬授業4種、参加・見学企画7種、ポスター展示10種；来場者数336名）。また、ミニオープンキャンパスを8/22および8/24に開催した（見学者数14名）。
- 6) 大分県看護協会が主催する「看護の日特別講演」（コンパルホール、5/14）にパネル出展し、本学の概要について紹介した。

<経常的な広報活動>

- 7) 本学の主な行事について、県政記者クラブを通じての広報、報道各社への直接の情報提供、および看護系雑誌への広告掲載を行った（入学式4/8、若葉祭5/21～22、姉妹校交流講演会5/30、オープンキャンパス8/1、ミニオープンキャンパス8/22および8/24、公開講義10～11月、公開講座10～11月、看護国際フォーラム11/5、ODA関連ウズベキスタン研修生11～12月、防災訓練12/14、100万語多読達成認定証書授与式1/24、卒業式3/17、および各入学試験）。マスコミの取材にも随時対応した。
- 8) 大学案内パンフレット作成WGとともに、「2005年大学案内」パンフレット10,000部を5月に完成させ、進学説明会・若葉祭・オープンキャンパス等できるだけ多くの機会に提供した。2006年版については制作日程を早め、2006年1月から検討を開始した。次年度新入生オリエンテーションの際に、学生が大学パンフレットをどの程度読んだことがあるか、等についてのアンケート調査を実施するための準備作業も同時に開始した。

9) 受験案内誌に有料広告を掲載した（2回）。

1) 大学案内パンフレット作成WG

構成員：高橋 敬、吉田 成一、福田 広美（以上平成16年5月まで）、小嶋 光明、
山下 早苗、三浦 始（教務学生課）、
（以下平成17年12月より）影山 隆之、玉置 奈保子、吉田 智子
B5版24ページの「2006年大学案内」パンフレットを平成17年5月までに作成した。
「2007年大学案内」の構想について、平成18年1月より検討を開始した。

1-9 情報ネットワーク委員会

委員：甲斐 倫明、佐伯 圭一郎、小林 三津子、伴 信彦、安部 眞佐子、
林 猪都子、吉村 匠平、足立 勝巳（総務課）

ネットワークの運営管理を統括する。また、新規計画の検討およびWGの設置などの情報ネットワークに関連する諸問題を統括する。実際の活動では、ネットワークの維持運営管理を主な任務とするため、WGを中心に活動を行った。実際の委員会運営もWGのリーダーを含めたメンバーで行った。

1) ネットワークシステムWG

担当内容：メール、サイボウズを含めたインターネット・イントラネット管理運営
構成員：小嶋 光明（リーダー）、甲斐 倫明

2) WindowsユーザーサポートWG

担当内容：教職員用PC（Windows）の管理（トラブル対応、新規ソフト対応など）
構成員：中山 晃志（リーダー）、佐伯 圭一郎、品川 佳満

3) MacユーザーサポートWG

担当内容：教職員用PC（Mac）の管理（トラブル対応、新規ソフト対応など）
構成員：伴 信彦（リーダー）、小嶋 光明

4) メディアセンターサポートWG

担当内容：メディアセンター（教材作成室を含む）の管理（トラブル対応、新規ソフト対応など）
構成員：品川 佳満（リーダー）、伴 信彦、吉村 匠平（教材作成室担当）

5) WebサイトWG

担当内容：本学のWeb内外サイト、携帯サイトの作成および管理運営
構成員：甲斐 倫明（リーダー）、定金 香里、G.T.Shirley、品川 佳満、高波 利恵、

岡崎 寿子、吉武 康栄、小嶋 光明、安部 眞佐子、佐藤 俊実（教務学生課）、足立 勝巳（総務課）

6) 看護メーリングリストWG

担当内容：大分県看護メーリングリストkango-mlの管理運営

構成員：小林 三津子（リーダー）、影山 隆之、吉田 智子

7) 実習センター・看護研究交流センターWG

担当内容：新規計画の立案およびマシンの管理

構成員：林 猪都子（リーダー）、佐伯 圭一郎

情報ネットワーク委員会が行った主な作業内容は以下の通りである。

1. 大分大学との遠隔講義システムを31講義室に導入した。豊の国ハイパーネットワーク回線を利用して、来年度から単位互換が可能な講義を本学で受けることができるようになる。
2. テレビ会議を中会議室に導入した。今年度は、ウズベキスタンの看護教育プロジェクトやその他の国内会議に利用した。
3. ファイアーウォールを更新した。
4. TVchatのプロトコル数種についてテストを実施し、本学として、使用を認めるものとして、Skype+Vskypeのみとすることにした。これは、Firewallの変更を必要としない点と音声・画質が優れているという理由である。ただし、現在は、Macintoshには対応していない。
5. 特色GP予算で、ポスタープリンタ、21、22、23講義室のプロジェクター更新を行った。
6. CALL用に、10台のノートPCを導入した。無線LANで使用する。PCの学生への貸出体制を整備した。
7. 学内の無線LANステーションを更新し、快適なスピードで接続できるように整備した。
8. 法人化に向けて、事務職用の全文検索可能なファイルサーバを整備した。
9. 教職員PCのEudora V6J、AcrobatV7へのバージョンアップを実施した。
- 10.同窓会ネット連絡網（alumni）の整備を同窓会の協力で行った。
- 11.学生の携帯メールへの転送システムのトラブル対応を随時行った。
- 12.メールアドレスの管理（追加・削除）を行った。
- 13.Webの作成、更新（英文ページの作成など）を行った。
- 14.携帯電話対応のWeb（休講情報など）の作成、更新を行った。
- 15.教職員マシンのトラブル対応を行った。
- 16.イントラネット・インターネットのトラブル対応を行った。
- 17.看護メーリングリストの運営を行った。

1-10 国際交流委員会

委員：草間 朋子、G.T.Shirley、桜井 礼子、八代 利香、宮内 信治、吉村 匠平

本年度の活動として、ソウル大学と本学との学生交流では、例年ソウル大学から1週間の学生受け入れに加えて、大学院生1名を約1ヶ月受け入れた。

第7回看護国際フォーラムでは、大分県看護協会との共催で企画・運営を行った。また、姉妹校であるペース大学（6月）、ケースウェスタン大学（11月）から教員が来日し、学内でナース・プラクティショナー（NP）に関する講演を行った。

ソウル大/看科大研究交流会は、今年度はインターナショナル・ミーティングとしてソウル大学に加えて、姉妹校であるペース大学、ケースウェスタン大学から講師を招へいし、講演会を開催した。

1-11 就職対策委員会

委員：宮崎 文子、高野 政子、影山 隆之、平野 瓦、安部 真佐子、
藤内 美保、三浦 始、竹下 敏彦（教務学生課）

学生の就職・進学に関する情報収集・提供と学生への個別相談・支援の企画・実施を中心に活動した。主な内容は以下の通りである。

- 1 学生の就職希望状況について把握し、適時に情報収集し、また病院等からの求人訪問を受け、これらの情報を就職データベースやEメールにより学生に提供した。
- 2 改訂した就職・進学ガイドブックを4年次生に印刷配布し、Web上でも学生に提供した。
- 3 7月には、第1回就職ガイダンスを開き、就職2年目の卒業生8名を本学に招き、2・3年次生を対象に、各施設の特色や活動体験談を話してもらった。
- 4 面接・小論文マニュアルを4年次生に配布し、希望者には就職模擬面接を企画・実施した。
- 5 10月以降は、大学教員には、就職状況の進捗について逐次報告し、卒業研究の指導員を中心に、後方支援をするために役立ててもらった。
- 6 2月には、第2回の就職ガイダンスを開き、4年次生7名を招き、2・3年次生に就職活動の体験談を話してもらった。
- 7 就職・進学ガイドブックの見直し・改訂を行った。
- 8 今年度の就職決定者は100%であった（県外51%、県内49%）。

1-12 その他

1) インターネットジャーナルWG

構成員：草間 朋子、甲斐 倫明、G. T. Shirley、桜井 礼子、伴 信彦、稲垣 敦、
定金 香里、高波 利恵

本年度は、新に設置した「看護研究交流センター」に発行元を移すとともに、名称を

「大分看護科学研究」から「看護科学研究」に変更し、より広域的、全国的なジャーナルを目指すことにした。また、執筆要項も改訂し、PubMed掲載の準備を進めた。一方、各種イベントでのジャーナルの広報、執筆の依頼、編集委員会の準備と開催、第6巻第2号、第7巻第1号の企画・編集に関する実務も例年通り行われた。インターネットジャーナル「看護科学研究」第6巻第2号は平成18年3月に刊行され、本学ホームページ上で公開された。

2) 短期海外派遣研究員選考会

構成員：草間 朋子、栗屋 典子、甲斐 倫明、市瀬 孝道

派遣期間と派遣人数はそれぞれ1ヶ月、3名としている。選考基準として(1) 目的、意欲、(2) 本人の将来の研究への貢献、(3) 本学における教育への貢献、(4) 準備の進捗状況、(5) 海外研究の必要性の5点を考慮して、申請者が提出した研究概要書を審議した。平成17年度は関根剛、山下早苗、福田広美の3名を選考し、教授会に推薦し、決定した。

1-13 研究科委員会

委員：草間 朋子、各研究科教授、助教授、講師、事務局長

事務局：小野 順一（総務課）

本委員会の役割は、大学院運営に係わる重要事項の意思決定を行うことである。本年度は、修士および博士課程学生の指導教員に関する事項、修士論文の審査に関する事項、入試に関する事項、大学院履修規定の改定、専門看護師および助産師教育に関する事項、TAに関する事項について審議、決定を行った。

1-13-1 研究科準備委員会

委員：草間 朋子、栗屋 典子、甲斐 倫明、小西 恵美子、影山 隆之、
三浦 洋一（事務局長）

本委員会は、研究科委員会より委譲されている事項について審議し、その結果を研究科委員会に報告することを役割としている。本年度は、修士および博士課程学生の指導教員に関する事項、修士論文の審査に関する事項、入試に関する事項、大学院履修規定の改定、専門看護師および助産師教育に関する事項、TAに関する事項について審議した。

1-14 看護研究交流センター企画委員会

委員：草間 朋子、桜井 礼子、栗屋 典子、高橋 敬、林 猪都子、三浦 洋一

本委員会では下記の活動を行った。

1. 地域貢献（看護専門職の教育）

1) 研究支援等（指導者派遣）

研究の指導者として、大分赤十字病院、国立病院機構大分医療センター、国立病院

機構西別府病院、臼杵市医師会コスモス病院、大分県立病院、天心堂へつぎ病院にそれぞれ1～3名の教員、計12名の教員を派遣した。また、大分県福祉健康課が実施主体となる「大分県中小規模病院新人ナース研修体制づくり支援」に3名の教員を派遣した。

2) 研修会等の講師派遣

大分県看護協会が実施する研修で以下の研修に講師を派遣した。

- ・実習指導者講習会
- ・看護力再開発カリキュラム
- ・訪問看護研修ステップⅠ
- ・リスクマネジメント
- ・看護管理（ファーストレベル）
- ・看護研究
- ・訪問看護研修ステップⅡ呼吸管理

2. 国際協力・交流活動

1) JICAプロジェクトへの参加

- ・ウズベキスタン「看護教育改善プロジェクト」

プロジェクト期間：2004年7月～2009年6月

ウズベキスタン派遣

2005年 7～8月 5名

2005年12月 3名

2006年 3月 9名予定

2) 海外からの研修員の受け入れ

(1) JICA技術研修「ウズベキスタン看護教育改善」研修員4名

①研修の概要

JICAの技術協力プロジェクト、「看護教育改善」の一環として、看護教育改善の実践的役割を担う人材を育成するための研修として、ウズベキスタンの看護教育センターで活動するカウンターパートを研修員として受け入れた。主な研修目的は、日本における医療・保健・福祉システムと看護職の役割を理解し、看護教育システム、カリキュラムを習得することによって、ウズベキスタンにおける看護教育の改善のための知見を得ることと、各領域の責任者として各専門領域についての知識・理解を深め、今後より一層各域でリーダーシップが発揮できるようになることである。

②研修期間と主な受け入れ先

研修期間：2004年9月5日（月）～12月16日（金）の延4ヶ月（15週間）

- ・大分県立看護科学大学（8週間） 前半：9月14日（火）～10月7日（金）
後半：11月21日（月）～12月15日（木）
- ・長崎大学（2週間） 10月11日（火）～10月21日（金）
- ・成田赤十字病院、虎の門病院等（4週間）10月24日（月）～11月18日（金）

③県内の研修受け入れ施設：大分県立病院、湯布院厚生年金病院、生野助産院、百華苑、くまがい産婦人科、九重町保健センター、日田玖珠県民保健福祉センター玖珠保健支所、大分丘の上病院、堀永産婦人科医院、ゆふみ病院、訪問看護ステーションひまわり、

(2)JICA技術研修「ウズベキスタン 看護管理」研修員5名

①研修概要

JICAの技術協力プロジェクト、「看護教育改善」の一環として、特に行政に関わりプロジェクトを中心的に進めていく人材を短期研修員として受け入れた。主な研修目的は、日本の保健・医療・福祉システムと看護職の役割、および看護教育システム、カリキュラムについて理解を深め、ウズベキスタンの看護教育改善の取り組みに役立てることである。

②研修期間と受け入れ期間

研修期間：11月20日（日）～12月2日（金）、

本学での受け入れ期間：11月22日～25日（4日間）

③県内の研修受け入れ施設：大分県立病院、湯布院厚生年金病院

(3)カザフスタン看護研修 1名

研修期間：2005年11月22日（火）～12月8日（金）

県内の研修受け入れ施設：大分県立病院、湯布院厚生年金病院、訪問看護ステーションおおいた、ゆふみ病院

(4)韓国地域保健看護学会研修 研修員6名

研修期間：2006年2月1日（水）～5日（日）

県内の研修受け入れ施設：訪問看護ステーションおおいた、大分協和病院、日出町役場、日出町保健センター、別府県民保健福祉センター日出保健支所

3. 継続教育

1) 卒業生へのアンケート調査

卒業生にどのような継続教育を希望するか、テーマ、時期等について平成17年7月16日の同窓会の場でアンケート調査を実施し、1～4回生までの約100名から回答を得た。主な調査結果として、卒後研修への参加希望の有無では、「参加したい」53%、「参加したくない」23%、「その他」24%であった。また、研修の開催日は「土曜日」30%、「日曜日・祝日」30%、「平日」21%であった。継続教育の希望内容として「リスクマネジメント」25%と最も多く、次いで「看護科学研究」21%、「看護技術」「病態機能学」が15%、「看護記録」13%であった。

アンケート結果をもとに、卒業生の継続教育の一環として、セミナーの開催を企画した。

2) 第1回看護研究交流センターセミナー

日 時：平成18年2月11日（土）13時～16時

会 場：看護研究交流センター講義室（大分県立病院敷地内）

講 演：「質の保証とリスクマネジメント」浜の町病院看護部長 神坂登世子

「リスクマネジメントの実際ーリスクマネージャーの活動を通してー」

虎の門病院リスクマネージャー 橋本末子

参加者：30名（卒業生4名、学部学生2名、教員12名、実習病院等12名）

セミナーの開催状況と今後の課題

アンケート結果から、内容については満足、ほぼ満足との結果が得られた。しかし、卒業生の参加が少なかった。メールにて連絡をしたが、連絡が届かないとの声もあり、広報をどのように行っていくかが課題となる。また、今回は実習病院の方々にも参加を呼びかけ参加していただいた。今後もテーマによっては広く実習病院にも参加していただき、看護研究交流センターを知ってもらう機会としたいと考えている。

2 学内外行事の概要

2-1 学 年 歴

前期

休日もしくは講義を行わない日

4月

日	月	火	水	木	金	土		
					1	2	8	入学式
3	4	5	6	7	8	9	11~12	オリエンテーション
10	11	12	13	14	15	16	12	前期授業開始
17	18	19	20	21	22	23	12~22	前期履修登録
24	25	26	27	28	29	30	13, 20	学生定期健康診断

5月

日	月	火	水	木	金	土		
1	2	3	4	5	6	7	16~	地域看護学実習及び 老人看護学実習Ⅱ（4年次生）
8	9	10	11	12	13	14		
15	16	17	18	19	20	21	21~22	若葉祭
22	23	24	25	26	27	28		
29	30	31						

6月

日	月	火	水	木	金	土		
			1	2	3	4	~17	地域看護学実習及び 老人看護学実習Ⅱ（4年次生）
5	6	7	8	9	10	11		
12	13	14	15	16	17	18	13	前期後半授業開始
19	20	21	22	23	24	25	20~	助産学実習（4年次生選択）
26	27	28	29	30			19	開学記念日
							27~	総合実習（4年次生）

7月

日	月	火	水	木	金	土		
					1	2	~ 8	総合実習（4年次生）
3	4	5	6	7	8	9	12~20	初期体験実習（1年次生）
10	11	12	13	14	15	16	21	夏季休業開始
17	18	19	20	21	22	23		
24	25	26	27	28	29	30		
31								

8月

日	月	火	水	木	金	土			
		1	2	3	4	5	6	1	オープンキャンパス
7	8	9	10	11	12	13			
14	15	16	17	18	19	20			
21	22	23	24	25	26	27			
28	29	30	31						

9月

日	月	火	水	木	金	土		
				1	2	3	3	大学院（修士）入学試験
4	5	6	7	8	9	10	4	編入学、大学院（博士）入学試験
11	12	13	14	15	16	17	6	講義開始
18	19	20	21	22	23	24	12~	成人・老人Ⅰ、小児、母性及び 精神看護学実習（3年次生）
25	26	27	28	29	30		~16	助産学実習（4年次生選択）
							30	前期授業終了

後期

10月

日	月	火	水	木	金	土		
						1	3	後期授業開始
2	3	4	5	6	7	8	3~14	後期履修登録
9	10	11	12	13	14	15		
16	17	18	19	20	21	22		
23	24	25	26	27	28	29		
30	31							

11月

日	月	火	水	木	金	土		
		1	2	3	4	5	5	看護国際フォーラム
6	7	8	9	10	11	12	20	特別選抜試験(推薦・社会人)
13	14	15	16	17	18	19		
20	21	22	23	24	25	26		
27	28	29	30					

12月

日	月	火	水	木	金	土		
				1	2	3	~ 2	
4	5	6	7	8	9	10		精神看護学実習(3年次生)
11	12	13	14	15	16	17	5	後期後半授業開始
18	19	20	21	22	23	24	12~13	卒業研究発表会
25	26	27	28	29	30	31	24	冬季休業開始

1月

日	月	火	水	木	金	土		
1	2	3	4	5	6	7	10	授業開始
8	9	10	11	12	13	14	10~	基礎看護学実習及び
15	16	17	18	19	20	21		
22	23	24	25	26	27	28	20	
29	30	31					21~22	センター試験

2月

日	月	火	水	木	金	土		
			1	2	3	4	~17	基礎看護学実習及び
5	6	7	8	9	10	11		
12	13	14	15	16	17	18	25	一般選抜試験(前期)及び
19	20	21	22	23	24	25		
26	27	28					下旬(予定)	
							28	後期授業終了

3月

日	月	火	水	木	金	土		
			1	2	3	4	1	春季休業開始
5	6	7	8	9	10	11	12	一般選抜試験(後期)
12	13	14	15	16	17	18	17	卒業式
19	20	21	22	23	24	25		
26	27	28	29	30	31			

2-2 オープンキャンパス

本学への進学希望者、その家族、高校等の教員などを対象に、本学の特徴と教育内容・施設等を紹介するためにオープンキャンパスを開催し、また当日来学できなかった人のためにミニオープンキャンパスを開催した。

【オープンキャンパス】

日時 平成17年8月1日（月） 午前の部10:00～12:30、午後の部14:00～16:30

内容 説明会（30分）

学長から（草間 朋子）、教員から（影山 隆之）、
学生から（2年次生：後藤 成人）、入試について（三浦 始）

模擬授業（各30分）

食後の血糖値の動き（生体科学研究室）

対人関係のエクササイズ（人間関係学研究室、学生ボランティア4名）

多読教材を用いた英語学習法（言語学研究室）

心の病について（精神看護学研究室）

体験・見学コーナー（各研究室教員、学生ボランティア13名）

高齢者の擬似体験（地域看護学研究室）

基礎的看護演習の体験（基礎看護学および看護アセスメント学研究室）

妊婦体験・赤ちゃんの抱きかた（母性看護・助産学研究室）

赤ちゃんの検温・聴診など（小児看護学研究室）

原子と放射線について（環境科学研究室）

病気の組織の顕微鏡観察する（生体反応学研究室）

イントラネットによる教材閲覧と演習デモ（健康情報科学研究室）

体力テスト体験（健康運動学研究室）

ポスター展示（研究交流棟 1F：15点展示）

相談コーナー（カレッジホール：教務学生課、影山 隆之、中村 喜美子、
高橋 敬、大賀 淳子、安部 眞佐子、市瀬 孝道、甲斐 倫明、
平野 亙、学生ボランティア2名）

学内自由見学（教職員、学生ボランティア2名）

参加者 午前134名、午後202名、計202名（高校生160名、保護者39名、教員3名；
県内178名、県外24名）

【ミニオープンキャンパス】

日時 平成17年8月22日（月）および24日（水）、いずれも13:00～15:00

内容 大学紹介および学内見学：22日 中村 喜美子、安部 眞佐子
24日 工藤 節美、大賀 淳子

参加者 22日7名、24日9名（高校生13名、保護者3名）

2-3 公開講座

本年度も一般を対象とし、実技指導中心の公開講座を3回開講した。特に今年度は、大学コンソーシアム大分の加盟校として、文部科学省の「地域における教育情報発信・活用促進事業」のモデル地域に応募し、受託した。本学では、エル・ネット「オープンカレッジ」のコンテンツとして下記の公開講座を選び、株式会社映像新社が収録・編集を担当した。3講座とも2-3月にかけて社会教育施設、学校など全国2000施設に通信衛星を介して2回ずつ配信された。これらは本学ホームページで公開し、本学図書館にもDVD・VHSとして配架する予定である。今回は撮影があったため受講者が少なかったが、講座直後のアンケート調査では、いずれも好評であった。

【第1回】

テーマ：中高年の健康登山

日時：平成17年11月12日（土）9～16時

会場：万年山（玖珠町）

講師：稲垣 敦、高橋 敬、大賀 淳子

SG：宮崎 文子、伊東 朋子

受講者：14名

【第2回】

テーマ：高齢者の家庭看護 ー移動と食事の援助ー

日時：平成17年12月10日（土） 14～16時

会場：本学実習室

講師：小林 三津子、藤内 美保、小西 清美、安部 恭子、秦 桂子

SG：伴 信彦、岩崎 香子、三浦 始

受講者：16名

【第3回】

テーマ：小児の救急法

日時：平成17年12月17日（土） 14～16時

会場：基礎・成老人看護学実習室

講師：高野 政子、山下 早苗、中原 基子

SG：宮内 信治、定金 香里、品川 佳満、稲垣 敦

受講者：16名

2-4 第7回看護国際フォーラム

今年度は、「在宅看護の質向上のために」をテーマに、米国、韓国での在宅看護の現状と課題、また国内からは、厚生労働省および看護協会から訪問看護の現状と課題、および

政策について講演をいただき、今後の在宅看護のあり方と質向上のためにどのような活動が必要かについて考える機会とした。本年も大分県看護協会との共催とした。

全体の参加者数は、276名であり、一般看護職および教育機関からは県内132名、県外23名、また、本学からは学生77名、教職員45名（SGを含む）の参加であった。参加施設としては、訪問看護ステーションやステーションを併設する病院からの参加が多かった。

アンケート結果は、137名（50%）から回答を得た。テーマの設定・講演の内容については、「とても満足」31名（23.1%）、「ほぼ満足」100名（74.6%）「やや不満足」3名（2.2%）でほぼ満足との回答が多かった。「やや不満足」と回答したものは、通訳が聞きづらかった、日本語の資料が欲しかったといった内容であった。また、総合討論の内容、進め方については、「とても満足」23名（19.3%）、「ほぼ満足」92名（77.3%）「やや不満足」4名（3.4%）でほぼ満足との回答が多かった。主な意見として、討論によりさらに理解が深まった、討論の時間がもう少し長いとよかったなどであった。

フォーラムの概要

日時：2005年11月7日（土）13時～17時

会場：別府ビーコンプラザ国際会議場

テーマ：「在宅看護の質向上のために」

Advancing Home Care Nursing : Issues and Trends

講演：「米国の在宅看護の現状と課題」 Elizabeth Madigan, RN, PhD

(Case Western Reserve University)

「韓国の在宅看護の現状と課題」 Ho-Sihn Ryu, RN, PhD (Korea University)

「日本における訪問看護の現状と課題」 山崎 摩耶（前日本看護協会常任理事）

「訪問看護に関するわが国の政策」 山田 雅子（厚生労働省医政局看護課）

総合討論

司会 工藤 節美（大分県立看護科学大学）、山口 真由美（大分県立病院）

2-5 ソウル大/看科大研究交流会（インターナショナル・ミーティング）

本年度は、NPプロジェクト活動の一環として「第2回International Nurse Practitioner Meeting」を開催した。

2-6 NPプロジェクト、NP国際プロジェクト

構成員：林 猪都子、八代 利香、赤司 千波、甲斐 倫明、工藤 節美、桜井 礼子、G.T.Shirley、高野 政子、藤内 美保、宮内 信治、草間 朋子

大学院修士課程におけるナースプラクティショナーのための教育プログラムを開発し、制度化に向けての活動を推進するために、平成17年5月よりNPプロジェクトを立ち上げ、米国や韓国の姉妹校等と連携して活動している。メンバーは月1回の頻度でミーティング

を行い、また、NP国際プロジェクトとして、ペース大学（米国）、ケースウェスタン大学（米国）、ソウル大学（韓国）、高麗大学（韓国）のメンバーと4回プロジェクト会議を開催した。現在、米国、韓国におけるナースプラクティショナーの活動と教育プログラムについて調査、検討中である。

NPプロジェクト関連活動

1) 姉妹校交流講演会

本学と姉妹校提携を結んでいるペース大学より講師2名を迎え、“Professional Autonomy of Nursing”を講演会テーマとして、姉妹校交流講演会を開催した。本講演は、医療の場において看護職者により高度な専門性が求められている現状を踏まえ、社会のニーズに応えるべく看護職の自律性をめざす取り組みの一環として開催された。当日は多数の本学教職員の参加のもと、講演後に活発な質疑応答がなされた。

日時：平成17年5月30日（月）13時30分～16時

演題および演者

1. “Nurse Practitioners and Practice in the United States.”

Dr. Jamesetta Newland, Director,
Primary Health Care Associates, Pace University

2. “Overview of Advanced Nursing Education in the USA.”

Dr. Lillie M. Shortridge-Baggett, Professor and Co-Director of
International Affairs, Pace University

2) 第1回 International Nurse Practitioner Meeting

第7回看護国際フォーラム開催に先立ち、11月4日（金）午後、Case Western Reserve UniversityよりElizabeth Madigan助教授、高麗大学よりHosihn Ryu教授、ソウル大学よりKyung Ja Han教授の3名を本学に迎え、本学NPプロジェクト委員との間で意見交換を行った。まず本学の高野講師による報告“Japanese Nursing System: Development of human resources with advanced specialization.”（「日本の看護システムの現状：上級専門看護職者育成のために」）が行われ、その後、米国や韓国におけるNurse Practitionerの現状や課題などが質疑応答を介して紹介された。討論の後、4大学（Pace University, Case Western Reserve University, ソウル大学, 高麗大学）との対応窓口として、本学側対応担当者を決定し、今後のNPプロジェクトの活動について申し合わせを行った。

3) Hosihn Ryu先生講義（第4回NPプロジェクト会議）

韓国地域保健看護学会の日本視察のため来日された高麗大学Hosihn Ryu教授より、平成18年2月2日（木）午後、本学にて、韓国におけるAdvanced Nursing Specialist

Course（ANSC：専門看護師養成修士課程）導入の過程、現状と課題についての講義が行われた。韓国政府から承認を受け大韓看護協会によって運営されている看護師評価機構「韓国看護評価院」の存在や、NPは事業主(Owner)として開業できることなど、貴重な参考情報がもたらされた有意義な講義であった。

4) 第2回International Nurse Practitioner Meeting

例年行われてきた「大分看科大/ソウル大学研究交流会」を拡大し、本年度は本学にて、「第2回International Nurse Practitioner Meeting」を開催した。本学NPプロジェクト支援協力大学のうち3大学などから5名の講師を招き、“Curriculum Development: Nurse Practitioner Education in the MSN Program”をテーマに、情報交換と討論が行われた。なお、本学からも1名の演者が、日本における訪問看護について発表を行った。

日時：平成18年3月16日（木）13時～17時

演題および演者

1. “Education and Activities of Visiting Nurses in Japan.”
Miho Tonai, Assistant Professor
Oita University of Nursing and Health Sciences
2. “Education and Activities of Pediatric Nurse Practitioners in the United States”
Carol Savrin, Assistant Professor,
Frances Payne Bolton School of Nursing, Case Western Reserve
University
3. “A Proposal of Education and Core Competencies of Pediatric Nurse Practitioners in Korea.”
Kyung Ja Han, Professor,
College of Nursing, Seoul National University
4. “Education and Activities of Family Nurse Practitioners in the United States.”
Jamesetta Newland, Associate Professor,
Lienhard School of Nursing, Pace University
5. “Education and Core Competencies of Geriatric Nurse Practitioners in Korea.”
Yeon Hwan Park, Assistant Professor,
College of Nursing, Seoul National University
6. “Physician Acceptance of Nurse Practitioners in the United States.”
Ronald A. Savrin, MD, MBA,
The Academy of Medicine of Cleveland

2-7 姉妹校学生交流

【第6回 ソウル大学との学生交流】

1 ソウル大学からの学生受け入れ

受け入れ期間 短期：平成17年6月19日（日）～6月26日（日）

長期：平成17年6月19日（日）～7月19日（日）

受け入れ学生 短期：7名，大学院生1名，教授1名

Assistant Professor	Dr. Chung, Chae Weon (Maternity Nursing)
Master's Student (TA)	Han, Dal Long (Psychiatric Nursing)
Senior	Park, Min Ah
Senior	Oh, Eun Jung
Senior	Ahn, Ji Yeon
Senior	Han, Jung Youn
Junior	Kim, Bo Na
Junior	Chung, Ji Hey
Junior	Hwang, So Jin

長期：大学院生1名

Master's Student	Kim, Myung Ja (Nursing Management)
------------------	------------------------------------

短期学生は、実習センターに宿泊し、日本での看護実践の現場を見学した。主な訪問施設は、大分県立病院、湯布院厚生年金病院、佐伯保健所、佐伯市保健センター、生野助産院、百華苑（老健施設）である。また、教員によるウェルカムパーティ、学生による風の広場でのバーベキューパーティ、阿蘇・久住、別府の観光などを通して、教員間、学生間の交流が図られた。

長期学生は、本学の教員宿舎（ゲストルーム）に宿泊先を移動し、人間関係学、国際看護学、保健管理学、看護アセスメント、言語学の各研究室に滞在した。学生の関心に合わせ、独自のスケジュールを作成した。訪問施設は、精神保健福祉センター、自衛隊別府病院、大分大学医学部附属病院、塚川病院、虎の門病院、自衛隊中央病院である。また、看護管理分野の研究動向、本学における保健・看護情報学についての個人講義を受けた。大分国際保健ネットワークサークルの学生などと交流を図ったり、週末には観光やホームステイを体験したりし、日本の文化に親しんだ。

2 本学よりソウル大学への学生派遣

平成17年度のソウル大学派遣メンバーは、19名の応募者の中から6名を選考した。今年度は、1年次生からの応募が多く、4年次生からの応募はなかった。

派遣期間：平成17年8月21日（日）～28日（日）

学生氏名：3年次生；大塚 未紀、平山 智美

2年次生；岩瀬 慶子、吉永 礼香

1年次生；加来 千佳、高石 奈々

教員は、環境科学研究室教授甲斐倫明、国際看護学研究室講師八代利香の2名が大分から同行した。

韓国での主な訪問先は、ソウル大学病院、ソウル市内保健所、三星医療センター、三星高齢者施設、およびソウル大学本部交際交流センター、ソウル大学附属博物館である。また、学生は、京福宮、民族博物館、ナミ村などの観光や、民族衣装を着用しながらの韓国流茶道体験などを通して、韓国の文化に触れるとともに、ソウル大学生との交流を深めた。

2-8 第8回若葉祭（大学祭）

開学以来、毎年秋に開催していた大学祭が、今年から開催時期を5月の第3土・日曜日とし、自治会傘下の若葉祭実行委員会（酒見大輔委員長）を中心に、学生・教職員全員参加により開催された。

学生と教職員のコラボイベント等、新しい企画も多い中、過去の経験と反省を踏まえて準備をし関係者の暖かいご支援・ご協力により、大いに盛り上がり成功裡に終了した。

日 時 平成17年 5月21日（土）～22日（日）

参 加 者 延べ約1,500名

イベント等

- ・ 実行委員and自治会プレゼンツ
- ・ 大分トリニータの選手と坂本休・前中津江村長によるイベント
- ・ 若手お笑いライブ（ダイノジ・タカアンドトシ）
- ・ 抽選会
- ・ カラオケ
- ・ 絵心対決
- ・ Mr.& Ms.ナースコンテスト
- ・ ライブ ～FUZZTY STYLE～
- ・ Dance☆
- ・ 僕らはいつも以心伝心
- ・ 箱の中身は何でしょう?!
- ・ ビンゴ大会！！
- ・ 健康チェック
- ・ お茶会

3 教育活動

3-1 平成17年度入学者選抜状況

1) 概要：選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学 部	学 科	入学定員	募 集 人 員			
			一 般 選 抜		特 別 選 抜	
			前期日程	後期日程	推 薦	社 会 人
看護学部	看護学科	80人	40人	10人	30人	注) 若干名

注) 社会人の募集人員「若干名」は推薦の30人に含まれます。

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分		志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
						計	県 内 (率)	男 (率)
特 別	推 薦	69	69	27	2.6	27	27 (100.0)	2 (7.4)
	社会人	14	14	4	3.5	3	2 (66.7)	0 (0.0)
	計	83	83	31	2.7	30	29 (96.7)	2 (6.7)
一 般	前 期	135	118	40	3.0	37	16 (43.2)	9 (24.3)
	後 期	126	52	17	3.1	16	1 (6.3)	0 (0.0)
	計	261	170	57	3.0	53	17 (32.1)	9 (17.0)
合 計		344	253	88	2.9	83	46 (55.4)	11 (13.3)

試験教科等

区 分	教 科	試 験 期 日	出 願 期 間
特 別	推 薦	総合問題、面接 平成16年 11月14日 (日)	平成16年 11月1日 (月) ~ 11月5日 (金)
	社会人		
一 般	前 期	総合問題、面接 平成17年 2月25日 (金)	平成17年 1月24日 (月) ~ 2月2日 (水)
	後 期	総合問題、面接 平成17年 3月12日 (土)	

2) 特別選抜試験

- ① 推薦選抜：大分県内の高等学校卒業見込者の中から、調査書の全体の評定平均値が4.0以上で、各高等学校長から推薦された生徒を対象に、総合問題と面

接により実施した。

- ②社会人選抜：社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人選抜を実施した。

年齢が満24歳以上で、社会人の経験を3年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、総合問題と面接により実施した。

3) 一般選抜試験

平成17年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに総合問題と面接により実施した。

日 程	教科名	科 目 名	教科・科目数	
前 期 日 程	国 語	『国語Ⅰ・国語Ⅱ』（近代以降の文章）	4教科4科目	
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、「数学Ⅱ」、『数学Ⅱ・数学B』 から1科目を選択		
	理 科	「物理ⅠB」、「化学ⅠB」、「生物ⅠB」 から1科目を選択		
	外国語	『英語』		
後 期 日 程	国 語	『国語Ⅰ・国語Ⅱ』（近代以降の文章）	4教科4科目	
	地理歴史 公 民	「世界史A」、「世界史B」、「日本史A」、 「日本史B」、「地理A」、「地理B」、 「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」 から1科目を選択		3教科 3科目 を選択
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、「数学Ⅱ」、 『数学Ⅱ・数学B』から1科目を選択		
	理 科	「物理ⅠB」、「化学ⅠB」、「生物ⅠB」 から1科目を選択		
	外国語	『英語』		

注1) 「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注2) 「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に用います。なお、後期日程については、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位3教科を合否判定に用います。

注3) 「地理歴史」と「公民」の両方を選択することはできません。

注4) 前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

3-2 平成17年度3年次編入学試験状況

概要

就業看護職員等の生涯学習に対する強いニーズに対応するため、3年次編入学試験を、看護系短期大学、看護系大学又は看護系専修学校の専門課程を卒業した者及び卒業見込者を対象に、英語、総合問題及び面接により実施した。

募集人員

学 部	学 科	募 集 人 員
看護学部	看護学科	10人

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県 内 (率)	男 (率)
短期大学	4	3	2	—	1	1 (100.0)	0 (0.0)
専修学校	18	18	4	—	3	1 (33.3)	0 (0.0)
合 計	22	21	6	3.5	4	2 (50.0)	0 (0.0)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
英語 総合問題 面接	平成16年 9月5日(日)	平成16年 8月2日(月)～8月9日(月)

3-3 平成17年度大学院博士課程(前期)入学試験状況

概要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等又は看護師、保健師、助産師の資格を有し3年以上の実務経験がある者を対象に、「英語」、「総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	6名

試験の概略

（単位：人、倍、％）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内（率）	男（率）
修士課程	5	5	4	1.3	4	4（100.0）	0（0.0）

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
英語 総合問題 面接	平成16年 9月4日（土）	平成16年 8月2日（月）～8月9日（月）

3-4 平成17年度大学院博士課程（後期）入学試験状況

概要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に、「英語・総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2名

試験の概略

（単位：人、倍、％）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内（率）	男（率）
修士課程	6	4	4	1.0	4	3（75.0）	0（0.0）

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
英語 総合問題 面接	平成16年 9月5日(日)	平成16年 8月2日(月)～8月9日(月)

3-5 学部における教育活動

3-5-1 生体科学研究室

生体科学研究室では身体の構造と、それに課せられた機能をシステムの的に理解させるために、骨格系からスタートし、筋肉、循環、神経系、消化・吸収などを重点的に講義した。今年度からは、「からだの地図帳」、「健康の地図帳」、「病気の地図帳」を学生に副読本として全員に購入させた。復習するのに効果があり、また進級試験の基盤になると言う認識が得られるように指導した。

骨格や筋系のプラスチックモデルを繰り返し活用すること、解剖実習見学（大分大学医学部）に参加すること、あるいはパワーポイントによるビジュアルな講義を通して、できるだけ具体的な知識を会得してもらうことを目指した。

1) 学習意欲を引き出し、また自ら手や目を使って勉学するために、ヒト、チンパンジー、オランウータン、ゴリラの頭骸骨の立体折り紙モデルを提示し、作成してもらい、レポート材料の一つとした。

2) 小実験を講義中に導入した。本年度も(1)赤血球細胞を低張液に暴露し、溶血現象を目で観察した。ビデオでも学ばせた。(2)フィブリノーゲン溶液にトロンビンを加え、凝固するまでの時間を腕時計で測り、バラツキ（測定の個人差）があることを示した。

3) メビウス環を用いて、裏と面の不思議さを体験させ、身体の構造の整合性、すなわち形ができる論理を理解してもらった。

4) ビデオ材料（1分以内）をパワーポイントに挿入し、生命現象の実態を目と耳（英語）で知ってもらった（例：巨核球からの血小板の生成）。細胞が自ら死に、その破片を血小板として放出する過程は印象的だった。英語のナレーションの理解には難点があったが、実際実験を行い、手で触れ、あるいは目で観たりすることは、自然科学に対する興味をもちやすく、また疑問を引きだしやすい。このことがより深い理解に必要である。これらについてもレポートの材料にさせ、自主的な勉学を心掛けた。

5) 「シャトルカード」方式を今年度も採用した。教育効果の程度、興味の方向性を把握するには十分に役立った。学生も疑問点を指摘しやすかった。よって、シャトルカード方式は次年度も続ける価値があるものと考えられた。

6) 来年度も「地図帳」シリーズに加え、「レポートの書き方」を購入してもらい、その指導もする予定である。

1. 教育活動の現状と課題

「からだの地図帳」、「健康の地図帳」、「病気の地図帳」を活用したことにより比較的良く勉強する態度が観察された。実験やビデオを用いると教育効果が高まった。

構造機能論（解剖生理学）を前期だけで理解させる時間的制約の克服は、できるだけ高効率、集中型が望まれる。一方、時間的ゆとりも大事な勉学の要素である。

タンパク質、酵素、核酸などを中心に細胞や生体の構成成分と代謝について生化学的な解説を行った。食物の消化吸収に合わせて科学的な解説を行った。

- 4) 生体構造機能特論 2年次 前期前半 (04/18~06/06) 1単位
担当 高橋 敬、岩崎 香子

生体の構造機能論の中で話題となる項目を重点的に解説した。特に、(1)クローンと老化生物学、(2)再生医学については力点をおいた。単一性を代表とするクローンを理解することは、最も基本的である。遺伝子や細胞、生物の集団の複製や増殖に関係することであるため、出現の仕方をエクセルでシミュレーションした。クローン人間や臓器移植には興味をもったようである。クローンのこのような理解は生物の多様性を理解する上にも重要である。この講義を通して、医療現場での問題点(人工受精、クローン人間、老化問題)を具体的に考えられるよう指導した。評価は出席とレポートで行った。

- 5) 生体科学特論 4年次前期後半 (07/08~09/30) 1単位
担当 安部 眞佐子

遺伝子やゲノムの基礎と遺伝子多型現象を栄養状態と結び付けて講義した。最近の国家試験問題の中からトピックスを拾い、解説した。

3. 卒業研究

- ・熱変性フィブリンの重合反応の動態とネットワーク構造解析
- ・コンタクトレンズ使用者のセルフケア方法とその効果
- ・ヘパリン依存性細胞接着機構
- ・脂肪細胞分化過程における油滴成熟の検討
- ・助産師による妊婦の体重コントロール目標値の設定について

3-5-2 生体反応学研究室

本大学の教育目標である「総合的な判断力を持つ自律した看護職の育成」のための教育の一環として、生体反応学研究室では身体の基本的なメカニズム、体の変調、病態、生体内に侵入する微生物、薬物の作用等を看護の視点から理解させることを目標として教育を行っている。科学的に生体のメカニズムや外的・内的要因に対する生体反応、各種疾病の病態を理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらが2年次～4年次の看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育を行っている。

1. 教育活動の現状と課題

本研究室では生体反応論、生体反応学演習、病態特論、微生物反応論、感染免疫学、生体薬物反応論の講義を担当している。国家試験の出題範囲としては「疾病の成り立ちと回復の促進」の部分である。毎年、この科目範囲の模試や国家試験の点数は非常に低く、理解度が悪い結果となっている。この問題は本大学だけではなく全国レベルも大変に低いことから、全国的に将来看護師になる学生の病気を学ぶことに対する重要性の意識が低いものと考えられる。本大学の看護実習等でも疾病についての理解度が低いため看護実践に結びつけられていないのが現状である。本年度もまた4年次で開講している「病態特論」は受講者数が少なかった。看護実践を行ううえで疾病・病態を十分に理解しておくことの重要性を認識できるように、より看護の視点から本研究室が担当する講義を進めて行く必要がある。そこで本年度は、1年次後期後半～2年次前期前半にかけて行う看護疾病病態論I, II（看護アセスメント学研究室担当）の講義へ繋げるために、これまで行ってきた生体反応学演習（感染看護演習／臨床検査）をとりやめ、病理学各論（系統別疾患）の講義を行い、看護を行う基礎となる疾病病態を理解させるのに努めた。

2. 科目の教育活動

1) 生体反応論 1年次後期前半（10/06～12/22） 1単位

担当：市瀬 孝道

病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。前年度に学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易いように教科書を代えた（病態をカラーで図示説明されたもの）が、足りない部分をプリントとして補い講義を進めた。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

2) 生体反応学演習 1年次後期後半（01/10～02/28） 1単位

担当：市瀬 孝道

生体反応学は現在、病理学総論を講義しているが、それ以降の病気についての講義は看護アセスメント学が行っている看護疾病病態論である。この講義は臨床に近い部分（症状、治療、看護）が主であり、病気の中身（病態）について手薄なところがあり、学生が疾病についてよく理解しないままに看護疾病病態論の講義を受けるかたちとなっていた。そこで、本年度は生体反応学演習（感染看護演習／臨床検査）をとりやめ、病理学各論の講義を行い、病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患。

3) 生体微生物反応論 1年次後期（10/03～02/20） 1単位

担当：吉田 成一、西園 晃、三舟 求真

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について理解させることを主要な目

標として、以下の項目について講義した。微生物の特徴、消毒・滅菌法、感染症、各種感染症とその原因、抗生物質。総論分野では単元毎に小テストを行い、学生の習熟度をチェックしながら講義を行った。小テストを行うことで学生が学んだ知識を直ちに整理し、理解度も上がったと思われた。各論分野では、自己学習しやすいよう講義後、プリントを配布した。しかし、講義前に配布を希望する学生が多数おり、今後プリントの配布時期を検討する必要がある。

4) 感染免疫論 2年次前期前半 (04/14~06/02) 1単位

担当：吉田 成一

一年次後期に行われた生体微生物反応論をもとに、病原微生物に対する生体の防御反応について理解させることを目標に講義を行った。また、免疫学の最新の知見も併せて講義した。学生にとり難易度の高い内容に関しては、異なる角度から講義することにより、理解度が上がるよう努めた。

5) 生体薬物反応論 2年次前期 (04/15~09/23) 1単位

担当：吉田 成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応(主作用及び副作用)を中心に講義した。特に総論を始め、薬理作用の基礎知識の正しい理解が可能なような講義を行った。また、重要項目は小テストにより再認識し、基礎知識の習熟を目指した。内容が多岐に渡るため、補講を行うことで対応した。また、他の科目で重複する内容を削除することで効率よい講義になるよう努めた。しかし、学習項目が多く、消化できない部分もあると思われ、今後、講義内容の取捨選択が必要であると思われる。

6) 病態特論 4年次前期 (09/07, 09/14, 09/21) 1単位

担当：市瀬 孝道

本講義は今迄の教科書中心で病態を理解してきたものを、実際に病変臓器に触れて、病気を肉眼、顕微鏡で観察することによって病気をより深く理解させることを目的に行っている。本年度は肝癌、大動脈破裂、悪性リンパ腫と脳血管疾患の症例を取り上げて、病気経過中の臨床データや病理解剖所見を照らし合わせながらホルマリン固定された病変臓器と他の全ての臓器の肉眼観察を行った。更に、これらの病理組織標本の観察も行った。臨床データや全ての臓器の肉眼、病理組織標本の観察によって病変部臓器のみでなく病態の全体像を把握させた。病気に興味を持つ学生が増えつつあり履修登録数は多いものの、本年度も受講生数が少なかった。原因としては、開講時期が就職試験や卒業研究に重なる為と考えられ、今後、開講学年時期を変更する工夫が必要である。

3. 卒業研究

- ・経口摂取したパン酵母 β -グルカンのアレルギー喘息増悪作用に関する実験的研究
- ・アスペルギルス、カンジダ、アルテルナリア真菌抗原における気管支喘息病態比較

- ・高コーン油食摂取がダニ抗原誘発性アトピー性皮膚炎に及ぼす影響
- ・大気中に存在する超微小粒子によるマウス雄性生殖系への影響解析
- ・ディーゼル粉塵に含まれるエストロゲンレセプター発現抑制物質の推定

3-5-3 健康運動学研究室

健康運動学研究室では、まずは体を動かすことの楽しさを体験し、また、ヒト・人類にとって運動がいかに重要であるかを理解することを目指している。また、近年では、臨地において運動処方や運動療法、運動指導が盛んになり、看護職にも運動の理解と指導能力が要求される機会が増えて来たため、それに応えられる基礎知識および実践能力を高めることを目指している。一方、一個人として自分の健康を維持・増進するため、運動習慣を身につけさせることも目指している。学生時代から健康と運動の関係を自分の問題として捉えることは将来の自分の健康管理に役立つだけではなく、これによってはじめて他者（たとえば、患者、地域住民）に対して実感を伴った健康教育や指導、助言ができるようになる。

一方、高校までは科学的知見を覚えるという学習をしてきているが、科学自体については教育されていない。大学では科学教育が重要であるため、学部および大学院の授業や研究指導の中では、科学自体や科学的なものの見方などを学ぶ機会を入れている。

1. 教育活動の現状と課題

女性の場合、大学時代は既に体力が低下する時期である。また、一人暮らしになるなど、ライフスタイルが変わる学生も多い。さらに、大学に入ると体育の時間も減り、運動クラブに所属する学生も少ないため、体力の低下や体脂肪率の増加が著しい。そこで、1年次の体育I・IIでは年度始めと終わりに体力測定を実施し、1年間の自分の体力や身体組成の変化を自分で調べることにより、自身の身体状況を自覚させることを試みた。加えて体育Iでは、身体状況が変化する理由を生理学的に講義し、理論とその実際を感じさせるよう試みた。また、体育IIでは、種々のニュースポーツを体験させ、体を動かす楽しさを体験させるよう努めており、学生のアンケートでも高い評価を得た。2年次の健康運動学演習でも、日常生活を記録したり（生活記録法）、パスダイアグラムを用いて日常生活の問題点を洗い出し、改善策を立てさせた。4年次の運動指導特論では、種々の人々を対象とした運動や福祉レクリエーションを体験させ、指導のポイントを教授した。大学院修士課程の健康増進科学特論でも、加速度計により数日間の活動量を記録など、種々のME機器を用いた健康測定や評価を体験し、レポートにまとめさせた。今後も上述の目標を達成するため、体験を伴った授業、また、科学的知見に基づいた授業をしてゆきたい。

来年度から、「体育1」は単に体を使う（動かす）体育から脱却し、体や運動を知ること重点をおき、科目名を「身体運動科学」と変更する。一方、「体育2」は現在およ

び将来の健康・体力の維持・増進を指向して「健康運動」に変更する。また、「運動処方特論」は対象となる疾患・症状や人々を広げ、科目名を「運動療法特論」に変更する。

2. 科目の教育活動

1) 体育I 1年次 前期・後期 (04/15～02/15) 1単位

担当：吉武 康栄、稲垣 敦

自らが習慣的な運動を行う動機付けになるよう、生体の運動に対する可逆性について応用生理学を中心とした講義を行った。また、将来、看護職に就くことを念頭に置き、様々な生理学的条件（トレーニング、ダイエット、老化、喫煙など）と生体諸機能変化について理解させることに努めた。実技では、効果的なストレッチ、バランスボールによるトレーニング、簡易的トレーニング法を実践させながら、その手法を習得させることに努めた。

2) 体育II 1年次 前期・後期 (04/15～02/15) 1単位

担当：稲垣 敦、吉武 康栄

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、多くのレクリエーションを体験した。また、運動量の確保も十分に考慮した。福祉レクリエーション関係のビデオを視聴し、看護や介護におけるレクリエーションの必要性や可能性を考えた。来年度は、自分にあった運動を見つけさせ、2年次以降も自主的に運動を継続するように指導したいと考えている。

3) 健康運動論 2年次 前期 (04/13～09/26) 1単位

担当：稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や運動機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する知見をもとに、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。来年度は、理解を深めるため講義だけではなく実習も導入したいと考えている。

4) 健康運動学演習 2年次 後期前半 (10/03～11/28) 1単位

担当：稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や運動機能の変化から、立つことや二足歩行の意味を考えた。また、看護にかかわる動作を力学的に解説するとともに、筋力・パワー、平衡性、エネルギー消費量、体温の測定実習も行った。選択科目であるが受講者88名と多いため、実習の効率を高める努力をし、解説の時間を増やし理解を促す必要がある。

5) 運動処方特論 3年次 後期後半 (12/05～02/13) 1単位

担当：稲垣 敦

運動処方の概論の後の各論では、運動処方が対象とする疾患だけではなく、広く運動療法に関して講義した。また、実習としてはマスター試験を行った。選択科目であるが受

講者71名と多いため心電図をとりながらの運動負荷試験は時間的に困難であった。これを取り入れる工夫をしたい。

6) 運動指導特論 4年次 前期前半 (04/13~05/13) 1単位
担当：稲垣 敦、大賀 淳子

精神障害者の運動表現療法、妊婦体操、子供のレクリエーション、高齢者のレクリエーション、ヨーガ、肩こり・腰痛体操、ネイチャーゲームなどの指導法について講義し、実習した。今後も看護職に役に立つ内容を吟味し、新しい運動を取り入れてゆく予定である。

3. 卒業研究

- ・ 児童期における運動習慣の有無が神経・筋機能に及ぼす影響
- ・ 登山後のEPOC
- ・ 泥湯の保温効果
- ・ 擬似笑いのストレス低減効果

3-5-4 人間関係学研究室

人に関する深い理解を基盤に人の喜びや苦しみを分かち合える豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースに、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識等、の習得を目的としたカリキュラムを編成している。各科目の具体的な教育目標は以下の通りである。(1) 認識装置としての人の機能、人の発達についての基本的知識の習得(「人のこころの仕組み」)、(2) 人間を社会や集団内の人間関係を通して理解する視点及び対人援助に関する基本的な知識の習得(「人間関係学」)、(3) 人間関係の形成方法についての理解(「コミュニケーション論」)、(4) 対人援助技術の習得(「人間行動論」「人間関係学演習」「心理アセスメント特論」)、(5) 看護と関わる心理学的知識についての理解(「人間関係学」「人間行動論」「心理アセスメント特論」)、(6) 人間と社会について幅広い観点から学ぶ(非常勤担当科目)(「音楽とこころ」「美術とこころ」「哲学入門」「人間と社会」「法学入門」「経済学入門」「大分の歴史と文化」「文化人類学入門」)。

講義にあたっては、個々の心理現象を看護実践と関連づけ、援助スキルや心理検査などを体験に基づいて理解ができるよう配慮している。また、授業終了毎に学生に感想・コメントの記述を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。

1. 教育活動の現状と課題

人間関係学研究室としての基本的な教育目標である、(1)人のこころの基本的な知識、(2)集団・個人との人間関係、(3)対人援助技術を理解するという点では変更はない。

本研究室ではこれまでも毎授業終了後に学生から感想・コメントの記入を求めていたが、本年度より実施の授業評価アンケートを加え、学生からの意見・要望を収集する体制は十分に整備された。今後は、そこから得られたデータをさらに教育活動の改善へと結びつけることが必要であると考えます。

今年度からの新しい試みとして、基礎看護学教室の講義「看護学入門」のグループワークの一部に人間関係学教室の教員3名が参加した。今後とも他の看護系教室の講義との連携を深めることが重要だと考える。また従来からの課題でもある他の看護系教室との教育内容のすりあわせについても、現状では、シラバス上のチェックにとどまっており、他研究室の教育目標や講義内容の詳細を検討するまではいっておらず、必ずしも十分とは言えない状況にある。

2. 科目の教育活動

1) 人のこころの仕組み 1年次前期(04/19～09/27) 2単位

担当：吉村 匠平

認識装置としての人の機能の特徴、2年次前期「人間行動論」の理解に必要な学習心理学の知識、人の発達のプロセス等について、小実験・VTR視聴などを併用して講義を進めた。学生による評価(10点満点)の結果は9.8点だった。「もっと具体例を聞きたいが時間の関係上聞けないことがあった」「時々早足になることがあった」などのコメントにみられるよう、講義時間のマネジメントが必ずしも十分ではなかった。授業時間の厳守、講義内容の精選、理解促進のための具体例の提示のバランスをとることが今後の課題である。そのために次年度から、従来4～5回の講義に1回(20分程度)設けていた「講義内容の整理と復習」を、パワーポイントファイルを用いたフラッシュカードの提示スタイルに改め、学習内容の完全習得と時間短縮の両立を試みたいと考えている。

また本年度から防衛機制を本講義内で取り扱ったが、講義全体の中での位置づけが曖昧だった。

2) コミュニケーション論 1年次前期(04/15～09/30) 1単位

担当：関根 剛

昨年と同様、コミュニケーションにおける非言語的要素と言語的要素の重要性を中心に、3回のグループエクササイズ、行動観察の方法とまとめ方、行動観察の計画と実施、プレゼンテーションなどを実施した。昨年度からプロセスレコードの解説と作成の体験を導入している

本科目の教育目標は、従来と同様、看護実践において必要不可欠なコミュニケーションの基礎を理解し身につけることにある。具体的には、相手の発信している情報に気づくこ

と、受け取った情報を自分がどのように理解しているのかを知る(自己を振り返る)、相手に対して情報を発信すること。そして、コミュニケーションは情報の受信－理解－発信(フィードバック)の繰り返しから成立していることを体験的に理解することである。

学生からの自己評価は概ね理解しやすいものとの評価であったが、「プロセスレコード」については、どのように役立つのか、理解することが難しいとの評価があった。エクササイズとプロセスレコードの間にワンステップの課題が必要であると考えられた。また、昨年指摘した改善が必要な点については、(1) グループエクササイズを1回の体験とせず体験を深めるために、従来は口頭で解説していた内容を、文書資料として配付し読ませる方法を用いた。その結果、エクササイズと理解(資料熟読)によって講義にメリハリが生まれ、体験とその意味の理解というリズムを作ることができたように思う。また、学生からの評価においても、ほとんどから理解しやすいという評価となっていた。(2) タッチングに関するエクササイズについては、新しいものの導入ができなかった。(3) 昨年改善したグループによる発表について、外部評価とメンバー間評価を組み合わせる方法は、今年も同様に実施した。昨年同様、方法に対して疑問や異議があれば受ける旨を伝えたが、疑問等はあげられなかった。次年度は、授業評価などにおいて明確に学生からのフィードバックを得る必要がある。

3) 人間関係学

1年次後期(10/04～02/02) 2単位

担当：吉村 匠平

心理学における「性格」理解について、客観的理解を目指す「実体論」と、人間関係の中での理解を目指す「関係論」について説明した。また、ケアを必要としている人との関係を作るうえで援助職者に必要とされる基本的な態度として、ロジャースの3条件を取り上げた。知識の暗記にとどまらず、知識の運用ができるようにするために、心理テスト体験、客観形式の問題演習、VTRを用いたケース検討を行った。学生による評価(10点満点)の結果は9.4点だった。アンケートの結果、前期担当の「人のこころの仕組み」よりも、看護に役立ちそうであり(88%)、満足度が高い(66%)と感じているものの、理解するのが難しい(64%)と感じていることも明らかになった。このことは、講義中に客観形式の問題演習を繰り返して行ったため、理解できているかどうかのモニタリングが随時行われたことと関連があるのではないかと考えている。

次年度以降、1年次前期「コミュニケーション論」で取り扱った「プロセスレポート」を学生に書かせることで、「関係論的理解」の理解を深めていくことができると考えている。

4) カウンセリング論

2年次前期(04/18～09/26) 1単位

担当：関根 剛、吉村 匠平

今年度から、講義前半を吉村、後半を関根が担当した。講義前半では発達心理学領域を取り上げた。乳幼児期の言語発達、身体運動機能の発達のアウトライン、発達障がい(ダウン症、ADHD、自閉症、障がい観)、知能検査(WISC)について講義を行った。発達

障がいに関しては、障がい像の個人差が大きいことを繰り返し確認しながら、最低限の各障がいの特徴を知識という形で完全に覚えることを求めた。講義は基本的には、解説（理解）→VTR（確認）→復習（定着）という流れで進めた。

後半は、代表的なカウンセリング理論を中心に解説を行うと共に、看護師が家族へのアプローチを行うことを具体的に知ってもらうために、臨床の看護師を招いて話を聞く機会も設けた。昨年度、新しい教員の着任が10月となったため、講義内容が暫定的なものとなったので、カウンセリングスキルについては従来通り、人間関係学演習に戻した。

5) 人間行動論 2年前期前半(04/13～06/08) 1単位

担当：関根 剛

今年度の講義も、昨年度とほぼ同様の展開であった。すなわち、学習心理学の原理を応用して人の行動を変化させるための考え方の基礎と技法について7回にわたり解説した。その際には、他人の行動に影響を与える上での倫理についての第1回目の講義を必ず受講することを条件とした。行動分析学・学習心理学の観点から、人間の行動理解および効果的な行動変容の技法について学び、行動療法的なアプローチについて基本的理解をもつことを教育目標としている。他の心理療法やコミュニケーション的な人間理解とは異なり、徹底した科学的視点からの人間行動理解を行うので、理解を積み上げる必要がある。そのため、講義においても、例題を設けながら理解を進めているスタイルをとった。

昨年、検討した改善点については、（1）講義内容の精選として、小規模な講義内容の変更や入れ替えを行った。（2）インターネットのブログを利用して、学生からの質問に回答することを行った。学生からのフィードバックを見ると、新しい方法ということもあり、利用する学生としない学生の差が大きく、全員に周知するには授業内に実施することが望ましいが、授業時間とのバランスなどを考慮して、より有効な活用方法について検討することを来年度の課題としたい。

6) 人間関係学演習 2年次後期前半(10/06～12/01) 1単位

担当：関根 剛、佐藤 みつよ

カウンセリングスキルを身につけるためのロールプレイを中心に8回の演習を実施した。昨年度の改善の視点に基づき、（1）ロールプレイを繰り返す、（2）テープレコーダー等の機器を用いることを今年度の改善点とした。カウンセリングスキルの概説を最初に行った上で、ロールプレイを学生同士で実施した。

展開は、ロールプレイにあたっては、毎回異なる想定状況を複数作成して実施した。想定状況は健康問題、日常的な人間関係、不快な出来事のほか、人間以外を主人公とするイヌバラ法をヒントにした状況設定など、多彩なものを用意している。ロールプレイは、教室や演習室に分かれ、互いの声で邪魔をしないような環境とし、最初は8名グループ、次に4人グループでロールプレイを行い、教員2名が各グループを回りながら、応対に対して助言指導を行っていった。昨年度にひきつづき、最後の回には、学生ではなく、クライアント役に電話相談等のボランティアを行っている方の協力を得て、学外の方とロールプ

レイを行った。学生評価については、7割以上が意欲的に参加し、基本的手法などが身についたと述べており、一応の教育目標は達していると思われる。

また、昨年に引き続き、カウンセリングスキルの獲得をより確実なものとするために、ロールプレイ内容をテープレコーダーに録音をして、その中の適当なものを逐語レポートとして随時、提出するように求めた。提出されたレポートは、応答に対して具体的に添削を行って返却をした。また、レポートは採点の上で返却をしており、よりよい評価を受けたい者は何回でも再提出をしてよいとするシステムも昨年と同様に継続した。

来年度における改善すべき点としては、(1) 授業目標の達成度評価として第2、第3段階実習の成果を参考にする点については、一部の講義上の連携を行ったものの、具体化はできていない。次年度の課題として引き続き検討したい。(2) テープレコーダー利用については、テープレコーダーの追加購入を行い、2人に1台としたので、十分な余裕をもたせることができた。また、テープも各人に1本の個人所有としたので、昨年度のようなプライバシーなどについての問題は解決した。(3) 本年度も引き続き、患者役のボランティアの参加を得ることが出来た。昨年同様、看護実習に出かける前のシミュレーションとして、ボランティアの存在は非常に有用であった。ボランティアの人数が数名であると、10名以上の学生との関わりになるため、より多くのボランティア確保に努力する必要がある。(4) 学生が10以上の部屋に別れざるをえないため、2人のスタッフで指導することは、かなり無理があることは否めない。学生全体がロールプレイを実施できるような場所と時間の調整を今後もほかりたい。

7) 心理アセスメント特論 2年次後期後半(10/03～11/28) 1単位

担当：吉村 匠平

今年度から内容を大きく改めた。自分自身を対象として様々な視点からアセスメントを行い、その結果を他者の前でプレゼンテーション(自己開示)させた。それと同時に心理アセスメントの基本的な考え方などについても講義した。アンケートで、「この授業を、自分でどのくらい学んだり感じたりすることができたかという視点から10点満点で評価してください」との質問を行った結果、平均で8.9点という結果が得られた。全ての受講者が「発表準備が大変だった」と回答していた反面、「自分を振り返る機会になった」「看護教育という視点から考えて意味のある活動だった」とも回答していた。シラバス上で「事前の準備、自己開示」が要求されることを明記していたためか、初回のオリエンテーションの受講者が15名、実際の受講者が12名であった。次年度以降の課題として、講義内容を事前に周知し、受講者の拡大を目指したい。

8) 音楽とこころ 2年次前期(04/18～09/26) 2単位

担当：宮本 修

9) 美術とこころ 2年次前期(04/14～09/29) 2単位

担当：澤田 佳孝

10) 哲学入門	1 年次前期前半 (04/13~06/08) 担当：西 英久	1単位
11) 人間と社会	1 年次前期 (04/18~09/26) 担当：大杉 至	1単位
12) 法学入門	1 年次前期前半 (04/26~06/07) 担当：小林 宏之	1単位
13) 経済学入門	1 年次前期後半 (06/16~09/29) 担当：合田 光景	1単位
14) 大分の歴史と文化	2 年次後期 (10/04~12/20) 担当：吉良 國光	2単位
15) 文化人類学入門	1 年次後期 (10/07~02/17) 担当：足立 恵理	2単位
16) 保健医療ボランティア論	3 年次前期後半 (07/21~07/22) 担当：福元 満治	1単位

3. 卒業研究

- ・ ストレス状況下における身体接触の不安低減効果ーブラインド・ウォークを通してー
- ・ 化粧品が看護師の印象に与える影響ー教員、学生間における比較ー
- ・ 大分県内の学校トイレの環境調査ー小学校と幼稚園の比較ー
- ・ 患者情報の記憶に関する検討ー1年生、4年生、看護師の比較ー
- ・ 看護大学における在学中の看護職志望意識の変動

3-5-5 環境科学研究室

本研究室では、環境科学における考え方の基礎、とくに環境保健に近い内容に重きをおいて、関連科目の講義・演習をおこなっている。また、放射線の利用や安全に関する科目、MEの原理や安全に関する科目なども担当している。これらは、通常の看護の基盤教育ではあまり行われていない科目であるが、将来、医療・保健に携わる者が基礎として学ぶべき内容として、その意義を理解させ、基本的知識を身につけられるように配慮した講義を行っている。

1. 教育活動の現状と課題

試験の際に、講義の評価（意見、感想など）を記載させている。この評価をもとに改善すべき点は次の年度にできるだけ反映するようにしている。例えば、看護との関係が理解できないという意見に対しては、講義の冒頭に社会的な話題と関連させたりして（学生のイメージでは、看護とは臨床看護であり、保健活動を描けない）、講義に対するモチベー

ションをもたせるように努力している。スライドや配布資料については随時改善を行い、学生の理解を助けるようにしている。

2. 科目の教育活動

1) 環境科学概論 1年次 前期 (04/14～09/27) 1単位

担当：甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

毎回、講義内容をまとめたハンドアウトを配布し、環境科学のポイントがわかるように配慮した。講義内容は次の通りである。(1)環境科学の歴史、(2)大気汚染と水質汚濁、(3)地球環境問題、(4)健康・環境影響と環境リスク論、(5)リスクアセスメントと環境基準、(6)環境疫学、(7)環境有害物質の曝露評価、(8)生態リスク、(9)発がんの生物、(10)内分泌攪乱化学物質による健康影響、(11)化学物質の安全性試験、(12)環境リスク対策、(13)環境リスク心理学、(14)リスクコミュニケーション

2) MEの原理と安全管理 1年次 後期 (12/09～02/24) 1単位

担当：甲斐 倫明、伴 信彦

講義は物理の基礎からME機器の原理から実際までをカバーするものである。講義内容は次の通りである。(1)MEとは何か、(2)電気に関する基礎知識、(3)生体情報の検出に関するME機器、(4)CTの原理、(5)超音波診断装置とMRI、(6)生命維持に関するME機器の実際、(7)ME機器の安全対策

3) 生活環境論 2年次 前期 (06/16～09/29) 1単位

担当：伴 信彦、甲斐 倫明

我々を取り巻く食環境、水環境、住環境と廃棄物についての基本的事項を解説し、健康で快適な生活を送るための食品保健・環境保健のあり方を論じた。講義内容は次の通りである。食中毒、食品添加物と食品中の残留物質、BSE問題、上水道と下水道、室内汚染、温熱環境と気圧、騒音・振動・悪臭。授業評価の結果は概ね良好であったが、配布資料が細かくて見づらいという声があったため、以後の講義ではその点を改善している。

4) 放射線健康科学 2年次 後期 (10/03～11/28) 1単位

担当：甲斐倫明、伴 信彦、小嶋 光明

放射線の物理から放射線の生物・健康影響までをカバーして、放射線の基礎的な理解を重視した講義内容とした。講義内容は次の通りである。(1)放射線影響と放射線防護の歴史、(2)放射線とは何か、(3)放射性同位元素と放射能、(4)身近な放射線・放射線源の利用、(5)放射線と物質との相互作用、(6)放射線の線量、(7)放射線の生体応答 (DNA損傷と突然変異)、(8)放射線の生体応答 (染色体異常と細胞死)、(9)放射線の健康影響 (確定的影響)、(9)放射線のリスク評価、(10)安全の考え方と放射線防護基準、(12)患者のための放射線防護、(13)UV・電磁界の健康影響

5) 環境科学演習 2年次 後期 (01/30～02/02) 1単位

担当：甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

3つの課題を課して、レポートを提出させる。そのレポート作成の作業の段階で教員が質疑応答に応じるというやり方で行った。テーマは環境科学の定量的側面の理解を深めるものを選んだ。課題は次の通りである。(1)メダカの死亡数分布によるデータのバラツキを調べるシミュレーション、(2)化学物質の毒性試験から得られる環境基準値のもつ不確かさ、(3)生命表を用いた平均余命の計算

6) 現代の環境問題 3年次 後期 (12/06～01/10) 1単位

担当：伴 信彦、甲斐 倫明

現代の環境問題の背景と複雑さ、解決へ向けた取り組み等について、社会・政策的な側面も交えて論じた。講義内容は次の通りである。概論 - 現代の環境問題、地球温暖化、遺伝子組み換え食品、環境ホルモン、廃棄物、エネルギー問題。

7) 環境倫理学 4年次 前期 (09/07～09/28) 1単位

担当：甲斐 倫明

環境倫理が生命倫理と際だって異なった考え方をしていることを理解させるために、生命倫理に関する社会的な事件や話題を盛り込みながら、対比的に解説した。(1)環境倫理学とは、(2)現代の環境問題と倫理、(3)人間中心主義と生命中心主義、(4)自然の生存権の問題、(5)世代間倫理の問題、(6)地球全体主義

3. 卒業研究

- ・ 女性乳癌の発症機構を考えるための男性乳癌罹患率の解析
- ・ 日本における禁煙対策の効果はいつ肺癌死亡率を低下させるのか
- ・ 放射線照射後の染色体異常及び生存率の時間的変化から見た細胞形態変化の発生過程に関する研究
- ・ 血液細胞の分化過程のシミュレーションによる放射線の影響解析
- ・ マウスの造血系に対する放射線の長期的影響に関する研究

3-5-6 健康情報科学研究室

科学的な根拠に基づく看護に必要な、保健統計・疫学の理論を学び、それらを実際に応用できる情報処理能力を身につけることを目標としている。そのために、講義科目と情報処理についての演習を連携させ、実践的な能力を獲得できるように配慮している。情報処理能力については、1人1台のパソコンを利用し、また看護の具体的事例を想定した演習を行っている。

また、必修科目では保健師・看護師として必要十分な能力水準を目標とし、基本的な内容を単に知識として覚えるのではなく、理解して身につけるよう指導している。選択科目ではさらに高度なテーマについて取り扱い、学生の将来の目標にあわせた高度な情報処理能力の養成を目指している。

1. 教育活動の現状と課題

パソコンの基本的操作やインターネットの利用など、情報処理の基礎的な経験については、年々学生の基礎技術が向上しているが、もう一つの基礎的能力である数学的能力、論理的な判断力については向上がみられず、どちらからといえば低下傾向にある。

講義・演習の内容を調整してこの傾向に対応し、演習においては3名の教員で40名強の学生にきめ細かい対応を心がけている。しかし、1年次に当研究室担当の必修科目が完了する現在のカリキュラムにおいて、実際に学んだことがどのように役立つのかを実感できるようにつとめなければ、3～4年次の演習・実習でこれらの能力が必要となるまで、学習の効果が薄れてしまう傾向に歯止めをかけることが困難である。

現状では、基本的な事項を絞り込んで、繰り返し教育することにより、基本となる部分の理解を確実にすること、単なる暗記ではない、応用する力を高めるために具体的な例題を多用するように配慮している。さらに4年次の選択科目において、これまでの学習の復習と総まとめを含んだ内容を組み込んで対応している。

カリキュラム配置については、基本的な情報処理能力として他の科目の学習にも役立てるためには、PCの活用を1年次の後期ではなくさらに前倒しにする必要が認められる。また、授業以外に、学生の自主学習を支援するシステムや教材をさらに充実することが今後の課題であろう。

2. 科目の教育活動

1) 健康情報学 1年次 前期(04/18～09/21) 1単位

担当：佐伯 圭一郎

人口統計、疾病情報や保健情報など、様々な健康情報に関して、情報の発生源から評価の方法までを体系的に学習した。単に様々な統計指標を理解するだけでなく、それらの数値から情報を読みとり、思考する能力を養った。ここで学んだ内容がどのように看護実践の場面で活用されるのか、という点を1年生に理解させるために、1年次の後期科目も含んだ保健統計・疫学、情報処理の全体の流れを初回に講義し、全体の実例を適宜提示している。しかし、他の科目、特に保健師養成に関わる科目を未習の段階であるため、学生がやや難易度が高いと評価していると考えられる。基本的な内容に重点を絞り、基礎の理解を十分にし、応用的な内容は選択科目やこれ以降の専門科目に任せるという方向を検討している。

2) 生物統計学 1年次 後期(10/05～02/13) 1単位

担当：佐伯 圭一郎、中山 晃志

基本的な統計学の知識を実際の調査・研究の場面と関連づけながら、情報収集と分析の技法について学んだ。特に、統計的な方法論の考え方に重点を置き、統計情報の適切な解釈能力を高めることを目指した。数式は最小限にとどめ、演習もパソコンでソフトウェアによる統計処理を行い、結果を解釈することを中心としている。

課題として、学生の基本的な数学能力のばらつきが大きさが進行上の支障となっており、この授業への学生の満足度や習熟度の評価もかなりばらついている。そのため、「自然科学の基礎」の関連する単元で、基礎的な数学能力を確認し、向上を図るという方針で望んでいる。

3) 健康情報処理演習 1年次 後期(10/04～02/20) 2単位

担当：佐伯 圭一郎、品川 佳満、中山 晃志

パーソナルコンピュータを活用して、学習や保健医療の場における情報管理の道具として役立てるための知識と技術を学んだ。また、インターネットをコミュニケーションや情報収集に役立てる技法を習得した。内容は、情報機器の仕組みと機能、ネットワークの利用（WWW,メール）、ワードプロセッサ、ホームページ作成、表計算、プレゼンテーション、統計データの分析である。

情報処理能力は、平均的には向上する傾向にあるが、学生間の格差がますます拡大しており、演習の進度を遅い学生に合わせているため、多くの学生にとっては余裕がありすぎる進行であろう。そのため、あらたな技能を十分に身につけたという満足感が低い学生がいる反面、一部では授業の進行が早すぎるという声も上がっている。演習の1週ほど前には、演習の資料を電子ファイルとして学生に公開し、事前学習の支援をはかっているが、少数の学生しか事前に演習の内容を把握していない様子である。

演習において、進度に遅れる学生への対処に関して、学生相互で指導・協力し合うということは本年ではあまりみられず、今後はチェックをさらにきめ細かくし、個別の指導を強化して、置き去りにされるという意識を持たせないようにつとめたい。しかし、進度に余裕のある学生にとっては、演習の内容が希薄となるため、さらに詳細な自己学習のための追加教材という形で対処をはかることで対処したい。

4) 応用情報処理学（選択） 2年次 前期後半(06/17～09/30) 1単位

担当：佐伯 圭一郎、品川 佳満、中山 晃志

選択科目ではあるが、実質的にはほぼすべての学生が受講することとなったため、必修科目である生物統計学および健康情報処理演習との連続性を高め、生物統計学各論と統計解析の演習を行っている。具体的な看護・医療領域の具体的な例題を提示して、一部高度なトピックも含み、8回中2回の統計ソフトウェアを利用する演習と講義を連携させて、生物統計学の実践能力の向上をはかっている。

毎回の小テストにより、知識の確認と定着をはかっているが、積極的に学習する態度の

ない学生は対応しきれていない様子であり、学習意欲を高める方策が今後の検討課題である。

5) 実務情報処理学（選択） 4年次 前期後半(09/08～09/29) 1単位

担当：佐伯 圭一郎、品川 佳満、中山 晃志

健康情報処理演習で学んだ情報処理能力を看護師・保健師の実務の場を想定した具体的事例を通じて、さらに高度なものへと高めることを目標としているが、1年次の必修科目の復習が必要となる点で授業進行上支障となっている。今年度も、プレゼンテーションや印刷物のデザインについて、外部から商業デザイナーの講師を招き、演習と講評という形式の内容も組み込み、比較的少数の履修者である点をいかして教育的効果を高めることができたと考える。

ただし、開講時期が就職活動や卒業研究の時期と重なっており、欠席の多い学生や受講を放棄するケースもみられ、最終的な履修者が少ない点に関して、開講時期の調整や欠席時の自己学習への配慮を検討中である。

3. 卒業研究

- ・看護学生を対象とした食生活の自己管理能力向上のためのWebサイト作成
- ・医療施設看護部門における災害時の対応準備に関する調査
ー地震発生直後の看護職の対応に着目してー
- ・看護学生の死生観ー1年次生と4年次生との比較ー
- ・高齢者における居住形態と健診結果との関連
- ・自治体Webサイトにおける子ども向け健康情報の提供に関する調査

3-5-7 言語学研究室

言語活動の四技能（Speaking, Listening, Reading, Writing）をバランスよく伸ばすことを目指す。将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くように、実用的で易しい英語コミュニケーション（Speaking, Listening）に取り組ませる。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施する。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL（Computer Assisted Language Learning:コンピュータを用いたウェブ学習システム）によるTOEIC対策英語学習プログラムを実施する。

1. 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカーの教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション（Speaking, Listening）を練習

する。1年次生の講義の内容は、一般的な日常生活の話題（Food, Shopping, Home, その他）、2年次生の講義の内容は、看護英語である。各話題3～4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声テープで確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてることが課題となり、次週には実際に暗唱（含む筆記）できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数100万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。よって、教室での活動をもとにいかに教室外での学習を継続させることができるか、すなわち学生への英語学習の動機付け、学習意欲の維持、学習活動の継続をいかに実現していくか、さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な英語学習へのきっかけ作りをいかに構築していくか、といったことが課題である。昨年に引き続き本年度も、コンピュータを用いたウェブ学習システム（CALLシステム）によるTOEIC対策のための英語学習と、学習期間前後のTOEIC IPを導入・実施した。今回は、学習期間を前期と後期の2回設定した。受講した学生は熱心に取り組み、結果として学生の学習成果に向上が見られた。

2. 科目の教育活動

1) 英語I-B1 1年次 前期 担当：Gerald T. Shirley

クラス1：04/14～09/30 1単位

クラス2：04/18～09/26 1単位

Basic conversation was reviewed and practiced. Listening, pronunciation and usage were also given importance. Conversation important for daily life was practiced in an interesting way.

2) 英語I-B2 1年次 後期 担当：Gerald T. Shirley

クラス1：10/07～02/28 1単位

クラス2：10/04～02/24 1単位

Useful language at a basic level in a meaningful context continued to be practiced. Model conversations followed by guided activities designed for pair work were used to maximize speaking time.

クラス 1 : 04/19~09/26 1単位

クラス 2 : 04/18~09/28 1単位

講読内容として、人間の精神活動の中核である脳について、様々な角度からの知見を紹介した英文テキストに取り組んだ。音声・音韻的な視点から、英語の個々の音や単語ではなく、その総体としての英文の音の流れに着目し、その流れの中で自然に発生する音の変化に焦点を当てた。また、英文を読む際の音韻的特徴について、その音の流れを視覚的に捉えることができるような演習を実施し、それをもとに暗唱などの自主学習を促し、習得を確認した。音の英語らしさを具体的に捉えることに新鮮味を感じたようである。多読による総読書量は、一年次からの通算で前期終了時一人平均230,000語であり、最も多く読んだ学生の語数は946,000語であった。

8) 英語II-A2 2年次 後期 担当：宮内 信治

クラス 1 : 10/06~12/22 1単位

クラス 2 : 10/05~12/19 1単位

講読においては、自らの辛かった体験について「書く」ことによる病氣治癒の知見や、ヒトゲノム計画の発展とそれに伴う問題についての英文テキストに取り組んだ。また、ナイチンゲールが自らの看護観を述べた英文にも触れた。英語のイントネーションに特化した表記方法の特徴や意味について理解した後、その表記法を用いた英文テキストを繰り返し音読し音の流れを確認した。暗唱課題により、学生自らが英語らしい音の流れを再現できるようになった。多読による総読書量は一年次からの通算で後期終了時一人平均256,000語。最も多く読んだ学生の語数は1,039,671語。100万語多読の目標達成をたたえ、平成18年1月24日、学長より一人の学生に100万語多読達成認定証書が授与された。

9) 英語III-B 3年次 前期 : 04/19~07/19 1単位

担当：Gerald T. Shirley、宮内 信治

A variety of stimulating communication activities, including student and teacher-centered exercises, pair and small group work, and games and role-play that involved the whole class were used to help students improve their speaking ability.

10) 英語III-A 3年次 前期 : 04/19~07/19 1単位

担当：Gerald T. Shirley、宮内 信治

(会話) 日常会話で用いる基本的英語の訓練を継続する。クラス全体を数グループに分け、それぞれのグループの中でひとつのテーマを決めて互いに話させる。

(講読) 医療、看護、心理に関係のある英単語に関して、ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識をもとに単語の意味の成り立ちを理解させた。

原則として講読と会話を前半と後半に分けてどちらも受講できるようにした。今後はこの科目を自由選択科目として設定することが望まれる。

6) 基礎看護学実習

2年次後期 (01/10～01/23) 2単位

担当：小林 三津子、小西 恵美子、伊東 朋子、藤内 美保、
玉井 保子、吉田 智子、日吉 孝子、吉留 厚子、
安部 恭子、玉置 奈保子、大津 佐知江、松尾 恭子、
福田 広美、高波 利恵、朝見 和佳、山下 早苗、
中原 基子、田村 充子、甲斐 仁美

患者1名を受け持つ本格的な実習としては初めてのため、学内オリエンテーションでは、実習施設である県立病院及び赤十字病院の看護部長より、看護職として大切にしている事や看護学生・看護師時代のエピソードなどについての講義を依頼し、実習に対する動機づけを行った。また、2施設15病棟での実習がより効果的に展開できるように、グループ編成については、学生の個別性や担当教員の指導経験を考慮し、よりグループダイナミックスが活かされるようなグループ配置を行った。結果として、実習目標の達成度は極めて高かった。なお、赤十字病院では2ヶ所の病棟が新しく追加され、計6病棟で実習を行ったが、指導上、特に困ったことはなかった。

7) 看護と遺伝

2年次前期後半(06/23～09/29) 1単位

担当：佐渡 敏彦、吉河 康二

非常勤講師による専門の講義や臨床での実践例を詳解し、毎回、簡単な練習問題をだし、レポート提出を求め、理解の程度を確認した。

3. 卒業研究

- ・気管内吸引の手技における安全・安楽に関する文献研究
－挿入時の圧の有無と長さに焦点を当てて－
- ・床上排泄時の便器挿入による体圧分布からみた身体的変化
- ・保険制度適用に伴う在宅酸素療法に関する文献的検討
- ・放射線防護に関する基礎教育を受けた看護師の関与とその要因
－病棟内における看護業務に着目して－
- ・患者呼称に対する患者の意識
- ・看護職者のインスリン自己注射時の皮膚消毒に対する認識

3-5-9 看護アセスメント学研究室

看護アセスメント学研究室は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を科学的にアセスメントできる能力を養うことを目的としたカリキュラムを実施している。看護学の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的・心理的・社会的側面から看護学の視点でアセスメントできることがねらいである。現在教授している

具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「看護アセスメント方法論」「看護アセスメント学実習」である。主にフィジカルな部分を中心としており、主要な疾病の理解や病態の理解に加え、これらの知識をもとにどのような方法で健康問題をアセスメントするか具体的な方法論を教授している。

1. 教育活動の現状と課題

フィジカルな部分を重点におき、対象の健康問題をアセスメントするための能力を高めるには、疾病や病態などの基本的・専門的な知識が必要である。人間科学講座での生体科学、生体反応学などの知識を想起させ、さらに成人・老人看護学へつなげられるための内容を教授するように配慮し、教授している。

看護疾病病態論は週に4コマのペースで講義を行うため、過密に専門的知識を教え込まなければならず、学生は専門用語の理解の段階から混乱することが多い。そこで今年は新たな試みとして、部分的に学生のグループワークと発表をさせた。グループごとに課題、キーワードを与え、疑問をもつ学習、調べる学習、またわかりやすく発表できる能力を促進することを期待して行った。しかし時間配分、グループワークの仕方、発表の仕方などで課題が残った。

看護アセスメント方法論は、病態のメカニズムの基本的知識について講義形式で教授した後、病態の正常、異常をどのように判断するのか具体的方法論についての教授を学内実習形式で行っている。また、看護アセスメント学で教授している科目は、専門領域のペースとなる重要な基礎的知識であるため、自ら学ぶという姿勢の重要性を強調する意向で、最後は、臨床現場で起こりやすい事例課題を提示し、グループワークをさせ発表をさせた。

2. 科目の教育活動

1) 看護疾病病態論Ⅰ 1年次 後期後半 (12/06～02/28) 2単位

担当：小西 恵美子、藤内 美保、玉置 奈保子

看護疾病病態論Ⅰは、循環器系、呼吸器系、血液造血器系、肝・胆・膵系、代謝・内分泌系の疾患を教授した。各系統の解剖学、生理学を復習し想起させながら、疾患の概念や病態、症状のメカニズム、検査、診断、治療を中心に教授した。可能な限り図式して理解を得やすいように配慮した。また、今年の新試みとして学生にグループワークと発表をさせた。これは参考書を当たり前に読みそのまま覚えるのではなく、疑問をもつことや調べるべきことを追及していく学習方法を身に付けることを期待して行った。重要な疾患とそのキーワードを提示し、1グループ約10人程度、発表1課題40分程度とし、20分程度の質疑応答の時間を設けた。学生は担当したところの課題についてはよく調べていたが、発表の仕方でもわかりやすくポイントを押さえた発表が困難であったために、聴講している学生は十分な学習効果にはならなかった。その後、教員による補講で補った。学生発表の時間を短縮し質疑応答の時間を増やす、補講の時間を増やすなどの改善が必要と考えられた。

また、グループワークの評価ではグループ内における学生同士の他者評価を取り入れるなど、工夫した。

2) 看護疾病病態論Ⅱ 2年次 前期前半(04/12～06/09) 2単位

担当：小西 恵美子、藤内 美保、安部 恭子、
玉置 奈保子、池邊 徹、須小 毅、

看護疾病病態論Ⅱは、筋骨格系、脳・神経系、腎、消化器系、アレルギー疾患、自己免疫疾患、感染症、眼科、耳鼻咽喉科、泌尿器科の疾患を教授した。専門性の高い疾患（耳鼻咽喉科、眼科）については、県立病院の医師による講義を実施した。臨床医の講義は治療法や症例など具体的な提示もあり刺激になっている。

ただ、教員が入れ替わり立ち代りで教授方法もそれぞれ異なるため、一部戸惑うという学生の意見もあった。

3) 看護アセスメント方法論 2年次前期後半 (06/14～09/27) 2単位

担当：小西 恵美子、藤内 美保、安部 恭子
玉置 奈保子

看護アセスメント方法論は、フィジカルアセスメントの基礎知識、健康歴聴取、全身状態の観察、消化器系、循環器系、呼吸器系、感覚・運動系、脳・神経系の患者のアセスメントを中心に教授した。3コマ連続の講義で前半は病態の説明、後半は学内実習室でのフィジカルイグザミネーションとした。3人の教員で80人の学生を指導するにはきめ細かな指導が困難であるため、フィジカルイグザミネーションのデモンストレーションでポイントを強調するように配慮するとともに、学内実習の終了時にまとめを行い、学生全員の理解が深まるよう工夫している。

また臨床現場で遭遇しやすい事例を提示し、2グループが同一の事例を検討する演習を行った。発表では演習したプロセスの違いが見えやすく、学生の気づきも大きい。最後に病態に関する筆記試験を実施した。

4) 看護アセスメント学実習 2年次 後期 (02/06～02/17) 2単位

担当：小西 恵美子、小林 美津子、伊東 朋子、藤内 美保、
吉留 厚子、甲斐 仁美、大津 佐知江、吉田 智子、
松尾 恭子、安部 恭子、玉置 奈保子、福田 広美、
高波 利恵、日吉 孝子、山下早苗、中原基子、玉井 保子、
田村 充子、朝見 和佳

看護アセスメント学実習においては、県立病院の9ヶ所の病棟と赤十字病院の6ヶ所の病棟に学生5～6名をそれぞれ配置し、患者1名を受け持たせ、アセスメントのプロセスを学ぶための実習を行った。ほぼ全員実習目標を到達したが、アセスメントの段階で解剖学や生理学の力不足のためにアセスメントが困難な学生も一部に見られた。特に中間カンファレンスまでは、アセスメントに戸惑う学生が多くみられたが、次第に客観的情報の捉え

方や情報との関連性について考えられるようになった。患者への理解は基礎看護学の段階よりも深められ、基礎看護学実習に引き続き行うことの効果であると思われる。実習終了後に担当教員を含む看護系教員で反省会を実施した。この内容をふまえ次年度改善を加えていきたい。

3. 卒業研究

- ・年齢差から見るプライバシーの認識の違い — 高齢期患者に焦点を当てて —
- ・意識下手術を受ける患者の体験と看護援助
- ・花粉症患者の感じるディストレスの概念化
- ・看護学生に関する文献検討
- ・片麻痺の疑似体験装具装着時における床からの立ち上がり動作解析と筋電図変化

3-5-10 成人・老人看護学研究室

成人・老人看護学は、成人・老人看護の実践に必要な専門知識・判断能力と援助技術を身につけることを目的にしており、そのために概論、援助論、演習、実習の各教科を設定している。特に、学生が実務についた際に接する対象の多くが成人期・老年期にある人々であることから、成人・老人看護学の学習は非常に重要な位置づけにあるという認識で、それぞれの科目展開を行うことを心がけている。そして、臨地実習において必要となる技術をより確実なものとするために可能な限り学内実習を組み込むことに配慮している。

1. 教育活動の現状と課題

成人・老人看護学の学習範囲は非常に広範である。幅広い年齢層の対象理解や、多様な疾患とそれぞれの治療法や援助方法の理解を助けるために、具体的な事例や実際の医療・看護器具の提示をして関心を高め、印象に残るように工夫している。

援助論Ⅰ・Ⅱにおいては、身体機能別ごとに急性期と慢性期に必要な看護援助について教授しているが、それぞれ2コマほどで進めている場合が多く、学生が欠席するとその部分の学習が欠けることになる。そこで欠席者にはその講義内容に関連するテーマを与え、ハンドアウトの資料やテキストで自己学習させ、レポートを提出させている。

2. 科目の教育活動

- | | | |
|------------|------------------------|-----|
| 1) 成人看護学概論 | 2年次 前期前半 (04/15~06/10) | 1単位 |
| | 担当：栗屋 典子 | |
| 2) 老人看護学概論 | 2年次 前期前半 (04/15~06/10) | 1単位 |
| | 担当：栗屋 典子 | |

概論においては、一連の成人・老人看護学を学ぶための基礎となる内容として、成人

期・老年期における身体的・心理的・社会的特徴や、健康問題の特徴などを教授した。次年度は、学生からの要望を勘案し、講義の進め方、資料の作り方に工夫を加えていきたい。

3) 成人・老人看護援助論Ⅰ 2年次 前期後半 (06/14～09/30) 2単位
担当：赤司 千波、小野 美喜、大津 佐知江、
松尾 恭子、福田 広美

4) 成人・老人看護援助論Ⅱ 2年次 後期 (10/04～01/27) 2単位
担当：赤司 千波、小野 美喜、大津 佐知江、
松尾 恭子、福田 広美

成人・老人看護援助論Ⅰ・Ⅱにおいては、身体機能別ごとの健康問題をもつ対象者について、急性期と慢性期に必要な看護援助について教授した。学生からの意見を勘案し、来年度は、講義の媒体を今以上に工夫した講義にしたい。援助技術については、確実な技術修得を目的とし、学年を2グループに分割し、同一内容で2回ずつ学内実習を実施した。本年度は、3事例に対する患者指導を小グループごとの計画立案・実施、ロールプレイ形式の発表を取り入れたことで、個別的な患者（家族を含む）指導の必要性やその方法について教授できたと考える。

5) 成人・老人看護学演習 3年次 前期後半 (05/27～07/11) 1単位
担当：赤司 千波、小野 美喜、大津 佐知江、
松尾 恭子、福田 広美、栗屋 典子

演習においては、臨地実習で看護過程をスムーズに展開し、看護実践できるように、ペーパーペイシェントを用いた事例による看護過程の展開を、講義、自己学習、グループワークによって指導を行った。講義では、事例を用いた看護過程の展開について教授し、自己学習では、グループごとに担当教員による個人面接や課題の提出によって個別的な指導を行った。また、演習最終日には、各グループの事例に対する看護過程の展開の発表をディベート形式で行い、異なる視点による看護過程の展開があることなどを学ぶ場を設けた。今後は、展開の困難な学生に対する個別指導の工夫が必要と思われる。

6) 成人看護学実習 3年次 前期後半、後期前半 (09/12～12/02) 4単位
担当：赤司 千波、小野 美喜、大村 由紀美、吉田 智子、
大津 佐知江、松尾 恭子、安部 恭子、福田 広美、
玉置 奈保子、高波 利恵、朝見 和佳、甲斐 仁美、
日吉 孝子、栗屋 典子

7) 老人看護学実習Ⅰ 3年次 前期後半、後期前半 (09/12～12/02) 2単位
担当：赤司 千波、小野 美喜、大村 由紀美、吉田 智子、
大津 佐知江、松尾 恭子、安部 恭子、福田 広美、
玉置 奈保子、高波 利恵、朝見 和佳、甲斐 仁美、
日吉 孝子、栗屋 典子

本年度より実習病院の病棟編成が変更となったことから、これまで成人・老人看護学実習に使用していた10病棟が9病棟となった。幸い実習学生の数が多かったため、1病棟に4名の配置で実施できた。しかし、次年度については5名配置の病棟が増すことが予測される。

実習は担当教員と臨床側の実習指導者の指導のもと、学生に1～2名の対象者を受け持たせ、看護実践を体験させた。現在、急性期と慢性期を3週間ずつ体験させているが、急性期と慢性期ともに入院期間の短縮が進み、3週間継続して担当できるケースがすくなくなっている。

また、援助技術の確実な習得と拡充を図るために、これまでも臨床側と検討を重ねてきたが、本年度も再度拡充に向けての協議を行い、一人で実践できる、指導者とともに実施する、見学する技術を整理し、実習マニュアルを修正した。学生は受け持ち対象者に限らずこれらの援助技術について指導者あるいは教員の指導の下で積極的に実践や見学を行った。新任の指導者が数人いることから、臨床側よりの希望で、実習前半（6週間）が終了した時点で、学生指導の上での疑問点について指導者と話し合いをもち解決を図った。例年の課題であるカンファレンスの時間短縮については、いくらかの改善はあるが、今後も双方で努力する必要がある。

8) 老人看護学実習Ⅱ 4年次 前期前半（05/16～05/27） 1単位

担当： 赤司 千波、小野 美喜、大津 佐知江、
松尾 恭子、福田 広美、栗屋 典子

介護特別養護老人ホーム、介護老人保健施設において、入所者の生活支援を通して対象者を理解し、これらの施設における看護専門職の役割と課題を学ぶことを目的に、各施設7～9名の配置で実習を行った。施設ごとの実習体験から得た課題や疑問については、実習最終日に学内で討論・検討する場をもち、共有を図った。昨年度課題としていた施設選択については、介護特別養護老人ホーム、介護老人保健施設それぞれ1施設ずつ変更することができた。

3. 卒業研究

- ・羞恥心を伴う看護ケアに対する患者の抵抗感
- ・認知症高齢者の主介護者が一般病院の看護師に対して抱く期待
- ・介護老人保健施設スタッフの高齢者の性に対する知識・態度と性的言動への対応

—ASKAS-Jとの関連—

- ・看護大生の学年比較による健康意識と生活習慣
- ・仰臥位保持によるストレスに対するアロママッサージの有効性の検討
- ・看護大生の最終段階の実習に対する不安とその対処について
- ・重症心身障害児とともに暮らすきょうだいに対する看護職者の関心とサポートに関する研究

3-5-11 小児看護学研究室

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や技術を学んだ学生に対して、小児保健の立場での発達理論、小児各期の発達・成長について、つぎに、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する小児看護の特殊性について、さらに小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶようにカリキュラムを構成している。

小児看護学は母性・成人・精神看護学とともに専門看護学講座の4科目群の1科目として重要な役割を担っている。講義は、2年生前期に概論で導入を行い、3年次前期前半より1年間で集中的に講義が展開される。最近は少子化の影響で兄弟も少なく、周囲に小児がいなかった、また接したことがないという学生が少なくない。そこで、小児糖尿病患児のサマーキャンプや子どもの健康週間などの地域活動にも参加を促し、体験学習の場としている。講義では視聴覚教材を多用して、動的な子どものイメージを持たせるように配慮している。また、毎回講義の終了時に学生の意見や質問を求め、次の講義で質問に答えるようにして、学生の疑問を残さないようにしている。3年次後期前半の小児看護学実習では、特に子どもの理解に焦点をあてている。学生が、保育所実習と小児病棟の実習を通じて、健康・不健康に関わらず小児にかかわる援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築するように配慮している。

1. 教育活動の現状と課題

小児看護学では発達過程にある小児の保健と看護を理解することをねらいにしている。また、小児看護学総論および各論を通して、学んだ専門的な知識を実習で実践し、看護場面に適した知識の応用と判断力、また看護技術を身につけることを目的としている。そのために必要な事象を教授し、2年次に始まる小児看護学概論では、学生が自分自身の「子ども観」を再確認し、その特性を認識するように工夫している。

3年次では、小児の発達と援助における理論、演習、実習という流れのなかで、看護職、あるいは保育する大人としての役割を意識し、行動できるようにカリキュラムを設定している。講義では、学生は多くの小児に関する専門的知識を学ぶことになる。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見をメモし、次の講義ではその質問等に答えている。

小児看護学の学習内容の定着を期待して、3回のテストを行い重要項目を認識するようにした。実習前までに成績不良の学生は、再試験等を実施してフォローした。

次年度の改善策は、学生が能動的に講義に参加するために、資料やテキストの使用方法的な再検討を行う予定である。

した。次年度も学生個々の能力を高めることと、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する予定である。また、展開の困難な学生には個別指導を行う必要がある。

4) 小児看護学実習 3年次 後期 (09/12~12/02) 2単位

担当：高野 政子、山下 早苗、中原 基子、玉井 保子

小児看護学実習は、大分県立病院小児病棟に学生7~8名、別府発達医療センターに学生4名を配置し、担当教員と臨床側の実習指導者の指導のもと、学生に1名の対象児を受け持つよう配慮した。小児看護学の実習日数は2週間と短期間であり、看護学生としても初めて子どもに接するという学生も多く、対象とのコミュニケーションに戸惑うことも少なくないので、担当教員は学生が援助技術を実践することに苦手意識を持たないようにすることが重要である。

実習は健康な子どもを理解することを目的に、まず保育所3日間の実習を行う。学生の半数は2日間の保育所実習で学生の実習の達成感が少なかった。病院では7日間の小児看護を実施したため、子どもにも慣れることができ、小児看護の動機づけとなり良い実習になっていると思われる。実習ではプレパレーションを意識した指導用パンフレット作成や遊びの必要性を理解して、子どもの発達にあった遊び道具の開発などに取り組む姿が見られた。

実習終了後、実習施設の各病棟教育担当者全員と担当教員で実習反省会をもち、意見交換を行った。次年度の課題として、学生が動機づけられ積極的な実習を行うような指導について検討する必要がある。

3. 卒業研究

- ・ 1歳6ヶ月児を持つ母親の母子保健事業の利用実態とサービスに関するニーズ
- ・ 4ヶ月児を持つ母親の母子保健事業の利用実態とサービスに関するニーズ
- ・ 口唇口蓋裂児の母乳育児に関する看護職の意識調査

3-5-12 母性看護学・助産学研究室

母性看護学・助産学研究室は、専門看護学講座の4科目群の中の1科目群に位置している。母性看護学では、女性のライフサイクル及びマタニティサイクルにある母性各期・新生児の健康現象に対する援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。母性看護学の実習は周産期に重点を置いて展開している。

助産師教育については、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正で、実習中分娩の取り扱いについて、助産師又は医師の監督の下に学生一人につき、正期産を10回程度直接取り扱うことが定められており、本学では9例以上を目安とすることを基本的考え方としている。助産師教育は、卒業時点までにどこまでできることが望ましいかを基本にすえ、最小限、社会ニーズの変化に対応でき、母子の安全性(正常・異常の区別)が守れる

中絶の諸問題、不妊症、12.更年期・老年期の特徴とその対応、13. 母性の環境と諸問題（労働・環境汚染・文化）、14. 母子保健に関する諸制度である。評価は、講義中1回、終了後1回の2回である。講義終了後全体の授業評価を行った。その結果、出席状況は4.75（5点満点）で講義には大変興味を示して臨んでいた。

本年度の改善点：試験を2回行ったこと。母性看護の内容は学生自身であり極力学生参加型の授業となるように、質問形式の授業展開を心がけた。今後の課題としては、社会変化に対応した教授内容の精選と判断力・思考力に重点を置いた教授法の継続検討である。

2) 母性病態論 2年次後期（10/03～12/22）1単位

担当：肥田木 孜、谷口 一郎、吉留 厚子、
宇津宮 隆史、堀永 孚郎、上野 佳子、
戸高 佐枝子

母性のライフサイクルにそった主要疾患についての病態・生理、症状、治療、看護への視点について講義を行った。対象とした疾患名は次のとおりである。月経異常の鑑別診断、無月経、思春期貧血、子宮内膜症、子宮癌、STD、異常妊娠、異常分娩、異常産褥、閉経症候群と治療、不妊症と治療、胎児・新生児の異常である。近年、不妊症に関して検査・治療がめざましく進歩していることを鑑み、今年度より不妊症についての授業の充実を図った。特に不妊の病態のみに焦点を当てず、不妊症の患者の心理について、臨床現場で担当している臨床心理士からの講義は興味深いものであった。

3) 母性看護援助論 I 2年次 後期後半（12/05～12/22）1単位

担当：吉留 厚子

シラバスの内容を看護師国家試験出題基準にそって変更した。母性看護の対象は母子のみではなく家族を含むことを認識し、妊娠から分娩の生理的変化について教授した。授業の基本方針として、前回の授業で教授した内容について、授業の最初に、学生と質疑応答を行い確認作業を進めていくように前年より努めた。特に、分娩における児頭の回旋等の話やプリントの図だけでは理解し難い内容は、模型を頻回に利用して、目でみて学生がよりわかりやすいようにした。学生による評価にて出席率は高く講義内容が身につけていることが分かった。

4) 母性看護援助論 II 3年次 前期前半（04/12～06/10）1単位

担当：吉留 厚子、渡辺 しおり、武石 美智代

シラバスの内容を看護師国家試験出題基準にそって変更した。異常分娩、正常産褥、異常産褥、新生児の看護について教授した。学生に授業内容について興味を持たせるために、特に異常分娩や異常産褥について事例を提示しながら授業を進め、実習にも役立たせるために産褥期の看護は実習先のタイムテーブルを示すようにした。前回の授業の内容について確認したほうが、より授業の内容の理解に効果的であると思われた場合には、授業の開始時に学生と質疑応答を行った。

5) 臨床母性看護総論 3年次 前期前半 (04/12~06/10) 1単位

担当：吉留 厚子、梅野 貴恵、田中 薫、大神 純子

母性看護学実習で実施する母性看護特有の援助の実際を教員の指導のもとで演習した。実習直前に自己学習で沐浴を実施させたので、母性看護学実習で役立った。また、母性看護の特色のある症例をもとに看護過程のペーパートレーニングを行い、母性看護実習の実践で応用できるように教授した。学生は母性看護技術についての習得に積極性がみられた。看護過程の展開についても比較的对象をとらえる視点ができていた。

6) 助産学概論 3年次 前期前半 (04/14~07/04) 1単位

担当：宮崎 文子、吉留 厚子

助産および助産の基本概念について、歴史的変遷から概説し、助産師の責務と社会変化の中で期待される役割の重要性について、更に助産師活動に積極的に取り組む姿勢について系統的に教授した。内容は次に示すとおりである。1. 助産学の構成、2. 助産の本質・意義・対象、3. 助産の原理原則、4. 助産の歴史とあり方、5. 助産風俗、6. 母子保健の動向と諸制度、7. 助産師の職制と業務（諸外国と日本）8. 助産師教育（諸外国と日本）、9. 助産学を構成する理論・助産過程の基本、10. 助産師と倫理、11. 諸外国の助産師活動、12. ICM（国際助産師連盟）の活動、13. 日本の助産師の現状と課題、14. 助産学と研究。評価は試験1回と課題レポートである。出席状況は100%出席で、講義内容には大変興味を持って参加した。

本年度の改善点：昨年同様課題レポートを課し、文献検索・思考力の訓練の強化を図った。今後の課題は情報化時代の講義内容の精選である。

7) 助産診断・技術学Ⅰ 3年次 前期後期 (05/12~02/10) 1単位

担当：林 猪都子

助産診断に基づいて、助産を実践するための基本的な知識と技術を理解するために、妊娠期、分娩期の助産診断、援助技術、保健指導についての講義と演習を行った。妊娠期の確定診断、時期診断、経過診断の内容に加え、妊娠期の超音波診断ができるように妊娠期の超音波診断の講義を充実させた。分娩期は分娩経過診断ができるために、分娩経過と児頭回旋、内診所見の関係が理解できるように骨盤模型や内診モデルを使用して講義を行った。学生は「具体的にイメージできた」「積極的に参加できた」との意見であった。来年度に向けての反省として、授業に使用する教科書の提示を事前にするようにしたい。

8) 助産診断・技術学Ⅱ 3年次前期後期 (05/12~02/17) 1単位

担当：小西 清美、梅野 貴江

思春期、マタニティサイクル、更年期の時期における女性の内分泌の変動に伴う自律神経の変化や産褥と新生児の生理と病態、乳房管理などを講義や演習で助産診断・技術学を教授した。母乳哺育支援や新生児の異常と看護は、模型やビデオ学習、絵図の多い資料を

用いて講義をするとともに、出生直後の新生児の取り扱いや新生児の蘇生、計測などを演習で体験することで理解させた。授業評価では、全講義とも欠席なく、講義は意欲的に参加していた。学生の感想として、実際に演習し、ビデオ学習することで、学びのイメージがしやすかったとの声が多かった。要望として、次の講義で使用する教科書を示してほしいとのことから、次年度は使用する教科書を講義予定に明記したい。

9) 助産診断・技術学Ⅲ 3年次前期後期 (05/11～02/15) 1単位

担当：松本 英雄、飯田 浩一、佐藤 昌司、室 康治、
馬場 真澄、豊福 一輝、宇津宮 隆志、中村 聡

マタニティサイクルにおける女性の医学的管理と異常及び新生児医療について、それぞれの専門とする医師によって講義された。講義は欠席なし。約1年間にわたる講義についての感想として、「ホワイトボードを使用しての講義はわかりやすかった」、「臨床で実際に行われていることを学ぶことができ、病態や診断・治療はイメージしやすかった」、「テスト範囲が広い」、「講義が休講になることが多かった」などが聞かれた。熱心に講義を受け、自己学習をされていることが伺われ、成績の結果は平均83点と高得点で欠点はいなかった。次年度は、「テスト範囲」と「講義が休講にならない」ように対策を検討する。

10) 助産診断・技術学Ⅳ 4年次 前期前半 (04/12～04/28) 1単位

担当：林 猪都子、小西 清美、大神 純子、梅野 貴江、
田中 薫

分娩期の助産診断の講義と症例を用いて、入院時から分娩経過の予測と助産診断が行えるように、助産過程の展開を行い、実際に助産学実習で活用できるように教授した。「助産診断システム研究会」の助産診断の概念枠組みを用いて、時期診断、状態適応診断、経過予測診断が行えるように、1事例をグループ学習で展開し、1事例を個人課題として取り組んだ。今年度は、グループ学習での事例展開の内容解説を行ったことが、各個人の課題学習によく生かされていた。

分娩介助の演習では、側面介助法(1日：4コマ)、正面介助法(1日4コマ)の2通りの介助法を習得させている。演習方法では、1コマ目は、分娩介助の方法を解説し、教員がデモンストラーションを行った後、残りの3コマの演習は、直接介助、間接介助、新生児の役割などを決めて、教員の指導のもとで全員が最初から最後までの一連の流れを実施した。学生は、最初は手順に沿って実施し、次の段階では助言なしで一通りの分娩介助技術が行えることを目標に、分娩介助評価表を用いて、5回以上の直接介助を実施している。技術の評価は、グループの他者評価、教員が技術チェックを行っている。分娩介助の演習を終えての感想として、「分娩介助の手順はスムーズになってきた」「練習を重ねていくうちに自然と声かけしていた」、「細かい気配りや声かけ、呼吸法の誘導が大切。1回目は分娩介助も1時間かかっていたが、最後には40分くらいで終えた」、「練習中のメンバーが笑顔でわかりやすい声かけだったので、自分がもし産婦であったら安心できると思う」、

「演習室で実施したにもかかわらず、毎回緊張していたように感じた」「助産師の不安は産婦に伝わったと思った」などが多く聞かれた。

助産実習でも必要物品の準備や手順はスムーズであったとのことから、今後も継続して行いたい。

9) 地域助産活動論 4年次 後期前半 (10/11～11/30) 1単位

担当：宮崎 文子 小西 清美

助産管理の概念について、その本質と機能、助産管理（経営管理）の歴史的変遷、開業権を持つ専門職業としての概括的な知識・考え方および地域助産管理に必要な理論について教授した。

講義内容は学生の興味を重視して、事例を踏まえての展開と最新情報の提供に留意している。

改善策としては、特に助産師の自立の視点から助産所の経営管理の中でマーケティング手法と財務管理に焦点を絞り事例演習を強化した。課題としては、今後は経営管理の理解を深めるためには助産所実習との関連性を強化し、助産所実習期間（現在3日を1週間に）の延長をしたいがカリキュラム上の制約のため希望実習で補充したい。

10) 母性看護学実習 4年次後期 (09/12～12/02) 2単位

担当：梅野 貴恵 田中 薫、宇留嶋 佳子、宮崎 文子、
吉留 厚子、林 猪都子、小西 清美

母性看護学実習の実習施設は2施設である。今年度は、施設毎に1グループ5～6名の学生と1～2名の担当教員という組み合わせで、2週間（のべ12週間）の実習を行った。

実習は学生に1名の妊産褥婦を受け持つように配慮し、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開の実際を体験学習させた。そして、幸運にも今年度は1名をのぞくすべての学生が分娩見学実習が出来、生命誕生の場面を通して自己を振り返ることで母性看護の概念を認識できた実習となったと思われる。また母性各期の保健指導もそれぞれが工夫して取り組みが出来た。

実習施設と学生数（実習延べ期間12週間）

大分県立病院4階東病棟、産科外来（学生数35名）

堀永産婦人科医院（学生数35名）

11) 助産学実習 4年次前期 (06/20～09/16) 8単位（総合実習2単位含む）

担当：梅野 貴恵、田中 薫、宇留嶋 佳子、宮崎 文子、
林 猪都子、吉留 厚子、小西 清美

助産学実習においては、妊娠中から産後までの家族を含めた継続的な援助および、安全で安楽な「いいお産」が出来る助産能力を身につけるための実践実習を行った。

本年度の助産学専攻学生は9名である。実習施設は、分娩状況からみて以下の5施設で学生、担当教員、専任教員の組み合わせで指導に当たった。少子化が急速に進行する現状

での分娩介助10例程度（規定：9例以上）は助産学実習の課題である。今年度も実習期間中の分娩件数不足が予測されたため夜間実習を余儀なくした。また学生の希望実習（夏休み21日間）により8名が達した分娩介助件数は9例から15例であった。昨年の反省から産褥期の記録物の簡易化を図り、大幅な記録物提出の遅れは見られなかったが、分娩進行におけるアセスメントが弱い傾向にあり、今後の課題である。

<実習施設と学生数>

- 1) 大分県立病院4階東病棟（1学生母体搬送・帝王切開受け持ち1例含む）、産科外来
で1学生8日間 のべ2週間：学生数8名
- 2) 堀永産婦人科医院（6週間）1学生分娩介助9例以上・家庭訪問含む）：学生数6名
- 3) くまがい産婦人科医院（6週間）1学生分娩介助9例以上・家庭訪問含む）：学生数2名
- 4) 生野助産院（1学生2日間 述べ2週間）：学生数8名
- 5) 友成助産院（1学生1日間 述べ8日間）：学生数8名

3. 卒業研究

- ・性別差がメンタルワークロードにおよぼす影響
- ・産褥1～5日目における桶谷式乳房マッサージ前後の乳房皮膚表面温度の変化
- ・妊婦が安心して飛行機旅行をするための情報提供
- ・妊娠中のカフェイン摂取の実態と喫煙との関係
- ・分娩後8日目～5ヶ月における桶谷式乳房マッサージ前後の乳房皮膚表面温度の変化
- ・月経周期がメンタルワークロードにおよぼす影響
- ・妊婦の産後ケアへのニーズ調査－初経別・職業の有無別比較

3-5-13 精神看護学研究室

学部生への講義・演習・実習では、卒業後にどのような場で活動する際にも「人々のこころの健康に関する援助」に役立つような実践能力を培うことを目標に、一つの流れとして内容を構成することを意図している。特に、実習は精神科医療の場において行うが、学生には病棟内だけでなく人々の「生活の場」に目を向けることと、精神科医療以外の場でもこころの健康に配慮できることを求めている。

1. 教育活動の現状と課題

看護学において精神看護学は、一つの専門的領域であると同時に看護学の共通・基本領域でもある。そこで以下のことを教育の目標とした。a) 学生の精神障害（者）に対する偏

見を是正する。b)社会情勢にマッチし、かつ学生にとってインパクトのある内容・方法を工夫し、学生が興味と関心を持って自律的に学ぶ契機となるよう配慮する。また、授業の前後や途中で学生の関心・希望・理解度等の簡易調査を試み、その結果を随時授業内容にフィードバックするようにした。

2. 科目の教育活動

1) 精神看護学概論 2年次 後期 (10/07～01/26) 1単位
担当：影山 隆之

<実施状況>

オリジナルのテキスト（毎年、改訂・製本）を使用し、a)心の健康について理解するために活用できる諸モデル（考え方）、b)精神看護のアセスメントに必要な症状と状態像の知識、c)主な精神疾患の疾病論、d)精神保健看護の歴史、の四領域について講義した。テキストには、理解の助けになる事例（文章記述）や例題をふんだんに取り入れるようにした。学生が精神看護に興味を持ち、精神障害者に対する偏見を払拭できるよう、CD・OHC・ビデオで芸術作品や当事者の生活を提示した。毎回の授業時間内に、学習内容に関連した小レポート（記名式）を提出してもらい、授業の後半の内容に即興的に活用した。これは次回までに朱入れして返却し、学生の疑問や理解不十分な点に応答するようにした。

今年度からの新たな試みとして、小レポートとは別に、自由な質問・要望（無記名式）を授業終了時に提出してもらい、授業技術の改善の参考にした。また、学生の意見を聞いて、評価のための筆記試験を中間と最終の2回に分けて実施した。

<評価および課題>

学生の評価・レポートを見る限り、自分が持っていた精神障害（者）に対する偏見・不安への気づきという面では、初期の目標を達成したものと判断される。また、授業中に具体的な事例を多く取り上げたことが、理解の助けになったという声も多かった。しかし同時に学生は、(1)目に見えない心の問題について考え学ぶ難しさ、(2)本科目で学んだ考え方が看護現場（実習現場）にどう応用できるのか想像がつかないという疑問、(3)個々の精神疾患について理解する時間の不足、(4)他科目で学んだ用語・概念と本科目で学んだこととの異同についての混乱（学生の理解不足による）、などを感じていることも示唆された。試験を二度に分けた結果、中間試験で不振であった学生の危機感（学習動機）を高めることもできた。

今後の課題は、(1)本科目に先行する人間関係学の授業との接続について担当者といっそう綿密な詰めを行い、前記a)b)の授業内容を精選すること、(2)これによって生じた時間的余裕を、より多くの事例の紹介と前記c)の授業内容に振り向けること、(3)他科目で学ぶ用語・概念との異同を学生が感じて戸惑う理由についての調査・調整、などである。

2) 精神看護学援助論 3年次前期前半 (04/12~06/10) 1単位
担当：大賀 淳子

<実施状況>

前段階の精神看護学概論で学んだ基礎知識を踏まえ、次段階の精神看護学実習につなげるために、学生が実習で（さらには卒業後に）出会う可能性が高い疾患に焦点をあてた。過去の学生が実習で戸惑った場面を多く提示し、学生に考えさせる機会を多く持った。例年のように、毎回講義終了時にミニレポートを課し、教員のコメントを添えて次講義で返却した。

今年度の新たな試みは、以下の2点である。a)精神科医療に関する4つのテーマを初回講義時に提示し、この中から興味のあるテーマについて最終講義までの間（2ヶ月間）に文献検討に基づいたレポート作成を課した。b)毎回のミニレポートの内容に、講義内容に相当する国家試験問題を組み込んだ。

<評価および課題>

学生による授業評価の結果をみる限り、精神疾患や精神障害者に関する知識の習得により、これまでの偏見を減少させ、精神看護への関心を高めることはできたと判断された。また、2ヶ月にわたる文献検討に基づいたレポート作成や、毎回のミニレポートで国家試験問題に取り組んだことへの学生の評価は高かった。しかし、「各疾患の看護についての具体的な知識」の提供が不十分であったとの指摘を受けた。

次年度への課題は、社会における疾病構造の変化に即した講義テーマの精選と、より具体的な知識の提供などである。

3) 精神看護学演習 3年次 前期後半 (06/17~07/07) 1単位
担当：影山 隆之、大賀 淳子、田村 充子

<実施状況>

この演習では、精神看護学概論および援助論を土台とし、臨地実習へむけての実践的な学びとなることを目指した。内容は、コミュニケーションについての体験学習、精神看護アセスメントの演習、精神科における看護計画の立案演習、演習に続く実習の場となる病院の院長による講義などである（全7回）。学生を6名ずつの12グループに分け、毎回の内容に応じて、グループワークの時間と個人作業の時間を組み合わせ、あるいは教員がファシリテーターとなってクラス全体で分かち合いの時間を持つなど、柔軟な構成で進めた。毎回時間内に提出されたレポートは、朱入れして次回以降に返却するとともに、多くの学生に共通する課題と思われる点について資料を作成し次の回に補足した。

<評価および課題>

この時期に学生に経験してほしい演習内容は多いにもかかわらず、時間や場所が限られているため、内容や進め方について毎年新たな試行を取り入れているところであり、内容の精選や、グループ分けの効果を最大限に発揮させる工夫が今後の課題である。

4) 精神看護学実習

3年次後期（09/12～12/02） 2単位

担当：影山 隆之、大賀 淳子、田村 充子、
秦 桂子、大島 操

<実施状況>

大分丘の上病院において、3つの病棟（ストレスケア・思春期、急性期、療養）、および外来、デイケアの各部門での実習を通して、精神科医療施設での看護だけでなく社会の中での精神看護の役割について学習させた。例年行っている精神科医療・看護に関する院長とのディスカッションに加え、本年度は新たに、精神障害者の社会復帰に関する学習の機会として、PSW（精神保健福祉士）とのディスカッションの時間を設けた。いずれも学生があらかじめ質問を準備して臨み、高い学習効果を得た。

もうひとつの新たな試みは、最終カンファレンスの改善である。限られた時間内で、実習成果を伝え、ディスカッションを行うことができるよう、カンファレンス前日の準備（病棟グループでの討論とまとめ）を充実させた。

<評価および課題>

学生からの声： (1)病院スタッフへの感謝の意を述べる学生が増え、特に病棟で充実した指導を受けられたことに学生は満足していた。(2)例年、カンファレンスに関する要望が多かったが、今年度は激減した（2意見のみ）。3人の担当教員が、カンファレンスの運営について常に意識し、情報交換をしながら指導にあたった成果であろう。(3)教員の指導に関する要望は多様であり、今後の指導の工夫が必要である。

臨床指導者から寄せられた主な意見： (1)記録をパソコンで作成する学生が増えてきたが、読むスタッフは手書きのほうが読みやすい。(2)精神科は他科と大きく異なる部分が多く、スタッフに尋ねなければわからないことが多くあるはずである。スタッフと学生とのコミュニケーションをもっと大切にして欲しい。

今後の課題： (1)教員は、学生のおよきモデルとなるべく努力して下さっている臨床指導者の方とのタイムリーな情報交換を行って、臨床指導者に学生の理解度を的確に把握していただけるようさらに努力する。(2)実習までの学内における講義・演習を通して、学生の観察力を高める工夫が必要である。学生は特に、日常の何気ない会話やノンバーバルなコミュニケーションを介した観察が苦手である。

3. 卒業研究

- ・在宅高齢者における睡眠維持の困難と抑うつ症状との関連
- ・高齢者を対象とした快眠教室の効果－運動指導との関連－
- ・ピック病患者への援助について－援助者へのインタビューより－
- ・自殺の危険が疑われる部下に対しての管理職公務員の対応について
- ・若年期のボディイメージとダイエットの知識や行動および自尊感情との関連

3-5-14 保健管理学研究室

地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識とスキルの習得を目的として、学生自らが考え実践することを重んじた教育プログラムを組み立てている。1年次は、健康という概念を理解するとともに、講義と実習を通じて看護職者の活動する領域と各領域における対象者の多種多様な健康ニーズを学び、2年次には、保健・福祉・医療に関する諸制度・法体系の構造とその活用に必要な基本的な考え方を、3年次では、専門職に求められる行動原則としての倫理および、地域・学校・産業などの具体的な場面における保健活動の実際を学ぶとともに、演習を通して実践に必要なノウハウを体験的に習得することを目標にしている。

1. 教育活動の現状と課題

講義においては、今日の社会の変化に応える最新の内容を目指すとともに、多様な健康ニーズと社会の要請に対応できるよう内容を検討している。他の講義や実習との結びつきを考えて講義・演習の内容を組み立てており、3年次の演習で、具体的な事例検討を通して実践能力を養うとともに、4年次の地域看護学実習に持参して活用できる資料の作成など、課題の構成に配慮したことはその一環である。

2. 科目の教育活動

1) 健康論 1年次 前期前半 (04/12~06/07) 1単位

健康の概念と健康に対する考え方の歴史的変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し自らの生活を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう講義を行った。

授業評価において、出席状況は良好であった。しかし、授業参加意欲が十分でなかった学生が若干存在すること、授業の満足度や、理解度が不十分と考える学生が1/4あったなど、1年次の最初の講義として理解しにくい部分があったのではないかと思われる。その一因は、健康の概念など、言葉の定義とともに概念枠組を理解することが求められる講義内容にあると考えられるため、来年度は、抽象的な概念操作に慣れない1年次生の理解を助けるために、より具体的な視点で健康を考える機会となるよう講義を組み立てていきたいと考える。

担当（講義回数）と概要

草間 朋子（2）大分県立看護科学大学における教育方針、看護の視点から健康を考える

坪山 明寛（1）医療における感性とその役割

平野 互（3）健康の価値、健康の評価、健康づくりと健康日本21の展開

桜井 礼子（4）ライフサイクルと健康、生活習慣と健康、健康と栄養、運動と健康・こ

ころの健康

高波 利恵 (1) 環境と健康

宮崎 文子、高野 政子、栗屋 典子、影山 隆之、中村 喜美子、八代 利香

各専門分野における健康課題と看護職の関わり

2) 保健福祉システム論 2年次 後期 (10/04~12/20) 2単位

担当：平野 互

まず「権利」について論じたのちに、憲法に謳われた基本的人権である生存権を実現するための制度的保障すなわち社会保険、社会福祉、国家扶助および保健・医療を内容とする社会保障制度の概要とその意義を論じた。少子高齢化や感染症の動向など今日の社会変化とそれに対応する関連法規や制度を可能な限り体系的に理解できるよう整理するとともに、国家試験の出題傾向にも対応できるよう講義を構成した。加えて、システム・マネジメントに必要な事業評価とリスクマネジメントや、インフォームド・コンセントを中心とした患者・障害者の諸権利の諸相について論じ、専門職としての判断に必要な基礎知識を獲得できるようにした。

学生の授業評価からは、膨大な情報量への対処に苦勞する学生も一部いることが示唆されたものの、おおむね学生が講義の意図を理解し、少なくとも権利や社会保障制度に対する関心を高めて、制度の枠組に対する理解ができたことが伺えた。しかしながら、例年より出席率が低い傾向にあり、初期の講義で学習意欲の向上と講義出席への動機付けを図るための工夫をする必要性があると考えられる。

3) 保健活動論 3年次 前期 (06/16~07/14)

後期 (12/05~12/22) 2単位

地域、学校、産業における法令に基づく保健活動のあり方と実際を教授した。看護職として個人及び集団の健康の保持・増進、疾病予防のための支援のあり方を理解するとともに、保健活動の具体的な実践方法とその評価について学ぶことができるよう講義を構成した。また、地域の救急救命活動の実際を理解し、救急救命処置の一つとして心肺蘇生術の実践ができるよう演習を行った。

授業評価では、頻回欠席の学生が数名いたことが示された。また、基本的な知識や考え方、手法の理解が不十分と考える学生が4割近くおり、もっとポイントを教えて欲しいといった意見が複数見られた。実習期間との兼ね合いで後期に講義が集中することや、学校保健や産業保健などは時間数に対して講義内容が密であることもあり、来年度からの時間配分と講義内容について、学生の理解を深めるための再検討を行った。救急救命処置以外は出欠をとらない方針であるが、学生の欠席に関しては、講義内容の重要性について学生にオリエンテーションをし、動機づけを行なう必要性があると考えられる。

担当 (講義回数) と概要

草間 朋子 (2) 看護職の活動、看護職と法令

平野 互 (3) 健康教育の進め方、地域保健活動 (保健所・市町村)

- 桜井 礼子 (6) 救急医療と災害看護活動、学校保健活動、保健所の役割と活動
高波 利恵 (2) 産業保健活動
遠藤 俊子 (2) 産業保健活動の実際
大神 貴史 (1) 保健所の役割と活動の実際
日本赤十字社(4) 救急救命処置の基礎 (講義1、実技3)

4) 看護の倫理 3年次 前期前半 (04/15~05/13) 1単位
担当：平野 互、小西 恵美子

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的行動規範に基づく思考訓練を行うことを目的に、5時限の講義と3時限の事例演習を行った。講義は、「Professionと倫理」・「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の方法」・「患者の権利」の4回を平野、「看護職の責任と倫理規定」を小西が担当した。事例演習は、「ケースブック医療倫理」(医学書院)をテキストに、志願者を募ってスモール・グループによる発表・討議を9題行った。事例の発表者についてはグループ・レポート、その他の学生については課題に対する個人レポートにより成績評価を行った。

5) 保健管理学演習 3年次 後期後半 (01/19~02/23) 1単位
担当：草間 朋子、平野 互、桜井 礼子、高波 利恵、朝見 和佳

保健活動の領域で実際に直面する可能性のある事例に対して、グループワークを通して、さまざまな視点から問題解決にいたる筋道を検討するとともに、プレゼンテーションと議論の訓練を行うことを目的とした。産業、学校、地域の領域における保健活動、対象者支援の企画・実践・評価に関して、国試状況問題も視野に入れた状況設定事例を12題提示し、1グループ6~7名の12グループを編成、各グループが個々に課題に取り組んだ。グループ・ワークにより、各課題に示された設問に対するレポートを製作し、さらに発表会でプレゼンテーションを実施した。また12グループのうち3グループは、健康教育、保健指導のロールプレイを行った。発表を通して、問題解決方法の多様性、視点の違いなどを議論した。成績評価では、問題解決のための能力ばかりでなく、議論への参加態度にも着目した。

学生の授業評価からは、学生が科目の目的を理解し、それぞれが関心をもって課題に対する学習を深めたことが示され、当初の目標はほぼ達成できたものと考えられる。

6) 初期体験実習 Early Exposure 1年次 前期後半 (07/12~07/20) 1単位
担当：朝見 和佳、安部 恭子、大賀 淳子、大津 佐知江、大村 由紀美、甲斐 仁美、工藤 節美、桜井 礼子、秦 桂子、高波 利恵、玉井 保子、玉置 奈保子、田村 充子、時松 紀子、中原 基子、日吉 孝子、平野 互、福田 広美、松尾 恭子、山下 早苗、八代 利香、吉田 智子、草間 朋子
看護職の活動する保健・医療・福祉の場において、3日間の施設実習で看護活動の実践

を体験し、対象の健康ニーズと看護職の活動を知ること、看護職と協働する他の専門職の役割や人々の健康を支えるためのシステムを知ること、さらに学内カンファレンスを通して、異なる施設での実習体験を共有することで人々の多様な健康ニーズを知り、人々の健康を支えるための看護職の役割を知ることが目的とした。

実習施設：

事業所：株式会社大分銀行、新日本製鐵株式会社大分製鐵所、
九州電力株式会社大分支店、昭和電工株式会社大分事業所健康管理センター
保健福祉施設：大分県精神保健福祉センター
検診センター：大分県地域保健支援センター、大分県地域成人病検診センター
学校：大分大学教育福祉科学部附属養護学校、大分大学保健管理センター
病院：大分県立病院、大分赤十字病院、農協共済別府リハビリテーションセンター、
湯布院厚生年金病院、別府発達医療センター、緑ヶ丘保養園
介護老人保健施設：わさだケアセンター、健寿荘、百華苑
特別養護老人ホーム 百華苑
市町村：大分市、湯布院町

3. 卒業研究

- ・高齢女性の内転筋トレーニングの方法とその効果
- ・在宅高齢者の生活関連体力に関する縦断研究
 - －体力測定値の経年変化とその関連要因の検討－
- ・高齢者の健康関連体力の実態　－自己評価結果と測定結果との関係－
- ・高齢者の運動継続に関連する要因の検討　－心理的要因に着目して－
- ・足踏みによる高齢女性の全身持久力の測定方法
 - －無酸素性作業閾値時の酸素摂取量と心拍数、血圧との関係－
- ・BIA法による高齢者の体脂肪率測定法とその判断基準
- ・「サロン」を中心とした高齢者の介護予防のための運動とその評価

3-5-15 地域看護学研究室

個人、集団、地域へと視点を広げ、地域を包括的に捉えた看護活動を行うために必要な基本的考え方、援助方法を身につけることを目的に、地域看護学概論、家族看護学概論、在宅看護論、地域生活援助論I、地域生活援助論II、地域看護学実習の科目を設けている。特に、講義と演習、実習の連動性を考慮して、演習内容や実習方法等を工夫している。

1. 教育活動の現状と課題

実習の場において、個人、集団、地域を対象とした看護展開ができるよう、学内演習で

は、実習場面を意識した課題を取り入れている。例えば、実習直前の演習では、地域の健康問題を踏まえた活動内容を理解できるよう、実際の実習地域の既存資料をもとに、地域看護診断を行った。また、個人を対象とした援助では、ペーパーペイシエントを用いた看護過程の展開、家庭訪問場面におけるロールプレイ、入浴、移動の基本的看護技術を取り入れ、地域における看護活動の視点や、具体的な援助技術について理解できるよう工夫した。実習終了後には、今後の演習内容を検討するため、訪問看護ステーションで体験した看護技術の項目や実施頻度について調査を実施した。今後も、社会や地域の動向に合わせて、常に、教育内容を検討する必要がある。

2. 科目の教育活動

1) 地域看護学概論 2年次後期前半 (10/13～12/1) 1単位

担当：中村 喜美子、神品 實子

地域における個人や家族、集団への看護活動を行うために、地域住民の主体性を重視した地域看護学の基本的事項について講義した。主な内容としては、地域看護学の概念、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション、地域看護活動の場の特性、地域看護活動の対象と方法（個人と家族、集団と地域）、地域看護の変遷、大分県の地域看護活動である。資料やパワーポイントを活用して、学生の理解を深め、個人、集団、地域へと視点を広げるための工夫として、現在、生活している大分県における地域看護活動を行政に携わっている保健師を招いて具体的に紹介していただき、地域看護活動のイメージづくりを行った。学生の授業に対する評価は様々で、パワーポイントについてはどちらともいえないを含めて分かりやすかったと答えた学生が8割いたのに対して配布資料では6割であり、資料の内容や利用の仕方等にさらなる工夫の必要を感じた。

2) 家族看護学概論 3年次前期前半 (04/18～05/16) 1単位

担当：中村 喜美子、工藤 節美

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と援助方法について講義と演習を行った。主な内容としては、家族看護学の概念、家族の機能と家族看護、家族を理解するための諸理論、家族看護における看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の演習である。特に、家族看護過程の演習では、「家族を一つのユニット」として捉えて援助する意義や方法を理解させるために、ロールプレイによるカルガリー家族アセスメント・介入モデルに基づいた家族インタビューを取り入れ、学生間での具体的な体験を通して学びが深まるよう工夫した。

3) 在宅看護論 3年次後期後半 (12/06～01/11) 1単位

担当：中村 喜美子、工藤 節美、秦 桂子、
大村 由紀美、大島 操、河野 智美

疾病や障害をもちながら地域で生活する人々とその家族に対する看護を行うために、在宅看護の基本的な考え方と援助方法について講義と演習を行った。主な内容としては、在宅看護の概念、在宅看護の活動の場と特性、社会資源の種類と活用、ケアマネジメント、生活支援の方法、医療依存度の高い人のケア、在宅ターミナルケア、訪問看護ステーションにおける看護活動の実際、在宅看護過程の演習である。在宅看護過程の演習では、グループワークの方法を用いて、自宅で療養生活を行っている療養者の事例（ペーパーペイシエント）に対する具体的な看護計画を立案した。さらに、訪問看護ステーションにおける看護活動の実際では、大分県内の訪問看護ステーションで活動している看護師を講師として招き、県内の訪問看護の現状や具体的な活動内容について学びを深めさせた。

4) 地域生活援助論I

3年次後期後半（01/16～02/17）2単位

担当：中村 喜美子、工藤 節美、秦 桂子、
大村 由紀美、大島 操、藤内 修二、
日隈 桂子

保健所、市町村を基盤とした行政機関における地域看護活動の展開や対象別地域看護活動について講義と演習を行った。主な内容としては、地域看護活動の展開、地域看護活動の展開の演習、健康相談と家庭訪問、地域看護活動とヘルスプロモーション、母子保健活動、成人保健活動、高齢者保健活動、難病保健活動、感染症保健活動、感染症保健活動の演習、精神保健活動、障害者保健活動、地区組織化活動における保健師の役割、災害看護活動、市町村の保健師活動である。特に、地域看護活動の展開の演習では、大分県内の某町を事例として用い地域看護診断を行わせ、既存資料の分析、地域の健康問題の抽出、生活の場としての地域の捉え方を学ばせた。感染症保健活動の演習では、結核患者の事例（ペーパーペイシエント）を用いて看護過程の展開を行い、問題解決のための具体的な支援方法について学ばせた。また、感染症保健活動の演習では、まとめの時間を設けて演習内容の評価をフィードバックすることで学びが深まるよう工夫した。さらに、地域看護活動とヘルスプロモーションでは県内の公衆衛生に携わる医師を、市町村の保健師活動では県内の町保健師を講師として招き、ヘルスプロモーションの理念に基づいた地域看護活動の実際について学びを深めさせた。

今後は、保健所の再編や機能強化、市町村合併等によりますます複雑化する行政機関における地域看護の役割・機能を具体的に理解させるための授業内容の検討が必要である。

3) と4) を合わせた学生からの授業評価は、授業の進め方については約30%が適切、50%が理解度にあわせて進めていたと評価していた。しかし、教材について、パワーポイントや資料は活用されているが、資料や情報量が多すぎて理解できなかったとの意見もあった。今後は、授業の進捗状況と学生の理解度に合わせた教材の精選（質・量）と効果的な活用方法について検討する必要がある。

5) 地域生活援助論Ⅱ

4年次前期前半（04/14～05/06） 1単位

担当：中村 喜美子、工藤 節美、秦 桂子、
時松 紀子、大村 由紀美

地域看護学実習前の演習として位置づけ、既存資料を用い実習地域の地域看護診断、健康相談、家庭訪問における入浴援助の実技、新生児の計測の実技、ペーパーペイシエントを用いた看護過程の展開を行った。各々の演習では、グループワークを中心として担当教員が巡回し、きめ細かな指導を行った。特に、既存資料を用いた実習地域の地域看護診断の結果を実習開始時に実習指導者に提出し、実習指導に反映させていただく資料とする等、地域看護学実習との有機的な連動に努めた。

6) 地域看護学実習

4年次前期（05/16～06/17） 4単位

担当：朝見 和佳、安部 恭子、大村 由紀美、甲斐 仁美、工藤 節美、桜井 礼子、
秦 桂子、田村 充子、高波 利恵、玉置 奈保子、玉井 保子、時松 紀子、
中原 基子、日吉 孝子、八代 利香、山下 早苗、吉田 智子、中村 喜美子、
平野 互

大分県下全域の県民保健福祉センター（保健支所を含む）及び保健所14、市町30、訪問看護ステーション25の施設に、それぞれ学生を2～5名配置して1～2週間の実習を行った。

実習指導体制は、それぞれの施設の看護職が実習場で直接的な指導を行い、担当教員は各施設を巡回して、カンファレンス指導、記録指導、実習施設や指導者との調整等を行った。実習内容は、市町と訪問看護ステーションではそれぞれ少なくとも1名の対象者への訪問指導、また市町では地区視診と集団を対象とした健康教育を体験することとした。

今後は、保健所の再編や機能強化、市町村合併等の社会や地域の変化も踏まえ実習内容や実習形態の工夫が必要である。

3. 卒業研究

- ・学童肥満に関する研究の文献的検討 —学校保健研究掲載論文の分析から—
- ・糖尿病患者に対する口腔ケア指導の現状と看護師の認識
- ・介護予防事業に参加しているボランティアの家庭内役割の現状
—山村地域と漁村地域との比較—
- ・1～3歳の子どもをもつ父親の生活時間と家事・育児の現状
- ・1～3歳の子どもをもつ母親の生活とゆとり感に対する就業と家事・育児支援の影響
- ・介護予防事業に参加しているボランティアの活動状況と役割認識
—山村地域と漁村地域との比較—

3 - 5 - 16 国際看護学研究室

International nursing courses aim at the development of an understanding of global cooperation and networking of health and of nursing, develop an understanding of global health issues and strategies; realize roles and responsibilities of nursing profession in the global era in the diverse socio-economic, cultural, and eco-geological context; the impact of international aids and cooperation during war and disaster and develop fluency in the use of global health and nursing terms.

Three mandatory courses for baccalaureate students, one for sophomore class and two for junior students are planned and carried out. Two elective courses for post-graduate students, one each for master's and doctorate, are open.

1. 教育活動の現状と課題

Language used for the classroom activities:

Texts, presentations and Q and A are carried out in English.

To promote the understandings, texts including the lists of references with exercise questions are distributed at least one week ahead of actual presentations, followed by tests on the previous texts one week after each presentation.

English proficiency of the students are to be promoted.

Autonomy of the study;

For the Seminar, detailed-orientation programs; on the themes of self-studies, references, method of presentations, and locus of group-studies were planned and presented by the faculty at the beginning of the Quarter. Grouping of students for self-studies and choice of the themes are assigned to the students, for the autonomy of the class-leader.

Students are reluctant and passive in participation in the classroom activities, even in question and answer are limited to the ones assigned by the faculty. Active and autonomous participation by the students are to be promoted.

Evaluation of the courses by the students;

Students were provided with the opportunities to evaluate the course. Evaluation for the level of achievement of the aims and objectives of the course, contents of the course, time allotment and teaching methodology etc. were planned by the faculty and carried out by the students.

Junior students, though very small percentage, demanded that the faculty to be proficient in Japanese and present the contents with Japanese explanations. This notion is to be taken for serious consideration.

2. 科目の教育活動

1) **International Nursing I, Introduction** 2年次 後期 (10/03～11/28) 1単位

担当 : Yatsushiro Rika

Objectives and contents;

1. to develop an understanding of the concept of, and, to define international health and international nursing.
2. to describe the background, course and trends of international cooperation in, and globalization of, health care.
3. to understand the context, scope, principles and approaches of international nursing.
4. to develop an understanding of the perspectives of international health issues and strategies.
5. to develop an understanding of the international health and nursing networks.

Contents ;

1. Orientation to the course, International Health Quiz (Basch)
2. International health and international nursing
3. International cooperation and Globalization in health and nursing
4. Global health issues, challenges and strategies; Communicable diseases
5. Global health issues, challenges and strategies; NCDs, Injuries
6. International Health Networks; World Health Organization
7. International nursing networks; International Council of Nurses
8. Wrap-up, evaluation of the Course

2) **International Nursing II, Comparison** 3年次 後期 (01/16～02/28) 1単位

担当 : Kim Soon Ja, Yatsushiro Rika

Objectives:

1. to develop an understanding of the context, scope and approaches of international health and international nursing.
2. to develop a global perspective of issues and strategies on health and of nursing
3. to develop an understanding of the need for human resources development for global health and nursing.
4. to develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networks and the impact of international aids during war and disaster.

Contents ;

1. Orientation to the course
2. Human resources; planning and development for global health and nursing
3. International relief organizations; activities during war and disasters (IFRC)
4. International relief organizations; activities during war and disasters (JICA)
5. Global health issues, challenges and strategies; review and summary
6. Culture, Health and Nursing
7. Global Nursing Workforce; status, issues and strategies (11. 5. 2004)
8. Wrap-up, evaluation of the course

Evaluation;

Written test on the course content

Written Reports submitted by the students of the 6th International Nursing Forum

- 3) **International Nursing Seminar** 3年次 後期 (01/16~02/28) 1単位
担当 : Yatsushiro Rika, Kai Hitomi

Objectives of the Course:

1. to develop an understanding of the concept, context, scope and approaches of international health/nursing in the diverse eco-geological, socio-economic, cultural and political context.
2. to develop understanding of the system of, and the need for planning and development of the human resources for global health.
3. to develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networking and the impact of international aids during war and disaster.

Activities:**Orientation to the course activities includes;**

Aims and objectives of the course, grouping, designation of role of each member, themes of the group studies and presentations, time allotment and place allocation, references, soft and hard aid and equipment for the study and presentation.

Group-works / studies:

Carried out by students; grouped into 4-5, according to prior planned schedule.

Themes for the group-works / studies and presentations;

- I. Health issues and strategies; of a population group
- II. Health issues and strategies; of a nation, a group of nations

III. Human resources for health or/and nursing of a nation / group of nations

IV. Impact and context of aids of JICA

Evaluation;

Group-work; contents (reports), participation, presentations in the class room (verbal, visual aids)

3. 卒業研究

- ・看護学生の死に対する認識 —日本と香港の比較—
- ・日英米における看護師の職務満足に関する文献的考察

3-5-17 共通科目

1) 自然科学の基礎 1年次 前期 (04/14~09/28) 2単位

自然科学の基礎として何が求められているかを理解させ、学ぶべきポイントを教授することを目的として行っている。人間科学講座の教員（甲斐、品川、吉田、定金、岩崎、佐伯、中山）で分担して行った。講義内容は次の通りである。(1)20世紀の自然観革命、(2)なぜ、天気予報の単位は変わったか（SI単位系）、(3)熱と圧力、(4)情報とは何か、(5)化学の基礎、(6)有機化合物の構造、(7)有機化合物の反応性-1、(8)有機化合物の反応性-2、(9)生命の誕生と遺伝子の起源、(10)生物の多様性と進化、(11)体細胞分裂とDNAの複製、(12)配偶子形成と個体発生、(13)確率の基本-1、(14)確率の基本-2、(15)数学における2つの重要な記号、(16)微分・積分法の話

2) 健康科学実験

本健康科学実験では、基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的として、以下の10テーマからなる実験を行った。

(1) 組織学実習

担当者：岩崎 香子、高橋 敬

実験日:10/14、10/21、10/26、11/09

実験内容：組織学実習は光学顕微鏡（オリンパスCH30）をもちいて、ネズミやヒトの様々な組織切片を観察させスケッチさせた。

1) 切片ではあるが、それがかつては生体の組織や器官の一部として、どのようになりたって、どのように機能していたかに思いや考えを促すように注意した。また顕微鏡を使用するにあたり、その基本的な成り立ちと使用方法を説明し会得してもらった。デジカメの時代であるので、とくにアナログ画像とデジタル画像の違いを理解するための適切な解説をした。パソコンを実習室に設置し、写真入りの解剖テキストをデモンストレーションした。

2) スケッチすることはごく基本的なことであるが、特に重要であり、観察した各部位の名前を参考書で調べさせ、レポートさせた。これにより、ミクロな構造とそれに課せられた機能を実体験から修得できるだけでなく、観察を通してより深い理解と感動が得られた。すなわち、小さな構造が果たす大きな機能の理解が得られるように注意した。尺度に関してはマイクロメータを用いて計測させ、同じ対象でも倍率を変えることによりさらに詳細な観察ができることを体験させた。マイクロメータの数が足りないので、来年度は補給し、計測する技術と意義をより強調したい。

(2) 血液生化学実習

担当者：安部 眞佐子

実験日：10/05、10/06、10/07、10/12

実習内容：まず、生化学で用いる基本的な器具の使い方を指導した。次いで、マウス血清中のグルコース濃度をグルコースオキシダーゼ法によって測定した。既知の標準物質の濃度と比較して未知の濃度を測定することを説明した。また、同じ測定原理に基づく自己血糖測定器で自分の血糖を測定した。自己血糖測定器の使い方、血液の付着物の処理法などを説明し、血糖の変動要因についてグラフを用いて講義した。別に、マウス血清トランスアミナーゼを測定した。同時に、臓器ホモジネートの作り方を説明し、臓器ホモジネート中の酵素活性を測定し、どのような臓器に由来する可能性があるかについて学生が測定して確かめた。これらの酵素が高くなる病態を説明し、また、マウスとヒトの臓器分布の違いをレポートにまとめた。さらに、血清タンパク質の分離を行った。マウスの血清を電気泳動に依って分離し、染色液で染めて可視化し、アルブミンとグロブリンの違いについて説明し、血清タンパク質の概略や、いろいろな病態でパターンが変動することについて解説した。

(3) 血液検査

担当者：定金 香里、市瀬 孝道

実験日：11/04、11/11、11/16、11/18

実験内容：貧血・感染症に関わる以下の検査を行った。(1)ヘマトクリット値測定、(2)CRP検査、(3)赤・白血球数測定、(4)血球形態観察。検査の意義・原理について説明を行った上で、図、写真、見本試料を各検査でそれぞれ用意し、学生全員が手技を理解し、容易に実施できるようにした。血球の形態観察では、各血球の見本をスケッチするのではなく、血球塗抹標本から各血球の特徴を学生自身が捉え、好酸球、リンパ球等の血球を見つけ出すようにした。さらにこれらの検査結果から、貧血の赤血球恒数を算出し、貧血の診断を行う考察を行った。

(4) 基礎微生物学実習

担当者：吉田 成一

実験日：11/02、11/04、12/14、12/16、01/24、01/26

実験内容：環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物

質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

(5) ラットの解剖

担当者：市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

実験日：10/05、10/07、10/12、10/14

実験内容：ヒトの構造を知る一手段として実験動物として用いられているラットの解剖を行った。ラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。工夫した点としては、スムーズに解剖が進行するように、デモンストレーション時に解剖法を十分に説明し、また、心脈管系の図を白板に詳しく描き、実物と比較理解させた。

(6) 室内汚染と水質汚染

担当：甲斐 倫明

実験日：10/21、11/18、12/02、12/09

河川水と生活排水のCOD測定と水道水中の残留塩素の測定を通して、水質汚染の発生源との関係で水質汚染について考察させる実験と、室内汚染については、人間の嗅覚を利用した三点比較式臭袋法による測定で、喫煙やホルムアルデヒドなどの汚染物質の半定量的評価法についての実験を行い、生活環境の空気と水の質について考察させることを目的とした。

(7) 放射線

担当：小嶋 光明

実験日：10/21、10/28、11/02、11/09

環境中の放射線を測定することで、我々が日常どのくらいの量の放射線を被ばくしているのかを理解させた。また、医療の現場で一般的に用いられている診断用X線装置の散乱線を測定することで、医療の現場での適切な放射線防護の考え方を教授した。

(8) 染色体異常

担当者：伴 信彦

実施日：11/30、12/02、12/09、12/14

実験内容：正常染色体の標本と、放射線によって誘発した異常染色体の標本を検鏡し、染色体の構造的異常について学んだ。また、ダウン症候群の核型分析と慢性骨髄性白血病細胞の標本写真の観察を通して、疾病と染色体異常の関係について考察した。今年度は染色体標本を新たに作製しなおした結果、異常染色体を見つけやすくなり、従来よりも効率的に実習を進めることができた。

(9) 最大下負荷での呼吸循環器系持久力の測定

担当者：稲垣 敦

実験日：11/02、11/18、11/30、12/07

実験内容：自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定

して、心拍数と仕事率の関係、自転車の機械的効率、仕事量と酸素摂取量の関係から最大酸素摂取量を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被検者と検者の両方を経験できるようにした。また、テキストに加えて、レポートを一人で作成できるように説明を加えたレポート用紙を準備した。運動指導を想定して、指導者として注意すべき点を含めて説明した。実験にあたっては、年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。

(10) 筋電図による神経・筋活動評価 担当者：吉武 康栄

実験日：10/19、12/16、12/21、01/27

実験内容：筋電図の発生機序・意義を学習した。その後、最大下負荷運動中に主働筋である大腿4頭筋（外側広筋）から実際に筋電図を測定し、筋電図振幅値変化と運動負荷の関係から神経筋疲労閾値を評価した。さらに、将来の卒論執筆を念頭に入れ、提出レポートは論理的に書くように例を示しながら指導した。

3) 総合人間学 4年次後期（10/03～11/28） 2単位

担当：栗屋 典子（学部長）

さまざまな分野で活躍され、かつ造詣の深い講師のものの見方や考え方を通して、人間として、また医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことをねらいとしている。なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報を出して参加を促している。本年度の学外からの参加者はテーマにより20～50名と差があるが、延べ236名の参加があった。講師とテーマは以下の通りである。

釘宮 史子	（大分エアビジネス学院）：看護職の接遇マナー
西尾 治	（国立感染症研究所 感染症情報センター）：話題の感染症：ノロウイルスによる感染症、食中毒の発生状況と予防
松井 督治	（OBSアナウンサー）：大分の笑いと大分の方言
木城 敬二	（大分県消防防災課 課長）：救命救急について
石川 公一	（大分県副知事）：医療と情報管理
徳永 瑞子	（長崎大学医学部保健学科 教授）：看護職の国際協力
中村 多美子	（リブラ法律事務所 弁護士）：DV防止法と医療者による支援
近藤 稔	（大分県医師会 副会長）：医師が期待する看護業務（看護師像）

4) 総合実習 4年次前期後半（06/28～07/09） 2単位

担当：栗屋 典子（学部長）

本科目は実習教育の最終段階に位置づけられており、学生の自律性と総合的な判断力を育成することをねらいとしている。学生は第4段階までの実習体験から各自の到達度を踏まえて課題を明らかにし、自らが希望する領域と実習施設を選択する。各施設（部署）には原則として学生1名の配置とし、自ら実習目標・計画を立て、主体的に実習を展開する。

総合実習の具体的な準備については、教育・実習小委員会所管の総合実習WGが担当した。実際の実習では看護系教員全員が学生を分担している。学生は配置決定後の2月から担当教員の助言を得ながら実習目標・計画の立案を行った。実習に際して担当教員は学生に同伴はしないが、施設側との情報交換を十分にいき、学生の実習目標の達成を支援した。今年度は大分県内の37施設の協力を得て実習を行った。

5) 看護研究の基礎Ⅰ 3年次後期後半(02/20、02/21) 2単位

担当：栗屋 典子(学部長)

本科目は、卒業研究の意義や論文作成までの一連の過程で必要とされる基本的な考え方、基本的知識や技術を習得することを目的としている。講義は2日間集中して行った。講義のテーマと講師は以下の通りである。

1日目

- | | |
|-------------------|--------|
| 1. 卒業研究の意義 | 小西 恵美子 |
| 2. 研究の倫理と安全 | 吉留 厚子 |
| 3. 文献検索の方法・文献の入手法 | 高波 利恵 |
| 4. 調査研究の進め方の基礎 | 工藤 節美 |

2日目

- | | |
|------------------|-------|
| 5. 実験研究の進め方の基礎 | 安部 恭子 |
| 6. 文献研究の進め方の基礎 | 藤内 美保 |
| 7. データ解析の基礎 | 稲垣 敦 |
| 8. 論文のまとめ方・発表の方法 | 伴 信彦 |

6) 看護研究の基礎Ⅱ(原書講読)

4年次前期、後期前半 2単位

担当：栗屋 典子(学部長)

本科目は卒業研究に関連する原著、原書を検索、選択、講読し、専門論文の大意を把握し、研究を行う上での論理的な展開法を学ぶことを目的としている。学生は研究期間内に3編の論文についてまとめ、それぞれの研究室で行う抄読会で発表した。

7) 看護研究の基礎Ⅱ(総合看護学)

4年次後期前半(10/03～11/07) 2単位

担当：栗屋 典子(学部長)

本科目は看護基礎教育の総仕上げとして位置づけ、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことを目的としている。

具体的には、成人・老年、母性、小児、在宅、精神など専門領域から示された課題事例を2グループずつに割り当て、それぞれがグループワークを通してアセスメントすると共に、看護技術のロールプレイを行い、その発表に対する他グループおよび教員からの質疑

に回答する、という方法で行った。

3-6 大学院における教育活動

3-6-1 博士（前期）課程

1) 看護アセスメント特論 前期 (07/31、08/07、09/17) 2単位

担当：小西 恵美子、伊東 朋子、高野 政子、
藤内 美保

集中講義を3日間にわたって実施し、主に3つの内容から構成した。まず1点は、大学院生の実施している研究を通して、講義およびディスカッション形式で看護の視点からアセスメントを行った。様々な視点から活発な意見が出された。2点目は、フィジカルアセスメントの講義および演習を行った。呼吸器系、循環器系、神経系、リンパ系を中心に行った。3点目は、事例によるアセスメントを行った。小児の事例を通して、小児のアセスメントの特徴、フィジカルアセスメント、また看護過程についての講義・演習を行ない、アセスメントに必要な知識技術を学んだ。またALS(筋萎縮性側索硬化症)患者の不眠についての評価方法について検討し、問題解決過程を展開するために必要な情報収集、看護判断を行う1つのプロセスを学習した。

2) 看護管理学特論 前期 (06/15～09/28) 2単位

担当：栗屋 典子、小林 三津子、平野 亙

看護に関連した法制度、施設における看護管理の基本的理論、看護業務の安全管理、看護職の専門性と倫理責任、看護に関連した諸問題の解決に必要な基本的事項などについて教授した。本年度は受講生が少数であったことから、講義内容に関連したディスカッションができ、看護管理への理解をより深めることができたと考える。

3) 精神保健学特論 前期 (05/11～07/06) 2単位

担当：影山 隆之、大賀 淳子

精神保健の現代的課題を社会文化的文脈の上で深く理解することを目標として、オムニバス形式で講義し、その後に自由な質疑を行った(心の健康という思想哲学、研究法、地域精神保健、職域精神保健、メンタルヘルスと運動、睡眠、自殺)。履修者からのリクエストに応じたテーマ変更を視野に入れていたが、要望はなかった。履修者の実践経験に基づいた質疑討論が特に活発に展開された回は、内容が深まった。

<評価および課題>

履修者のニーズは毎年変わることが予想されるので、毎年度、構成を柔軟に検討して進める必要がある。コミュニティ保健について詳しく学んでいる保健師資格を有する学生と、そうでない学生との、予備知識の差異にも配慮する必要がある。

4) 成人・老人看護学特論 後期前半 (10/03~12/09) 2単位

担当：赤司 千波

発達理論、中高年者の身体的・精神的・社会的変化と特性、現代社会における老いの意味について、講義及び課題発表・討議を行い、成人・老人期の発達課題や健康問題への理解を深めるために教授した。

5) 生殖看護学特論 後期前半 (10/13~11/24) 2単位

担当：宮崎 文子、吉留 厚子、林 猪都子、小西 清美

今年度は夜間を中心に行った。課題は学生の研究課題の一環として「障害児—自閉症の早期発見」に興味を持っているため、乳幼児の異常を知るには正常の成長発達を知らなければならない。とって「乳幼児の成長発達」を取り上げて教授。また、実際の乳幼児健診の実習を通して健康診査を深めるためにレポートを課した。すすめ方は、テキストの抄読をし、乳幼児の成長発達・異常の早期発見に関するディスカッションを行い理解を深め、実習により実践力を身につけることをねらいとした。

テキスト：福岡地区小児科医会乳幼児保健委員会編集：「乳幼児健診マニュアル」医学書院、2002、大分市保健所1歳6ヶ月健診、3歳児健診実習、履修学生：1名

6) 地域看護学特論 前期後半 (06/16~09/22)

担当：中村 喜美子、工藤 節美

前半では、地域看護学に関する専門雑誌から原著論文2点を選び、原書講読を行った。1編は児童の虐待予防に関するもの、もう1編は施設に暮らす高齢者の保健行動に関するものである。後半では、ヘルスプロモーションを基盤としたコミュニティエンパワメントの視点から、地域看護活動を支える概念と地域看護診断の意義、方法、評価方法等を系統的に教授し、また、「行政システムにおける看護活動」を取りあげた。受講生の研究課題や興味・関心と関連づけた講読、課題発表、討論を通して地域看護学の理解を深めさせた。今後も受講生の背景や研究課題をふまえたうえで、講義内容、授業方法の工夫を行っていききたい。

7) International Nursing, Advanced I 後期 (12/08~02/24) 2単位

担当：Kim Soon Ja, Sakurai Reiko, Yatsushiro Rika

Objectives;

1. to describe the issues and the strategies of health and nursing of nations/group of nations.
2. to describe the system of the human resources for health and nursing practice.
3. to develop an understanding of the impact and the context of aids of Japanese International Cooperation Agency in the developing countries.

Scheduled Activities:

1. Orientation to the course, International Health and International Nursing

2. International Cooperation and globalization in Health
3. International Net-works in Health (WHO)
4. International Net-works in Nursing (ICN)
5. Global health; Issues and Strategies
6. Human Resources in Nursing; trends and issues
7. Impact & context of aids of Relief Organizations; Japanese International Cooperation Agency
8. Impact & context of aids of Relief Organizations; International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies
9. Issues of Nursing Education in Central Asia
10. Global health; Issues and Strategies; a group of population; self-study
11. Global Health: Issues and strategies; a nation, group of nations; self-study
12. Health & Nursing Work-force of a nation/group of nations; self-study
13. Health & Nursing Work-force of a nation/group of nations; self-study
14. Presentations and discussions on Theme I
15. Presentations and discussions on Theme I
16. Presentation and Discussions: Theme II
17. Presentation and Discussions: Theme II
18. Wrap-up

Themes for the Self-studies and Presentations;

Theme I: Strategic Plan; a specific health issue, a population group, a nation / a group of nations

Theme II: Health/nursing Workforce; issues and strategies of a group, a nation / a group of nations

Evaluation:

Participation: presentation and discussion.

Term paper submitted by each student; deadline of paper submission Feb. 28, 2006.

8) 放射線保健学特論 前期前半 2単位

担当：草間 朋子、甲斐 倫明、伴 信彦

放射線保健学に係わるトピックスを中心に講義を行ったが、随時、基本的な事項を補足して理解を深めるように配慮した。内容は次の通りである。(1)放射線の物理と利用、(2)放射線の健康影響、(3)放射線従事者の健康診断、(4)労災補償、(5)妊娠と放射線、(6)緊急医療と防災、(7)医療放射線のリスクベネフィット

9) 生体機能特論 前期後半 2単位

担当：高橋 敬、安部 眞佐子

1) 博士前期の院生の講義：

生体機能学特論は生体をする基本要素である「シート」に含まれた(1)内部環境、(2)ホメオスターシス、(3)構造機能のヒエラルキーをキーワードに、身体の正常機能発現

のリテラシー（必要最小限度の基本知識）について言及した。パワーポイントを使い、オーディオ・ビジュアルなフーラム的な講義形態をとった。

2) 分子遺伝学の講義を行い、DNA分析の実験を行った。

10) 病態機能学特論 前期 (06/13~09/30) 2単位

担当：市瀬 孝道、吉田 成一

生体の防御システムについて、特に免疫やアレルギーのメカニズムについて詳しく講義した。また、看護研究の中の実験的研究の進め方について講義し、生体反応学研究室で行われている研究成果を紹介し、研究を行う意義について理解させた。また、実際に組織切片サンプルの顕微鏡観察等を取り入れて病態や様々な事象を理解させる講義も行った。

11) 健康増進科学特論 後期 (10/04~02/20) 2単位

担当：稲垣 敦

健康増進科学を進める上で基本的な指標の解説と測定実習をおこない、レポートを作成した。来年度は行動変容理論に基づいた健康増進理論の内容を充実させたい。

12) 人間関係学特論 後期後半 2単位

担当：関根 剛、吉村 匠平

本講義では、受講生が興味関心のあるテーマを選定しプレゼンテーションを行い、それに沿った形で担当教員を交えたディスカッションを展開することで、看護学において必要とされる臨床心理学や教育心理学の知識の理解・習得を図っている。今年度取り上げたテーマは発達障がい（自閉症スペクトラムの理解、WISC-III体験、K-ABC体験）、うつ病（職場におけるメンタルヘルス、ストレスチェックの実際）、電話場面のコミュニケーション（電話を使った受付場面のロールプレイング、プロセスレコードの作成とその振り返り）、模擬講義（何故「看護理論」を学習するのかについて15分程度の模擬講義を行わせた上で、講義の展開・教材の解釈・発問の適切性などについてコメントを行った。同一のテーマで繰り返し模擬講義を行わせた）だった。

13) 保健情報学特論 前期前半(04/15~06/10) 2単位

担当：佐伯 圭一郎

次のようなテーマについて、講義およびディスカッション、演習をセットにして実施し、看護実践に必要とされる情報処理、情報管理の知識と技能を教授した。テーマは、サンプルサイズ設計、尺度(Scale)の作成と検討、メタアナリシス、多変量解析（因子分析、パス解析など）、統計ソフトウェア、コンピュータの管理・運用（ハード、ソフト、ネットワーク）などである。

履修者の基礎的な情報処理能力のばらつきにと研究テーマの広がり、必ずしも十分に対応できたとはいえ、大学院教育における必須の教育内容と個別性に応じたさらに高度な内容をどのように組み合わせて講義を進行させるかが例年の課題である。今後は、「看

「護科学研究特論」が別途開講されたため、統計学や情報処理の基本の部分を本科目から外し、応用例および高度なトピックにさらに重点をおいて、受講者のテーマにあわせたものとした。

14) 広域看護学特論 担当：金 順子、草間 朋子、中村 喜美子
チュートリアル方式で、指導教官と学生で綿密に文献検討・原著購読を行なった。

15) 発達看護学特論 担当：宮崎 文子、吉留 厚子、林 猪都子、小西 清美
修士論文テーマについて指導教官と学生で文献検討・原著購読を行なった。

16) 特別研究

1) 穴井 徹

- ・DNA二重鎖切断の修復動態に着目した線量率効果のモデル化とその検証
—低線量・低線量率被ばくの影響に関する実験的考察—
主指導教員 草間 朋子、副指導教員 甲斐 倫明、伴 信彦

2) 石川 幸

- ・加齢に伴う子宮口の高さとその要因の分析
主指導教員 宮崎 文子、副指導教員 草間 朋子、稲垣 敦

3) 井上 典枝

- ・女子高校生の月経随伴症状とライフスタイル・ライフイベントとの関連
主指導教員 宮崎 文子、副指導教員 小西 清美、影山 隆之

4) 井上 行男

- ・腹部CT検査における画質と線量の最適化
—模擬腫瘍入り肝臓ファントム法とシミュレーション法の検討—
主指導教員 甲斐 倫明、副指導教員 草間 朋子、伴 信彦

5) 大江 洋美

- ・産褥期入院中における産院ファミリールームの利用とその有効性
主指導教員 中村 喜美子、副指導教員 林 猪都子、八代 利香

3-6-2 博士(後期)課程

1) 精神保健学特論 後期 (05/12~07/07) 2単位

担当：影山 隆之

履修者のニーズに合わせて今年度は、主に職業性ストレスをめぐってストレス理論と評価（測定）方法を論じた。特に、研究（文献）の具体例に基づいて、理論の特徴と評価方法の長短について紹介した。

<評価および課題>

履修者のニーズは毎年変わることが予想されるので、毎年度、内容を柔軟に検討する必要がある。

2) 保健情報科学特論 前期 2単位

担当：佐伯 圭一郎

個々の履修者の抱える研究課題に対応した高度な統計解析、情報処理の技法を講義・演習を交えた形で、個別の教育を行っている。現状では、個別に対応することで教育内容を取捨選択しているが、基本的な部分と個別性について整理し、標準的なプログラムを構築することをすすめている。

3) 生殖看護学特論 後期 (10/28~02/14) 2単位

担当 宮崎 文子

前半はリプロダクティブヘルスにおける看護職の役割と援助のあり方について教授し、後半は受講者のニーズにそい成熟期に視点をあて課題を発見、問題解決の方策について探求した。

4) 看護専門科学研究 後期 (10/28~02/14) 4単位

担当：オムニバス形式

宮崎文子：助産院等の臨地指導者と協力してリプロダクティブヘルスにおける看護職の役割を活性化し、質の向上を図るための方策・手段について追求した。

3-7 ボランティア活動

1) 「第16回 (社) 日本自閉症協会九州大会 in 大分」保育ボランティア

参加者：教員；高野 政子、山下 早苗、3年次生；上田 綾美、小野 美由紀、加藤 沙弥香、葛巻 亜希子、小林 由佳、坂口 友香、清水 さとみ、手嶋 彬、永野 祐子、沼田 幸恵、野口 直美、屋比久 加奈子、吉田 稔子、2年次生；山口 智治、小坂 朋子、佐藤 優、吉永 礼香、渡邊 裕美、1年次生；首藤 良恵、生田 純子

平成17年6月25日（土）と26日（日）の両日、大分市で開催された「(社) 日本自閉症

協会九州大会」に保育ボランティアとして参加した。この大会は2年に一度、九州各県の自閉症児・者と保護者が集い、講演会、意見交換などを行なうもので、会の開催中、保育ボランティアが自閉症児たちのレスパイト・ケアを行なった。

2) 自閉症児療育キャンプ

参加者：教員；平野 亙、3年次生；小野 美由紀、加藤 沙弥香、葛巻 亜希子、小林 由佳、坂口 友香、清水 さとみ、手嶋 彬、永野 祐子、野口 直美、日野 沙織、2年次生；小野 里奈、山口 智治、北川 美紀、釜堀 真由美、小林 沙耶香、佐藤 優、森崎 美紀、渡邊 裕美、1年次生；首藤 良恵、望月 啓央

大分県自閉症児・者親の会が主催する年少児の療育キャンプに参加した。この療育キャンプは大分市「のつはる少年自然の家」において平成17年8月20日（土）・21日（日）の1泊2日で行われ、学生は自閉症児またはきょうだい児とペアを組み、食事介助、遊戯療法やレクリエーションに取り組みながらそれぞれの児童の持つ障害の特性を理解し、保護者が学習会に参加する時間帯にはレスパイト・ケアを行ってキャンプの運営を支えた。

3) 第20回ヤングウイングサマーキャンプ（小児糖尿病）

キャンプは、国東半島国見ユースホステルにて、2005年8月7日～12日まで、4泊5日で行なわれた。学生は、4年次生の白石 玲奈、宇土 奈緒の2名と、1年次生の衛藤 加奈、永里 加奈子、齋籐 由貴、脇屋 里菜の4名がヘルパーとして参加し、教員の中原基子が医療スタッフとして参加した。本学の学生は、5月の第1回準備会から参加し、大分大学、別府短期大学の学生や医師、栄養士と協力して、キャンパーの子どもや親が糖尿病を正しく理解し適応を促進するようなゲームや海水浴など、さまざまな活動に取り組むことができた。

4) 「こどもの健康週間」

本行事は、2005年10月10日体育の日に高尾山自然公園で開催された。学生は、4年次生が岡野 美由希、大塚 みゆき、和田 宣子、2年次生は後藤 成人、江藤 紘文、佐藤 優、1年次生は前田 結佳理、山根 千明、染原 隼子であった。教員は山下 早苗と高野 政子が参加して、子どもと一緒にゲームやウオーラリーなどを行った。

5) 神経難病研究会

神経難病研究会では主として日本ALS協会大分県支部、大分県難病連でのボランティア活動を行っています。

平成17年に神経難病研究会が行った日程と内容

平成17年5月21日（土）・22日（日）：若葉祭にて、吸引問題に関するポスター展示、及び自動吸引器の実演展示とビデオ放映、日本ALS協会大分県支部メンバー作成の物品等の販売

平成17年5月29日（日）：社会福祉法人博愛会主催の博愛会交歓会よりボランティア要請

があり、福祉交歓会での介助を行う。

平成17年6月19日（日）：日本ALS協会大分県支部第11回総会のお手伝い

6) シイタケ育成のための手入れ

久住の民家にボランティアとして教員3名で、草刈りをおこなった。また秋には十分な収穫が得られた（10月22日）。

7) 大分ありんこの会

大分ありんこの会のボランティア活動に本学の教員3名と学生1名が参加した（5月8日）。身障者の子供たちを担架に一人ずつ乗せ、10～20名で担ぎ上げ、牧の戸峠から黒岩山頂上に向かった。自然の空気、風、日射し、木々の芽吹き的美しさなどを体験してもらった。

学生には協力することの重要性や、また子供たちの喜ぶ姿に感銘し、一人一人の力が大きな仕事になることを実体験することができるので、来年度はもっと参加させたい。

8) 大学コンソーシアムおおいた

12月3日に行なわれた大学コンソーシアムおおいたによる「みんなのお祭り」に学生有志で「解剖学第4章骨格系」と題した歌と踊りを行った。ギターとキーボードで伴奏し、タンバリン、マラカスをパーカッションにした。「大きな古時計」の歌詞に骨格パーツの名前を載せ、さらに骨格姿の踊りを披露した。国際色豊かな催しであった。

次年度は多くの学生が少ない時間で効果を上げるために、「大きな古時計」の編曲をCDに記録し、その演奏で完成した骨格系、筋肉系の歌詞を使いたい。

大学コンソーシアムおおいたについては、首藤 良恵（1年次生）が大学を代表して実行委員会本部に所属し、コンソーシアムの学生関連事業の企画・運営に参加した。また吉永 礼香（2年次生）、前田 結佳理（1年次生）が実行委員として、学生関連事業の企画・運営に参加した。

「みんなのお祭り」の当日スタッフとして、布施 芳史（1年次生）、安藤 聡美、釜堀 真由美、佐藤 優（以上2年次生）、今野 真紀、酒見 大輔、平山 智美、松田 佳子、吉田 稔子（以上3年次生）が参加した。

4 学内セミナー

4-1 オープン・ハウス

この企画は、平成10年開学当初から本学の教職員の研鑽を目的として始めたものである。言語学研究室のシャーリー助教授が中心となって、毎週金曜日の昼時間に行っている。自由でリラックスした雰囲気での英会話を目的としており、会話の内容はその時々

の話題をテーマにしている。大切なのは日本語を一切使用せず、英語を聴いて話し、みんな英語のおしゃべりを楽しむことである。英語の得意、不得意に関係なく、誰でも気軽に参加できるような会になるよう心がけている。

4-2 CALLシステムによる英語学習

昨年に引き続き、試行期間2年目として、本年度もCALL(Computer Assisted Language Learning)システムを運用した。プログラムは、昨年と同様、ネットワーク型集中英語学習プログラムを使用した。プログラム内容は、TOEICを意識して構成されたListening(800問)、Reading(40問)であった。本年度は、前期と後期それぞれに実施期間を設けた。前期は5月16日～7月8日、後期は10月17日～12月9日の、それぞれ8週間とした。使用設備は、前期では、本学CALL教室設置のコンピュータ24台、情報処理室設置のコンピュータ20台にて対応した。また、後期では、ノート型コンピュータ10台が新規に導入され、CALL教室の設備とあわせて運営された。同時に、大学院生受講者については、学内にある自分専用のコンピュータにて受講できるよう設定した。教職員については、両期間とも希望すれば自宅で学習できるように便宜を図った。プログラム受講登録者数は、前期48名(1年次生23名、2年次生6名、3年次生19名)、後期34名(1年次生23名、3・4年次生5名、大学院生6名)、合計のべ82名であった。受講者の成果を見る指標として、プログラム実施前後(前期:5/14, 7/9 後期:10/15, 12/10)にTOEIC-IPを本学にて実施した。ほとんどの受講生が熱心に取り組み、結果としてTOEIC-IPの得点が全体的に向上した。システム運用終了後の受講者へのアンケート調査においても、今回のシステム学習の機会が、学校で履修するほかの科目の勉強の妨げになるような影響はなかったという結果が得られた。平成18年度は、一年次生向けのカリキュラムに導入し、授業の一環として運用していく予定である。

4-3 英語多読教材貸し出し

この企画は、本学教職員の自己研鑽を目的として、英語多読教材を教職員に貸し出すもので、本学言語学研究室の宮内講師が中心となって行っている。英語を母語とする児童・生徒用に作られた児童書や、英語を外国語として学習している人のために語彙数、総語数、文法内容を厳選した多読教材(Graded Readers)を、自分の好みや技量に合わせて選び、読んでいくものである。読みやすい本を大量に読むことにより、英語への抵抗感や苦手意識を軽減し、同時に英文処理スピードと英語運用能力の向上を期待する。

「楽しむ」ことを基本にしており、学習動機の長期維持が可能である。目標は総読書量100万語を超えること、辞書なしでペーパーバックが読めるようになることである。1年次生、2年次生に対する英語授業の一環として、この多読(Extensive Reading)が導入されている。本年度の実績は、平成18年1月末時点で、利用者数7名、総貸し出し冊数のべ678冊、最も多く利用した事例は、貸し出し冊数42冊、総読書量120,000語であった。また、昨年度と本年度の通年実績で最も多く利用した事例は、貸し出し冊数432冊、総読書量392,000語であった。

4-4 英語多読研究懇談会

看科大の英語IA、IIAの講義（担当：宮内）にて導入実施されている「英語多読」について、その知見を紹介し、英語多読経験者の体験や情報を共有することを目的として、SSS英語学習法研究会主催、看科大共催による「英語多読研究懇談会」が実施された。

「英語多読」を日本全国に普及すべく、日夜活動、研究している酒井邦秀氏（SSS英語学習法研究会代表、日本多読学会会長、電気通信大学助教授）による講演などの後、英語多読を体験中の本学学生や、多読に興味のある本学教職員との意見情報交換が活発に行われた。

日時：平成17年9月9日（金）16：30～18：00

場所：大分県立看護科学大学 21講義室

対象：英語多読に興味を持つ本学学生および教職員

主催：SSS英語学習法研究会

参加者：学生14名、教職員12名

5 プロジェクト研究

1) 野津原・佐賀関プロジェクト

研究者：草間 朋子（研究責任者、保健管理学）、影山 隆之（精神看護学）、
稲垣 敦（健康運動学）、工藤 節美（地域看護学）
平野 互、桜井 礼子、高波 利恵、朝見 和佳（保健管理学）、
品川 佳満、中山 晃志（健康情報科学）、岩崎 香子（生体科学）、
安部 恭子、玉置 奈保子（看護アセスメント学）

1. 今年度の主な活動

平成11年度から野津原プロジェクトとしてプロジェクト研究に取り組んできたが、平成17年より野津原町が大分市と合併したことから、今年度はこれまでの野津原町のフィールドが大分市へと拡大された。本年度の活動の中心は、大分市社会福祉協議会、大分市との共同での介護予防モデル事業に参画した。また、継続して大分市野津原地区で住民健診での体力測定、転倒予防教室を開催し下記のテーマについて研究に取り組んだ。

2. 主な研究テーマ

1) 介護予防事業における運動指導・快眠指導の効果および継続の要因の評価

介護予防モデル事業として、3ヶ月間の自宅での運動と快眠の心がけを行い、前後で比較しその効果を検証した。快眠については、運動群と非運動群での効果

についても検討を行った。また、運動を継続するための要因についての検討を行った。

2) 介護予防事業における「サロン」の場とボランティアの活用について

ボランティアの育成のために、ボランティア自身の背景について調査を行った。

3) 高齢者の全身持久力の簡易的測定方法の開発

これまでの全身持久力の間接的測定方法は、広い場所や段差を要し、住民健診会場で高齢者を対象に測定するうえで適切ではないため、簡易に測定できる方法を検討した。

4) 高齢者の体脂肪率の測定方法の検討

高齢者の体脂肪率測定方法（インピーダンス法）のうち、手手・手足・足足の3種類の器機について比較検討を行った。

5) 高齢者の骨密度と生活習慣の関連について

高齢者の骨密度測定と生活習慣調査を実施し、高齢者の骨密度と生活習慣との関連を検討するための事前調査を実施した。

6) 高齢者の日常生活動作およびQOLを維持するための筋力強化の方法の検討

内転筋に着目し、内転筋トレーニングの訓練方法の開発と開発した運動を実際に高齢者に実施してもらいその効果を検討した。

7) 基本健康診査（健診）での高齢者の体力評価を行うための測定項目の検討

平成14年度から実施してきた健診での健康関連体力3項目に、さらに開眼片足立ちを測定項目に加えて体力測定を実施し、高齢者の健康関連体力の情報を収集した。またモデル地区10ヶ所について体力測定を行い、3年間での体力の変化について検討を行った。

8) 高齢者の脚力の評価指標の検討

体重を等尺性膝関節伸展力で除した体重/力比（weight/strength ratio, WS比）を提案し、加齢に伴う変化や評価基準を検討した。

6 奨励研究

1) 精神科通院患者の社会復帰促進のための運動プログラムの提案

研究者：大賀 淳子、稲垣 敦

筆者らは1999年より大分市内の某精神科病院において、精神障害者の体力の実態を明らかにし彼らの社会復帰を促す運動プログラムを提案することを目的として、体力テストを定期的に行っている。本年度は同デイケアにおいて1回目の体力テスト（平成17年7月）の後、利用者が自主的にダンベル体操（15分間の市販ビデオ利用、自由参加）に取り組み始めた。2回目の体力テスト（平成18年1月）までの5ヶ月間のダンベル体操の効果について体力テスト他の成績の比較により検討し、今後の運動プログラム提案のための資料とする

こととした。対象者は2回の体力テストに参加した11名で、平均年齢は 31.5 ± 9.9 歳、男性8名、女性3名、統合失調症4名、不安関連疾患5名、うつ病1名、摂食障害1名であった。体力テスト項目は身長、体重、体脂肪率、腹囲、腹直筋厚、握力、長座体前屈、閉眼片足立、全身反応時間、タッピング、3分間歩行である。同時にBPRS (Brief Psychiatric Rating Scale : 簡易精神症状評価尺度 : 18項目について各1~7点で評価) による精神症状と内服量の調査を行った。11名のダンベル体操実施頻度は平均15.1回 (0~45回) であった。11名をダンベル体操実施群 (8名) と未実施群 (3名) に分けて、前後の変化を観察したところ、3分間歩行 ($p < 0.05$) と腹囲 ($p < 0.05$) で有意な交互作用がみられた。すなわち、ダンベル体操実施群には全身持久力の上昇と腹囲の増加が認められた。ダンベル体操前後の腹囲変化量と腹直筋厚変化量の間には正の相関があり、ダンベル体操実施群における腹囲増加は腹直筋筋厚によるものと考えられる。また、いくつかの項目の間にはダンベル体操前後の変化量に有意な関連がみられた。今後の課題は、同施設での調査継続によるデータの積み重ねやフィールドの拡大によるデータ数の確保による分析検討、運動プログラムの開発・実施・改善などである。

2) 母乳育児期間中の血中ホルモンレベルの推移の把握

研究者：梅野 貴恵、宮崎 文子、草間 朋子、甲斐 倫明

授乳婦人の内分泌状態に関しては産後3ヶ月頃までは明らかにされているが、それ以降のホルモン値は明らかになっていない。そこで、本研究では授乳期に母乳育児を行っている女性の血液中のホルモンレベルの推移を産後12ヶ月まで把握することを目的とした。調査対象者は、母乳育児を希望する母親13名である。分娩後2日目、産後1ヶ月目、3ヶ月目、6ヶ月目、9ヶ月目、12ヶ月目、月経開始直後に採血を行い、エストラジオール、FSH、LH、プロラクチンを測定する。さらに採血時に、当日の体調、授乳状態、食生活状況、更年期様症状などを自記式問診票にて調査する。現在、産後6ヶ月目までの調査が終了した。(1)エストラジオールは、産後2日目は $30 \sim 150 \text{pg/ml}$ であり、産後1ヶ月目でさらに低値を示し、産後3ヶ月目と6ヶ月目も2名を除き低値を維持している。(2)プロラクチンは、産後2日目は $60 \sim 600 \text{ng/ml}$ であった。産後1ヶ月目でも $100 \sim 400 \text{ng/ml}$ であり、一般にいわれている授乳婦人 ($100 \sim 250$) の値に比べて、やや高めである。産後3ヶ月目より徐々に下降しているが、産後6ヶ月目では $40 \sim 200 \text{ng/ml}$ と個人差が大きい。(3)LHは、産後2日目では全員 0.1mIU であり、産後1ヶ月では 2mIU 、産後3ヶ月頃より個人差が大きく、低値を維持しているものと少しずつ上昇傾向を示すものがあり、 $1 \sim 8 \text{mIU}$ である。しかし、月経前に急激に上昇するLHサージは起きていない。(4)FSHは、LHと同じく産後2日目では妊娠中の低値が維持され、ほぼ全員 0.1mIU であった。産後1ヶ月目より個人差はあるが上昇傾向を示し、産後6ヶ月目では、 $5 \sim 10 \text{mIU}$ となっている。しかし、非妊時レベルまでにはもどっていない。したがって、授乳婦人のエストラジオールとLHは、産後6ヶ月までは、比較的低値を示し、非妊時レベルにまでもどっていないことが示された。今後は、

12ヶ月まで調査を継続し両ホルモンが、非妊時レベルにもどる時期ともどり方を明らかにしていく予定である。

3) 幼児をもつ父母の生活実態と育児支援

研究者：秦 桂子、中村 喜美子、時松 紀子、大村 由紀美

1～3歳の幼児をもつ父母の生活実態と家事・育児状況の調査から、父母の求める育児支援を明らかにすることを目的として、保育園・健診(1歳6か月児、3歳児)・子育てサロンで無記名による自記式質問紙調査を行った。調査時期は2005年7～10月である。父の平均家事時間は10分、育児時間は62分であった。父の在宅状況と子へのかかわりをみると、子と一緒に夕食を摂った者：41%、帰宅していたが摂らなかった者：6%、帰宅していなかった者：53%であった。同様に、しなかった者と不在であった者は、入浴時：40%、23%、就寝時：44%、20%、朝食時：36%、32%であった。母の就業の有無で、父母と子の生活時間をみると、父の生活に差はなく、母子では、母就業ありの方がなしより、母の起床時刻と朝食時刻は早く、子の夕食時刻は遅く朝食時刻は早かった。母の就業にかかわらず約半数の家庭で何らかの育児支援を得ていたが、その94%は祖父母によるもので、公的支援は11%だった。家事・育児支援の要望では、共働き家庭では多様化した保育需要への対応、専業主婦家庭では家族の体調不良時の子どもの保育を望んでいた。

4) 筋萎縮性側索硬化症患者における夜間睡眠支援

－催眠レベル測定機器(Bispectral Index)による評価の有用性の検討－

研究者：伊東 朋子

筋萎縮性側索硬化症(以下ALSと略す)患者では不眠を訴える者が多く、睡眠の質が切実な問題である。本研究では催眠・鎮静レベルの指標として開発された催眠レベル測定器具 Bispectral Index (以下BISと略す)を用いてALS患者の夜間睡眠の状態を明らかにし、睡眠指標として測定方法や判定の簡便な脳波形の代替機器の有用性を検討した。本研究は第1段階と第2段階に分けて、研究目的を達成する。第1段階では在宅ALS患者の睡眠実態について質問紙調査を行った上で、BISによる夜間睡眠データを収集する。第2段階では排痰援助等の看護介入を行った場合と介入無しの場合とのBISによる夜間睡眠データの違いを検討する。実験の結果、BISの波形上の変化として介入有りの場合と介入無しの場合とで違いが観察され、従来の脳波計に代わる簡易な睡眠測定機器としての有用性が確かめられた。また、今後は症例数を増やした検討が必要であり、これにより夜間睡眠の良否に影響する看護支援について検討できれば、良質の睡眠が提供できる。

5) 植物性ポリフェノールによる気管支収縮抑制効果の検討

研究者：安部 恭子

気管支喘息の病態に関連があるとされる肥満細胞のうち褐色脂肪細胞は熱産生をうながし、体温調整に関与すると報告がある。そのため、気管や喉頭周辺にこの褐色脂肪細胞が多数存在すると、活性化により寒冷刺激といわれる外気温の影響を最小にするのではないかと予測された。さらに、気管支喘息などのアレルギー病態を改善するとされるポリフェノールが褐色脂肪細胞へどのような影響を与えるかを研究したものはない。そこで、実験動物（C57-BLマウス）に、種類の違うポリフェノールを与え、喉頭および気管周辺の褐色脂肪細胞を比較し、寒冷刺激による気管支収縮との関連の検討することを目的とした。

10週齢のマウスを、通常用いられる飼料と水で飼育する群と、ポリフェノールを含む赤ワインA・Bおよび白ワイン、さらにワインに含まれるアルコールの影響を検討するために100%エタノールを蒸留水で希釈したものを与える群とに分けて2週間飼育した。その後、それぞれのマウスから組織を切り出し、光学顕微鏡下で観察した。その結果、ポリフェノールを多く含む飲用物を摂取したマウスの気管および喉頭周囲で、活性化された褐色脂肪細胞が多く観察され、寒冷刺激等で病態悪化を招くような気管支喘息などの疾患では、褐色脂肪細胞の活性化による気管支収縮抑制効果が期待できるという可能性が示唆された。

6) 培養細胞を用いた大気中粒子状物質のアレルギー評価系の確立

研究者：吉田 成一、市瀬 孝道

大気汚染物質の一つである浮遊粒子状物質の生体影響として、アレルギー反応、免疫系や内分泌系への影響が報告されており、それらの作用機序にサイトカイン・ケモカインの関与が考えられている。本研究では、これまでにアレルギー病態モデル動物を用い、アレルギー増悪作用を有していることが明らかになった物質を*in vitro*細胞培養系に適用し、これらの細胞応答をアレルギー病態に関与する因子の発現変動および分泌量を指標としたスクリーニング系の確立を試みた。

RAW264.7細胞に対する抗原およびアレルギー増悪因子の処理時間および処理濃度検討したところ、抗原（卵白アルブミン：OVA）は24時間、10 μ g/ml処理、アレルギー増悪因子（浮遊粒子状物質）24時間処理が適当であったため、同条件でその後の検討を行った。アレルギー病態モデル動物においてアレルギー増悪作用を有しているカオリンおよびAl₂O₃処理した結果、MCP-1およびMIP-1 α mRNA発現量が有意に増加した。これらのことから、*in vitro*培養系で検討を行った本研究結果は*in vivo*系で認められた結果に一致していることから、スクリーニング系として用いることが出来る可能性が考えられる。

7) アトピー性皮膚炎病巣部の搔痒物質に関する免疫組織化学的研究

研究者：定金 香里

かゆみを引き起こす物質には系統差があり、アトピー性皮膚炎モデルマウスNC/Ngaにおいて症状に最も寄与している搔痒物質を調べた報告は数少ない。本研究ではNC/Ngaを用い、搔痒物質を免疫組織化学的に検出する方法を確立し、アトピー性皮膚炎発症部位においてどの搔痒物質が優位に働いているかを調べることを目的とした。実験には、5週齢NC/Ngaマウス（オス）を用いた。まずパラフィン標本を用いて免疫染色を行ったが陽性細胞を検出できなかった。そこで通常環境下で飼育し、アトピー性皮膚炎を自然発症したマウスから凍結切片を作製し、搔痒物質に対する抗体で免疫染色したところ陽性細胞を認めた。アトピー性皮膚炎群は、サブスタンスP、セロトニン、IL-2に対し陽性の細胞数が増加する傾向がみられたが、対照と有意な差はなかった。ヒスタミンでは両群に差がなかった。本研究は、凍結切片を用いた搔痒物質の免疫染色法を確立した。また、ヒスタミンよりもサブスタンスPやセロトニンがアトピー性皮膚炎の病態に強い役割を持っている可能性を示した。

8) 不随意的筋収縮発生の生理学的機序の解明

研究者：吉武 康栄、品川 佳満

片側での「随意的」な筋収縮による力発揮には反対側における同一の筋の「不随意的」な収縮が付随する（反対側投影）。本研究では反対側投影に対する大脳運動野の関連性を明らかにすることを目的とした。対象者は、等尺性の第一背側骨間筋収縮を左手で行い、最大筋力の20-80%を目標値とし、できるだけ瞬時に発揮した。その際の運動関連脳電位をC3およびC4から導出した。反対側（右手）の力、筋活動、運動関連脳電位（C3）は左手の筋収縮力の増大とともに増加した。反対側投影現象の発生には、中枢神経系が大きく関与している可能性が示唆される。

9) 脂肪細胞における線溶因子の役割についての生理学的意義

研究者：岩崎 香子、高橋 敬

脂肪細胞への分化過程で線溶因子urokinase(uPA)の阻害剤を添加すると細胞内油滴蓄積量の減少ならびに培養上清中の遊離脂肪酸の増加が見られ、脂肪細胞への分化を抑制することが昨年の奨励研究において見出された。本年度は成熟脂肪細胞を用いて脂肪細胞におけるuPAの役割について阻害剤を用いた検討を行った。前脂肪細胞NIH 3T3-L1を分化誘導後20日間培養し、成熟脂肪細胞へと分化成熟させた。uPA活性阻害剤を添加すると細胞中の油滴量の減少および培養上清中への遊離脂肪酸の排出が観察された。またこれらの細胞

はアポトーシスを起こしていることが確認された。一方、分化した脂肪細胞では凝固因子VIIaの受容体が発現していることが確認され、VIIaを添加するとuPA活性阻害剤添加によるアポトーシスが抑制されることが見出された。これらの結果より、uPAは脂肪細胞において油滴蓄積という機能に関与していることが推察された。今後、凝固因子との関連、細胞内シグナル伝達、接着に関する他の因子との関連を検討する予定である。

10) 培養筋細胞の分化・維持に対するアタキシン1発現量抑制の効果

研究者：安部 眞佐子

ataxin1は脊髄小脳変性症I型の原因遺伝子であるが、タンパク質産物は核に移行し、RNA結合能があること、インスリンによってリン酸化が調節されることなどがわかっており、過剰発現によって、細胞内総RNA量が低下することから、転写抑制因子複合体の一部であると推測されている。

昨年度、抑制作用の強かったオリゴマーはその後の検討により、インターフェロン応答をひきおこすことがわかったので、別のオリゴマーを新たに合成し抑制効果をみた。その結果、最大50%の抑制効果を現すオリゴマーを得た。このオリゴマーを分化前と後のC2C12細胞とsol8細胞に暴露させた。その結果、特に分化後の両細胞でミオシン重鎖BのmRNA量が低下していた。重鎖ミオシン2Aはわずかに発現量が低下していた。分化後の筋細胞で発現量が増える転写因子mef2cの発現量が低下しており、ミオシン重鎖Bの発現量の低下の原因として、mef2cの発現量の低下がその一因として考えられた。分化前の両細胞では、ミオシン重鎖の発現量の増減の傾向は一定ではなかった。オリゴマー導入による細胞毒性のためか、筋管に分化する細胞が少なく、培養条件のさらなる検討が必要であると思われた。ただ、解糖系酵素のアルドラーゼの若干の上昇が見られ、今後、さらに、糖脂質代謝酵素への影響を観察したい。

11) ATM および γ -H2AX の線量・時間反応関係から見た線量率効果の誘導機構の探索

研究者：小嶋 光明

本研究では線量率効果の誘導機構を解明する為の一環として、正常ヒト胎児肺線維芽細胞を用いて放射線の線量に対するDNA損傷量とその修復との時間関係をリン酸化ATMおよび γ -H2AXを指標として解析した。

正常ヒト胎児肺線維芽細胞であるMRC-5に1.2~1000 mGyのX線を照射した。照射3~1440分間後に、リン酸化ATMおよび γ -H2AXの免疫抗体染色を行い、蛍光顕微鏡下でフォーカス数を計測した(γ -H2AXについては現在解析中)。

1.2 mGyの線量で生じたリン酸化ATMのフォーカス数は、照射後24時間以内では変化しないことが分かった。この結果は、1.2 mGyで生じるDNA二重鎖切断は修復さ

れていないことを意味している。今後、DNA 二重鎖切斷の認識・修復にしきい値が存在するか否かを詳細に解析する必要がある。

7 インターネットジャーナル「看護科学研究」

平成11年12月に「大分看護科学研究」として創刊したが、新たに設置した「看護研究交流センター」に発行元を移すとともに、名称を「看護科学研究」に変更し、より広域的、全国的なジャーナルを目指すことにした。第6巻第2号は3月に刊行され、第7巻第1号は4月に刊行予定である。ジャーナルは本学ホームページに公開されており、ダウンロードすることができる。(http://www.oita-nhs.ac.jp/journal)

第6巻2号 目次

資料

訪問看護ステーション実習における学生の看護技術経験の実態

大村 由紀美、秦 桂子、時松 紀子、中村 喜美子

トピックス

アメリカCase Western Reserve Universityにおける看護アセスメント学教育の
受講を経験して

松尾 恭子

大分県立看護科学大学 第7回看護国際フォーラム
在宅看護の質向上のために (Dr. Elizabeth A. Madiganの講演から)

藤内 美保

大分県立看護科学大学 第7回看護国際フォーラム
わが国における訪問看護の現状と課題 -山田雅子先生と山崎摩耶先生の講演から-

工藤 節美

特別寄稿

大分県立看護科学大学 第7回看護国際フォーラム
韓国における介護保険制度導入にむけた在宅看護政策の転換に関する考察

柳 好信、金 基玉、平野 亙、草間 朋子

8 業績

8-1 著書

小西 恵美子: 看護実践と看護の倫理, 日本生活協同組合連合会医療部会, 東京, 2005.

小西 恵美子: 健康のイメージ, 34-37, 健康格差に対するヘルスプロモーションの実践, 230-233, 女性の骨粗鬆症とヘルスプロモーション, 234-235, 大西 和子、櫻井 しのぶ編: ヘルスプロモーション, ヌーヴェルヒロカワ, 東京, 2006.

Konishi, E., Davis, A.: The teaching of nursing ethics in Japan. In: AJ. Davis, V. Tschudin, L. de Raeve. Essentials of Teaching and Learning in Nursing Ethics: Perspectives and Methods. 251-260, Elsevier, Edinburgh, 2006.

池永 満、平野 互、山本 裕子、吉原 幸子: 特定非営利活動法人患者の権利オンブズマン編, 患者の権利オンブズマン青書Vol. 2, リーガルブックス, 福岡, 2005.

岩崎 香子、深川 雅史: 分子腎臓病学—分子生物学的アプローチと分子病態生理学—, 日本臨床社, 東京, 2006.

内海 滉、奥山 則子、直井 道子、伊東 朋子: 家庭看護・福祉, 実教出版, 東京, 2006.

辻本 忠、占部 逸正、小田 啓二、甲斐 倫明、草間 朋子: 放射線取扱者のための法令の話 (第3版), 日本アイソトープ協会, 丸善, 東京, 2005.

佐渡 敏彦、福島 昭治、甲斐 倫明編著: 放射線および環境化学物質による発がん本当に微量でも危険なのか?, 医療科学社, 東京, 2005.

宮崎 文子他31名: 新版 助産師業務要覧, 日本看護協会出版会, 東京, 2005.

遠藤 俊子、一瀬 いつ子、葛西 圭子、此川 愛子、斉藤 益子、佐藤 みね子、宮崎 文子、山崎 圭子、山本 あい子、佐々木 綾子、砥石 和子、穂高 律子: 病院・診療所における助産師の働き方, 日本看護協会, 東京, 2006.

天野 敦子、小林 壽子、白石 淑江、谷口 アキ、中村 喜美子、長井 茂明: 子どもの保健 第4版, 日本小児医事出版社, 東京, 2005.

縣 俊彦、金城 芳秀、佐伯 圭一郎、佐野 浩齋、西村 理明、柳 修平: 上手な情報検索のためのPubMed活用マニュアル 改訂第2版, 南江堂, 東京, 2005.

8-2 翻訳

該当なし

8-3 研究論文

新居 富士美、安部 恭子、新居 志保美、大島 操: 事故報告からみた身体拘束廃止前後の転倒・転落事故の変化, 日本看護学会誌, 15(1), 91-101, 2005.

藤崎 桂、安部 恭子、藤内 美保、高橋 ゆか: においセンサーを用いた病床における臭気変化の分析 - オムツ交換と経時的データの考察 -, 第36回日本看護学会論文集 (看護管理), 2006.

小西 恵美子: 長野県看護大学の国際協力活動, 日本看護研究学会雑誌, 28(2), 105-108, 2005.

福田 広美、井田 政則: 看護師に対する職場ソーシャルサポートの効果, 産業カウンセリング研究, 7(2), 13-23, 2005.

福田 広美、市瀬 孝道、草間 朋子: 疲労モデルとしての運動負荷と血漿中・尿中サイトカイン発現との関係, 保健の科学, 48(1), 71-77, 2006.

林 猪都子、安倍 本子、宮崎 文子、吉留 厚子、小西 清美: 高校生における性教育前後の意識の変化, 日本助産師学会誌, 12-21, 2005.

柳 好信、金 基玉、平野 互、草間 朋子: 韓国における介護保険制度導入にむけた在宅看護政策の転換に関する考察, 看護科学研究, 6(2), 2006.

Baba, S., Osakabe, N., Natsume, M., Yasuda, A., Muto, Y., Hiyoshi, K., Takano, H., Yoshikawa, T., Terao, J.: Absorbtion, metabolism, degradation and urinary excretion of rosmarinic acid after intake of *Perilla frutescens* extract in humans. , Eur J Nutr, 44, 1-9, 2005.

Hashimoto, AH., Amanuma, K., Hiyoshi, K., Takano, H., Masumura, K., Nohmi, T., Aoki, Y. : In

vivo mutagenic induced by benzo[a]pyrene instilled into the lung of gptdelta transgenic mice.,
Environ Mol Mutagen, 45, 365-373, 2005

Hiyoshi, K., Takano, H., Inoue, K-I., Ichinose, T., Yanagisawa, R., Tomura, S., Cho, AK., Froines,
JR., Kumagai, Y.: Effect of a single intratracheal administration of phenanthraquinone on murine
lung., J Appl Toxicol, 25, 47-51, 2005.

及川 力、橋本 有紀、齊藤 まゆみ、稲垣 敦: 在籍した学校の違いが聴覚障害者の体
力に及ぼす影響—聾学校卒業生と通常校卒業生、両校経験者の比較—, 障害者スポーツ科
学, 3(1), 22-27, 2005.

平井 敏幸、伊藤 直樹、西條 修光、稲垣 敦: トランポリン運動の言語教示に向けた
経験的知識の抽出—ストレートジャンプの離床時について—, 北海道体育学研究, 40, 15-24,
2005.

Iwasaki-Ishizuka, Y., Yamato, H., Nii-Kono, T., Kurokawa, K., Fukagawa, M.: Downregulation of
parathyroid hormone receptor gene expression and osteoblastic dysfunction associated with skeletal
resistance to parathyroid hormone in a rat model of renal failure with low turnover bone. , Nephrol
Dial Transplant, 20(9), 1904-1911, 2005.

Kazama, JJ., Omori, K., Takahashi, K., Ito, Y., Murayama, H., Narita, I., Gejyo, F. Fukagawa, M.:
Maxacalcitol therapy decreases circulating osteoprotegerin levels in dialysis patients with
secondary hyperparathyroidism., Clin Nephrol, 64(1), 64-68, 2005.

Nakayama, M., Nakano, H., Tsuboi, N., Kurosawa, T., Tsuruta, Y., Iwasaki, Y., Yokoyama, K.,
Hosoya, T., Fukagawa, M.: The effect of angiotensin receptor blockade ARB on the regression
between patients with D allele and non-D allele ACE gene polymorphism, Clin Nephrol, 64(5),
358-363, 2005.

坂本 真士、影山 隆之: 報道が自殺行動に及ぼす影響—その展望と考察—, こころの健
康, 20(2), 62-72, 2005.

津川 律子、影山 隆之: 日本の中学校・高等学校の検定教科書における自殺関連記述の
検討—学校教育場面における自殺予防教育の今後の課題を探るために—, こころの健康,
20(2), 88-96, 2005.

影山 隆之、河島 美枝子、大賀 淳子: 地方公務員集団における婚姻状況およびストレ
スコアリング特性と自殺への「共感」—勤労者の自殺予防のための予備的検討—, こころ

の健康, 20(2), 97-101, 2005.

坪根 千枝、伴 信彦、甲斐 倫明: 妊娠可能な女性の医療被ばくに対する放射線防護のあり方 - 診療放射線技師に対する意識調査から -, 保健物理, 40(1), 49-55, 2005.

高野 嘉久、岡崎 敬一郎、小野 孝二、甲斐 倫明: 軽量の無鉛防護エプロンの放射線防護効果に関する実験的・理論的検討, 日本放射線技術学会雑誌, 61(7), 1027-1032, 2005.

Ono, K., Yoshitake, T., Akahane, K., Yamada, Y., Maeda, T., Kai, M., Kusama, T.: Comparison of a digital flat-panel versus screen-film, photofluorography and storage-phosphor system by detection of simulated lung adenocarcinoma lesions using hard copy images, *The British Journal of Radiology*, 78, 922-927, 2005.

小西 清美、吉留 厚子、神代 雅晴: 離乳後の桶谷式乳房治療手技による自律神経系への作用, 周産期医学, 35(4), 565-568, 2005.

工藤 節美、高波 利恵、宇都宮 仁美、草間 朋子: 看護系大学新卒時に求められる保健師の基礎技術の検討 - 行政保健師を対象とした調査から -, 看護教育, 46(8), 713-719, 2005.

Endo, T., Watanabe, H., Yamamoto, A., Sayama, S., Saito, M., Ishikawa, N., Miyazaki, F., Kasai, K., Kaminuma, Y.: Relation between the years of experience and corecompetencies of midwives in Japan., 27th Congress of the International Confederation of Midwives Congress Proceedings, Brisbane, Australia, 198-200, 2005.

中村 喜美子、堀内 久美子: 保育園児の身体発育経過 - 一年度初めに着目して -, 保育と保健, 11(2), 36-41, 2005.

Ichinose, T., Nishikawa, M., Takano, H., Sera, N., Sadakane, K., Mori, I., Yanagisawa, R., Oda, T., Tamura, H., Hiyoshi, K., Quan, H., Tomura, S., Shibamoto, T.: Pulmonary toxicity induced by intratracheal instillation of Asian yellow dust (Kosa) in mice *Environ Toxicol Pharma.* 20, 48-56, 2005.

Inoue, K., Takano, H., Yanagisawa, R., Ichinose, T., Sadakane, K., Yoshino, S., Yamaki, K., Uchiyama, K., Yoshikawa, T.: Effects of 15-deoxy-Delta-prostaglandin J on the expression of Toll-like receptor 4 and 2 in the murine lung in the presence of lipopolysaccharide., *Clin Exp Pharmacol Physiol*, 32, 230-232, 2005.

Inoue, K., Takano, H., Yanagisawa, R., Sakurai, M., Ueki, N., Ichinose, T., Sadakane, K., Yoshino, S., Uchiyama, K., Yoshikawa, T.: Effects of 15-deoxy-delta(12,14)-prostaglandin J2 on nuclear localization of GATA-3 in the murine lung in the presence of lipopolysaccharide., *Arzneimittelforschung*, 55(3), 167-171, 2005.

Inoue, K., Takano, H., Yanagisawa, R., Sakurai, M., Ichinose, T., Sadakane, K., Yoshikawa, T.: Effects of nano particles on antigen-related airway inflammation in mice., *Respir Res*, 16(6), 106, 2005.

Inoue, K., Takano, H., Yanagisawa, R., Ichinose, T., Shimada, A., Yoshikawa, T.: Pulmonary exposure to diesel exhaust particles induce airway inflammation and cytokine expression in NC/Nga mice., *Arch Toxicol*, 79, 595-599, 2005.

Inoue, K., Takano, H., Shiga, A., Fujita, Y., Makino, H., Yanagisawa, R., Ichinose, T., Kato, Y., Yamada, T., Yoshikawa, T.: Effects of volatile constituents of a rosemary extract on allergic airway inflammation related to house mite allergen in mice., *Int J Mol Med*, 16, 315-319, 2005.

Hiyoshi, K., Ichinose, T., Sadakane, K., Takano, H., Nishikawa, M., Mori, I., Yanagisawa, R., Yoshida, S., Kumagai, Y., Tomura, S., Shibamoto, T.: Asian Sand dust enhances ovalbumin-induced eosinophil recruitment in the alveoli and airway of mice., *Environ Res*, 99(3), 361-368, 2005.

Hiyoshi, K., Takano, H., Inoue, K., Ichinose, T., Yanagisawa, R., Tomura, S., Kumagai, Y.: Effects of phenanthraquinone on allergic airway inflammation in mice., *Clin Exp Allergy*, 35, 1243-1248, 2005.

小野 美喜: 回復期リハビリテーション病棟看護師の退院援助における多職種との連携行動, *日本看護学会誌*, 15(2), 88-96, 2006.

品川 佳満、岸本 俊夫、太田 茂: 行動パターン分類による独居高齢者の非平常日検出, *川崎医療福祉学会誌*, 15(1), 175-181, 2005.

Fujimoto, A., Tsukue, N., Watanabe, M., Sugawara, I., Yanagisawa, R., Takano, H., Yoshida, S., Takeda, K.: Diesel exhaust affects immunological action in the placentas of mice., *Environ Toxicol*, 20, 431-440, 2005.

高野 政子、目原 陽子、佐伯 圭一郎、是松 聖悟: 幼児期の喘息等呼吸器疾患の有病

率と家庭内における生活環境との関連, 広島大学保健学ジャーナル, 4(2), 67-73, 2005.

藤内 美保、宮腰 由紀子: 看護師の臨床判断に関する文献的研究 —臨床判断の要素および熟練度の特徴—, 日本職業・災害医学会会誌, 53(4), 213-219, 2005.

梅野 貴恵、宮崎 文子: 会陰傷害の産後の日常生活動作への影響と持続期間, 日本助産師学会誌, 45-53, 2005.

山下 早苗、猪下 光: 外来通院している小児がん患者への告知に対する親の意向 —告知に対する親の不確かさに焦点をあてて—, 日本小児看護学会誌, 14(2), 7-15, 2005.

Yatsushiro, R., Kakehashi, M.: Medical Records Disclosure in Japan. —A Descriptive Analysis with Reference to Harvard Guidelines—, Asian journal of Nursing Studies, 8(1), 16-22, 2005.

Shinohara, M., Yoshitake, Y., Kouzaki, M., Fukunaga, T.: The medial gastrocnemius muscle attenuates force fluctuations during plantar flexion. , Experimental Brain Research, 1-9, 2005.

Yoshitake, Y., Kawakami, Y., Kanehisa, H., Fukunaga, T.: Surface mechano myogram reflects the length changes in the fascicles of human skeletal muscles. , International Journal of Sport and Health Science, 3, 280-285, 2005.

米倉 紀子、吉留 厚子: 出産後4ヶ月における母親の乳房清拭と乳房障害および児の疾患との関係, 第61回日本助産師学会誌, 54-61, 2005.

松永 保子、吉留 厚子、波川 京子、近藤 裕子、上林 康子: 医療機関における看護要員の配置算定方法の選択および運営での困難, 社会医学研究, 23号, 39-45, 2005.

吉留 厚子、大神 純子、八代 利香: わが国における分娩後の日常生活行動の拡大について—文献および日本と韓国との比較を通して—, 熊本県母性衛生学会, 9, 61-68, 2006.

8-4 その他論文

篠原 純子、松岡 緑、樗木 晶子、長家 智子、赤司 千波、川上 千普美、原 頼子、永江 ゆき子、濱田 正美: 虚血性心疾患患者の不安・ストレス・家族関係と自尊感情の関連, 九州大学医学部保健学科紀要, 6, 9-16, 2005.

長家 智子、松岡 緑、篠原 純子、川上 千普美、樗木 晶子、赤司 千波、原 頼子、永江 ゆき子、濱田 正美: 虚血性心疾患患者の自己管理行動への影響因子, 九州大学医学部保健学科紀要, 5, 33-40, 2005.

伴 信彦、増野 陽子、甲斐 倫明: 放射線誘発白血病における特異的染色体異常の起源, 放射線生物研究, 40(3), 296-309, 2005.

小西 恵美子: 看護基礎教育の立場から、看護実践の中での看護倫理を考える, 看護, 57(4), 93-96, 2005.

平野 亙: インフォームド・コンセントで患者は自己決定を下せるように: フェイズ・スリー, No.254, 70, 2005.

平野 亙: 自立サービスすべてに対価を求めるのは問題, フェイズ・スリー, No.255, 66, 2005.

影山 隆之、河島 美枝子、小林 敏生: ストレス対処特性の簡易評価表の開発と産業精神看護学的応用に関する研究, 平成14年度～平成16年度科学研究費補助金 (基盤研究(C) (2)) 研究成果報告書, 大分, 2005.

影山 隆之、近藤 卓、津川 律子、早川 東作、飯田 紀彦、坂本 真士: 青少年の自殺予防対策のあり方に関する精神保健的研究, 77-145, 上田 茂 (編), 厚生労働省科学研究費補助金こころの健康科学研究事業, 自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究, 平成16年度総括, 分担研究報告書, 国立精神・神経センター精神保健研究所, 市川, 2005.

影山 隆之: 自殺者の増加をめぐる学会研究班について, こころの健康, 20(2), 43-44, 2005.

影山 隆之: 日本における自殺の現状と予防, 保健の科学, 48(2), 129-134, 2006.

甲斐 倫明: 乳児の胸部・腹部X線撮影における被曝線量 (質疑応答), 日本医事新報, 4221, 114-115, 2005.

甲斐 倫明、佐伯 圭一郎: 大分県立看護科学大学におけるIT(情報技術) 利用, 看護教育, 46(6), 490-494, 2005.

Kai, M.: Overall summary and comments, International Congress Series 1276: High Levels of Natural Radiation and Radon Areas. Radiation Dose and Health Effects, Editors: Sugahara, T., et al, Elsevier, Amsterdam, 2005.

甲斐 倫明: 書評: トンデモ科学の見破りかたーもしかしたら本当かもしれない9つの奇説ー, Isotope News, 2005.

甲斐 倫明: 放射線診断と発がんリスク, 癌と化学療法, 32(9), 1229-1234, 2005.

甲斐 倫明、伴 信彦: 放射線診断に伴う低線量被曝の発がんリスク, 血液・腫瘍科, 51(5), 524-532, 2005.

小西 清美: 日本における看護の継続教育, 看護科学研究, 6, 24-26, 2005.

工藤 節美: わが国における訪問看護の現状と課題ー山田雅子先生と山崎摩耶先生の講演からー, 看護科学研究, 6(2), 2006.

工藤 節美: ウズベキスタン共和国看護教育改善プロジェクトに参加してー地域看護の短期専門家としての体験からー, 大分県JICA派遣専門家連絡会会報, (9), 22-26, 2006.

松尾 恭子: 大分県立看護科学大学 第6回看護国際フォーラム 「タイと中国の看護基礎教育」ーDr.Tassana BoontongとDr.Huaping Liuの講演からー, 看護科学研究, 6(1), 20-23, 2005.

松尾 恭子: アメリカ Case Western Reserve University における看護アセスメント学教育の受講を経験して, 看護科学研究, 6(2), 2006.

大賀 淳子、八代 利香、草間 朋子: カザフスタン共和国セミパラチンスク地域における精神保健事情ーJICAによるプロジェクトに短期参加してー, 看護科学研究, 6(1), 16-19, 2005.

大賀 淳子、稲垣 敦、帆秋 善生: 精神科デイケアにおける定期的な体力テストの効果, こころの健康, 20(2), 102-107, 2005.

大村 由紀美、秦 桂子、時松 紀子、中村 喜美子: 訪問看護ステーション実習における学生の看護技術経験の実態, 看護科学研究, 6(2), 2006.

小野 美喜 福田 広美 大津 佐知江 内田 雅子 栗屋 典子: 退院の意思決定プロセスにおいて要介護老人の参加を促す援助, 臨床看護, 32(2), 266-271, 2006.

藤内 美保: 大分県立看護科学大学 第7回看護国際フォーラム 「在宅看護の質向上のため

めに」 Dr.Elizabeth A.Madigan の講演から, 看護科学研究, 6(2), 1-3, 2006.

八代 利香: カザフスタン・セミパラチンスク地域の保健・医療・看護の現状と今後の課題, 大分県JICA派遣専門家連絡会会報, (9), 4-9, 2006.

吉武 康栄, 篠原 稔, 神崎 素樹, 上 英俊: 力を精確に調節する神経・筋機能において伸張反射の貢献度を筋・腱への機械的振動より分離定量化する, 上原記念生命科学財団研究報告集, 19, 103-106, 2005.

Yoshidome, A., Konishi, K., Miyazaki, F., Kawano, T.: The change of mammae surface skin temperature and the hardness of mammae by the Oketani breast massage in postpartum., Proceeding 27th Congress of the International Confederation of Midwives, 3p, 2005.

大神 純子、東 真理子、吉留 厚子、宮崎 文子: 新生児への早期頻回タッチングが初産婦の愛着形成におよぼす影響 —状態不安と愛着形成の関連—, ペリネイタルケア, 24(12), 85-90, 2005.

吉留 厚子、宮崎 文子: 大分県支部だより 第61回日本助産師学会, 助産師, 59(3), 92-93, 2005.

吉留 厚子、梅野 貴恵、大神 純子: 学園祭にて助産師教育の一部を紹介したところ, 助産師教育 ニューズレター, 486, 2005.

吉留 厚子: ICMに初めて参加し、口頭発表して思うこと, 助産師教育 ニューズレター, 495, 2005.

8-5 学会発表

Oshima, M., Abe, K., Arai, F.: Guardians' preferences for medical care at schools for physically handicapped children in Japan., ICN 23rd Quadrennial Congress, Taipei, Taiwan, 2005. 5.

安部 恭子、新居 富士美、大島 操: 医療的ケアの実施に関する保護者の望み, 第31回日本看護研究学会学術集会, 札幌市, 2005. 7

安部 恭子、藤崎 桂、藤内 美保、高橋 ゆか: においセンサーを用いた病床における臭気変化の分析 —オムツ交換と経時的データの考察—, 第36回日本看護学会学術集会看護管理2005, 奈良市, 2005. 11

安部 恭子: 哺乳および摂食に関する咬筋の形態学的評価, 第25回 日本看護科学学会 学術集会, 青森市, 2005. 11

大町 康、桑原 義和、辻 さつき、辻 秀雄、伴 信彦、柿沼 志津子、石田 有香、荻生 俊昭、相沢 志郎、島田 義也: C3Hマウス骨髄性白血病における造血分化転写因子PU.1遺伝子の突然変異解析, 第32回 日本トキシコロジー学会学術年会, 東京, 2005. 6

増野 陽子、伴 信彦、甲斐 倫明: 放射線誘発白血病の特異的染色体異常の起源に関する文献的検討, 日本保健物理学会第39回研究発表会, 青森県上北郡六ヶ所村, 2005. 7

伴 信彦、小嶋 光明、甲斐 倫明: 放射線誘発マウス骨髄性白血病における遅延性染色体異常の関与, 日本放射線影響学会第48回大会／第1回アジア放射線研究会議, 広島市, 2005. 11

Konishi, M., Ran, U.Y., Izumi, S., Chen, V., Pang, S.: Korean, Japanese, Taiwanese and Chinese patients' perceptions and expectations of the Good Nurse , ICN 23rd Quadrennial Congress 2005, Taipei, Taiwan, 2005. 5.

Izumi, S., Konishi, M., Yahiro, M., Kodama, M., Suzuki, M.: "Good Nurse" from Japanese patients' eyes, ICN 23rd Quadrennial Conference, Taipei, Taiwan, 2005. 5.

児玉 真木、小西 恵美子、和泉 成子、八尋 道子、鈴木 真理子: 患者からみた「よい看護師」に関する記述的研究, 日本看護研究学会第31回研究発表会, 札幌, 2005. 7

Konishi, E., Izumi, S., Yahiro, M., Kondama, M., Japanese patient's perceptions and expectations of the Good Nurse.: International Nursing Conference, Beijing, China, 2005. 10.

小西 恵美子、和泉 成子、児玉 真木: 患者からみた「よい看護師」の資質－「よい人」としての看護師－, 日本生命倫理学会第17回年次大会シンポジウム, 東京, 2005. 11

和泉 成子、小西 恵美子、児玉 真木、八尋 道子: 患者の眼からみた「よい看護師」, 第25回日本看護科学学会学術集会, 青森, 2005. 11

児玉 真木、小西 恵美子、和泉 成子、八尋 道子: がん患者からみた「よい看護師」とは－Vulnerabilityからの開放－, 第20回日本がん看護学会学術集会, 福岡, 2006. 2

Fukuda, H., Yoshidome, A., Kusama, T.: Fatigue assessment by the measurement of cytokine level

in urine. , ICN 23rd Quadrennial Congress, Taipei, Taiwan, 2005. 5.

林 猪都子、安倍 本子、宮崎 文子、吉留 厚子、小西 清美: 高校生における性教育前後の意識の変化, 第61回 日本助産師学会, 別府市, 2005. 5

林 猪都子、安倍 本子、宮崎 文子: 高校1年生における性教育前後の意識の変化 — 男女の比較 —, 第24回 日本思春期学会, 埼玉県和光市, 2005. 8

稲垣 敦、桜井 礼子、八代 利香、平野 互、草間 朋子: 高齢者の等尺性膝関節伸展力の加齢に伴う変化と評価基準, 第64回日本公衆衛生学会総会, 札幌市, 2005. 9

稲垣 敦: 対戦相手の強さを考慮した強さの評価法, 日本体育学会第56回大会, つくば市, 2005. 11

岩崎 香子、大和 英之、村山 寿、田中 伸哉、深川 雅史、高橋 敬: 廃用性骨粗鬆症に対するスタチン製剤の効果, 第25回 日本骨形態計測学会, 東京, 2005. 6

岩崎 香子、大和 英之、高橋 敬: 尿細管細胞産生線溶因子への終末糖化産物の影響, 第48回 日本腎臓学会学術集会, 横浜市, 2005. 6

岩崎 香子、大和 英之、深川 雅史、高橋 敬: プラバスタチンは無形成骨症を呈する腎疾患ラットでの骨形成低下を改善する, 第48回 日本腎臓学会学術集会, 横浜市, 2005. 6

Iwasaki, Y., Yamato, H., Fukagawa, M.: Pravastatin ameliorates suppressed bone formation in uremic rats with adynamic bone disease. , Japan Kidney Week, Yokohama, 2005. 6.

岩崎 香子、岡崎 亮、村山 寿、菅野 三喜男、大和 英之、高橋 敬: 腎機能の低下は糖尿病による骨代謝回転の低下をさらに助長する, 第23回 日本骨代謝学会学術集会, 大阪府, 2005. 7

Iwasaki, Y., Yamato, H., Nii-Kono, T., Fukagawa, M.: Skeletal resistance to parathyroid hormone induced by uremic toxins causes adynamic bone disease renal failure. , 27th American Society of Bone and Mineral Research, Nashville USA, 2005. 9.

岩崎 香子、高橋 敬: 線溶インヒビターにより誘導された脂肪細胞アポトーシスの理学的意義, 第28回 日本血栓止血学会学術集会, 福岡市, 2005. 11

小林 敏生、山岸 まなほ、影山 隆之、王 綿珍、王 治明: 日本と中国の病棟看護師における職業性ストレスと精神的健康度の比較, 第78回 日本産業衛生学会, 東京, 2005. 4

影山 隆之、小林 敏生、河島 美枝子: ストレス対処特性評価のための新しい質問紙の開発 (第4報) -コーピング特性尺度(BSCP)で評価した「発想転換」と地方公務員の抑うつ症状との関連-, 第78回 日本産業衛生学会, 東京, 2005. 4

影山 隆之、大賀 淳子: ストレス対処特性を評価する簡易質問紙BSCPの開発, 第21回 日本精神衛生学会大会, 大館市, 2005. 10

山岸 まなほ、小林 敏生、影山 隆之: 日本と中国の病棟看護師における職業性ストレス-職業性ストレスとストレス対処行動の関連-, 第25回 日本看護科学学会学術集会, 青森市, 2005. 11

久保 剛、甲斐 倫明: 日本におけるラドンの肺がん寄与リスク推定とその不確かさ, 日本保健物理学会第39回研究発表会, 青森県六ヶ所村, 2005. 6

甲斐 倫明、工藤 麻梨奈、伴 信彦、赤羽 恵一、西澤 かな枝: CTを用いた放射線診断件数の将来予測とその被ばくに伴う寄与リスク, 日本保健物理学会第39回研究発表会, 青森県六ヶ所村, 2005. 7

甲斐 倫明、川尻 美穂、小嶋 光明、伴 信彦: 不均一集団の線量反応関係に対する統計学的モデルから推定される線量反応曲線の形状, 日本放射線影響学会第48回大会/第1回アジア放射線研究会議, 広島市, 2005. 11

姫野 稔子、小林 三津子、今戸 啓二: 看護動作における背負子型腰部負担軽減具の評価, 第36回 日本看護学会-看護総合-, 高松市, 2005. 7

小林 三津子、前田 久美子: 急性期病院におけるプリセプターシップ変更後の評価-プリセプター&サポーターシステムの導入-, 第9回 日本看護管理学会年次大会, 神戸市, 2005. 8

工藤 節美、佐藤 美佳: 認知症高齢者と寝たきり高齢者の主介護者が感じる介護負担感の比較, 第6回 日本認知症ケア学会, 松江市, 2005. 10

宮内 信治: Discourse Intonation 表記法を用いた英語発話指導 -改善についての学習者

の反応と今後の課題ー, 日本英語音声学会 第7回関西・中国支部大会, 茨木市, 2005. 5

宮崎 文子、中山 晃志: 女子高校生の受診行動に関する意識調査ー 婦人科に関するトラブルや不安を感じた場合の受診行動ー, 大分県母性衛生学会, 大分市, 2005. 10

斉藤 益子、松永 圭子、加藤 千昌、大村 倫子、佐々木 百合子、宮崎 文子、佐藤喜美子、森谷 智子: 助産師学生が考える卒業時の助産ケア能力ー分娩期の助産ケアの自己評価からー, 日本母性衛生学会, 宮崎市, 2005. 10

大賀 淳子、田中 万里: 「精神科における禁煙」についての看護師の意識調査, 第64回日本公衆衛生学会, 札幌市, 2005. 9

大賀 淳子、影山 隆之: 看護学生の「精神看護」への興味・関心度の変化, 第25回日本社会精神医学会, 東京, 2006. 2

小嶋 光明、伴 信彦、甲斐 倫明: 放射線誘発DNA損傷を指標とした線量率効果のモデル化, 日本保健物理学会大39回研究発表会, 青森県上北郡六ヶ所村, 2005. 7

小嶋 光明、伴 信彦、甲斐 倫明: 放射線照射した正常ヒト胎児繊維芽細胞における初期DNA損傷の線量・時間反応関係, 日本放射線影響学会第48回大会/第1回アジア放射線研究会議, 広島市, 2005. 11

小野 美喜: 回復期リハビリテーションにおける自宅退院に向けたADL獲得援助プロセス 日本看護研究学会, 北海道, 2005. 7

吉川 加奈子、小野 美喜、栗屋 典子: 施設入所高齢者の笑いを引き出す援助の検討ーポジティブな感情を伴う笑いに注目してー, 日本看護学会 老人看護, 鳥取市, 2005. 9

井上 健一郎、高野 裕久、柳澤 利枝、桜井 美穂、市瀬 孝道、吉川 敏一: ナノ粒子の細菌毒素誘発急性肺傷害に対する影響, 第17回日本アレルギー学会春季臨床会, 岡山市, 2005. 6

柳澤 利枝、高野 裕久、井上 健一郎、桜井 美穂、植木 尚子、日吉 孝子、市瀬 孝道、定金 香里、早川 和一: ディーゼル排気微粒子(DEP)のアレルギー性気道炎症増悪効果に関するcDNAマイクロアレイ解析, 第17回日本アレルギー学会春季臨床大会, 岡山市, 2005. 6

山田 智三、高野 裕久、井上 健一郎、志賀 彰、藤田 洋司、牧野 浩招、柳澤 利

枝、日吉 孝子、市瀬 孝道、吉川 敏一: ダニ抗原誘発気道炎症に対する模擬ローズマリー揮発物の予防効果, 第17回 日本アレルギー学会春季臨床大会, 岡山市, 2005. 6

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、井上 健一郎、桜井 美穂: ダニ抗原誘発性アトピー性皮膚炎モデルマウスに及ぼすディーゼル排気曝露の影響, 第46回 大気環境学会, 名古屋市, 2005. 9

市瀬 孝道、定金 香里、高野 裕久、柳澤 利枝、西川 雅高、森 育子、日吉 孝子: 黄砂、Al₂O₃及びSiO₂の気道炎症増悪作用に関する実験的研究, 第46回大気環境学会, 名古屋市, 2005. 9

井上 健一郎、高野 裕久、柳澤 利枝、市瀬 孝道、定金 香里、吉川 敏一: メタロチオネインのアレルギー性気道炎症に対する保護作用, 第55回 日本アレルギー学会秋季学術大会, 盛岡市, 2005. 10

定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、井上 健一郎、桜井 美穂、川里 浩明、安田 愛子: アトピー性皮膚炎モデルマウスにおけるディーゼル排気曝露の影響に関する研究, 第55回 日本アレルギー学会秋季学術大会, 盛岡市, 2005. 10

井上 健一郎、高野 裕久、柳澤 利枝、市瀬 孝道、定金 香里、日吉 孝子、吉川 敏一: NC/Ngaマウスへのディーゼル排気微粒子の経気道縛を野影響, 第55回 日本アレルギー学会秋季学術大会, 盛岡市, 2005. 10

市瀬 孝道、日吉 孝子、定金 香里、高野 裕久、柳澤 利枝、西川 雅高、森 育子、川里 浩明、安田 愛子: マウス喘息モデルに対する熱処理黄砂と非熱処理黄砂の影響比較, 第55回 日本アレルギー学会秋季学術大会, 盛岡市, 2005. 10

日吉 孝子、市瀬 孝道、井上 健一郎、戸村 成男、西川 雅高、高野 裕久: モルモットアレルギー性鼻炎モデルに対する黄砂及びカオリン粒子の影響, 第55回 日本アレルギー学会秋季学術大会, 盛岡市, 2005. 10

定金 香里、市瀬 孝道、吉田 成一: モナストラルブルーによるナノ粒子の生体内動態の検索, 大気環境学会九州支部 第6回研究発表会, 福岡市, 2006. 1

桜井 礼子、稲垣 敦、穴井 小百合、草間 朋子: 大分市の「サロン」を利用した高齢者の介護予防のための運動の開発, 大分県公衆衛生学会, 大分市, 2006. 3

秦 桂子、中村 喜美子、時松 紀子、大村 由紀美、大島 操、白江 亜沙子、後藤

絵里子: 幼児をもつ父母の生活実態と育児支援, 第51回 大分県公衆衛生学会, 大分市, 2006.
3

吉田 成一、高橋 久美子、日吉 孝子、高野 裕久、市瀬 孝道: 粒子状物質の内分泌かく乱作用に関する研究～雄性生殖機能への影響, 環境ホルモン学会第8回研究発表会, 東京都墨田区, 2005. 9

吉田 成一、益本 しほり、吉田 智裕、早川 和一、高野 裕久、武田 健、市瀬 孝道: ディーゼル排気微粒子中に存在する Estrogen Receptor α mRNA, フォーラム2005, 徳島市, 2005. 10

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、日吉 孝子、高野 裕久、西川 雅高: ミネラル粒子のアレルギー増悪作用, フォーラム2005, 徳島市, 2005. 10

吉田 成一、早川 和一、高野 裕久、武田 健、市瀬 孝道: ディーゼル排気微粒子中に含まれる新規内分泌かく乱作用を有する物質の同定, 日本薬学会第126年会, 仙台市, 2006.
3

森口 徳子、高野 政子、山下 早苗: 唇顎口蓋裂児の咀嚼能率と構音障害に関する研究, 日本小児看護学会 第15回学術集会, 横浜市, 2005. 7

葛城 直子、高野 政子、山下 早苗: 口唇・口蓋裂児をもつ母親の離乳食に対する困難感, 日本小児看護学会 第15回学術集会, 横浜市, 2005. 7

真鍋 美貴、山下 早苗、高野 政子: 外来通院している小児がん患者への告知に対する親のコーピングの傾向, 日本小児看護学会 第15回学術集会, 横浜市, 2005. 7

高木 英莉、高野 政子、山下 早苗: ペリネイタル・ビジットの実態と母親の育児に対する期待感・予期不安感に関する研究, 第52回 日本小児保健学会, 下関市, 2005. 10

Takano, M., Tanaka, Y.: Parents' opinions about informing schools of chronic illnesses of their children. , International Nursing Conference, Beijing, China, 2005.10.

石井 敦子、藤内 美保、高橋 ゆか、安部 恭子: 三次元解析装置を用いた起き上がり介助動作のアセスメント ―熟練度の違いに着目して―, 日本看護学会 (看護教育), 宇都宮市, 2005. 8

柿野 友美、藤内 美保、安部 恭子: 臓器提供の意思とセルフ・エスティームの関連に

についての探索的調査, 日本精神衛生学会, 秋田県大館市, 2005. 10

梅野 貴恵、宮崎 文子: 会陰傷害の産後の日常生活動作への影響と持続期間, 第61回
日本助産師学会, 別府市, 2005. 5

山元 清子、阿部 里美、松本 志津子、吉野 久美子、梅野 貴恵: ツボ刺激による骨
盤位妊婦の胎位矯正に関する文献的検討, 第46回 日本母性衛生学会, 宮崎市, 2005. 10

Tomiyasu, T., Ohmachi, F., Yamashita, S., Yoshidome, A., Morimoto, C.: A survey of childcare
experiences by fathers with multiple-birth children. , International Conference 2006 / Impact of
Global Issues on Women and Children, Dhaka, Bangladesh, 2006. 2.

Ohmachi, F., Tomiyasu, T., Yamashita, S., Yoshidome, A., Morimoto, C.: A survey of Childcare
Experiences by mothers with multiple-birth children. , International Conference 2006 / Impact of
Global Issues on Women and Children, Dhaka, Bangladesh, 2006. 2.

Yatsushiro, R., Matsunari, Y., Kim, S.J.: Development of instrument nurses perception of
medication error measurement. , ICN 23rd Quadrennial Congress 2005, Taipei, Taiwan, 2005. 5.

Tatsukawa, S., Yatsushiro, R., Kim, S.J.: Health perception and health behavior of international
students in Japan. , International Nursing Conference, Beijing, China, 2005. 10.

Ashida, S., Yatsushiro, R., Kim, S.J.: Sexuality education for middle school students —China,
Japan, Korea comparison—. , International Nursing Conference, Beijing, China, 2005. 10.

Yoshitake, Y., Shinohara, M., Kouzaki, M., Fukunaga, T.: Low-frequency modulation of muscle
activity in the medial gastrocnemius muscle after bed rest during steady plantar flexion in the
knee-extended position. , The Society for Neuroscience, Washington DC, 2005. 11.

Yoshidome, A., Konishi, K., Miyazaki, F., Kawano, T.: The change of mammae surface skin
temperature and the hardness of mammae by the Oketani breast massage in postpartum. , 27th
Congress of the International Conference of Midwives, Brisbane, 2005. 7.

8 - 6 学術講演等

Iwasaki, Y.: Uremic toxin and bone metabolism. , Therd Annual Meeting of the Japanese Society
of Bone Mineral Research International Symposium, Osaka,

2005. 7.

Iwasaki, Y.: Insufficiency of PTH action on bone in uremia. , American Society of Nephrology, Philadelphia, USA, 2005. 11.

岩崎 香子: 無形成骨の発症機序ーモデル動物の解析ー, Kobe Parathyroid and Bone Form, 神戸市, 2006. 1

Kageyama, T.: Nocturia and sleep dirturbance in the older persons with dementia of the Alzheimer's type. , Brain Korea 21, Stroke and Dementia Care, Seoul, 2005. 10.

甲斐 倫明: ICRP新勧告の策定に関する最近の動き, 保物セミナー2005, 大阪市, 2005. 10

甲斐 倫明: 原子力従事者と原爆被ばく生存者のリスク係数の比較, 保物セミナー2005, 大阪市, 2005. 10

吉武 康栄: 協働筋収縮における力調節安定性の生理学的規定因子, 筋電図の会, 岡山市, 2005. 9

9 地域貢献

9-1 講演

安部 恭子: 看護研究の基礎 実験系の研究の進め方の基礎, H17度大分県看護協会研修会, 大分市, 2005. 7

赤司 千波: 看護研究の基礎 研究の倫理と安全, 平成17年度 大分県看護協会研修会, 大分市, 2005. 7

看護職員に必要な検査の知識, H17年度 看護力再開発講習会講義, 大分市, 2005. 10

訪問看護を受ける対象者の理解, H17年度 第2回 訪問看護研修ステップ1, 大分市, 2005. 11

栗屋 典子: 看護管理概説, 大分県看護協会認定看護管理者ファーストレベル, 大分市, 2005. 5

大学の教育課程・自己啓発, 大分県看護協会 平成17年 度実習指導者講習会, 大分市, 2005. 5

看護サービス提供論, 大分県看護協会認定看護管理者ファーストレベル, 大

分市, 2005. 8

- 伴 信彦 : IVRでの看護, 放射線医学総合研究所 第41回 放射線看護課程, 千葉市, 2005. 5
IVRでの看護, 放射線医学総合研究所 第43回 放射線看護課程, 千葉市, 2005. 8
IVRでの看護, 放射線医学総合研究所 第45回 放射線看護課程, 千葉市, 2006. 1
医療における放射線の影響と防護, 大分赤十字病院放射線診療従事者教育訓練, 大分市, 2006. 2
- 小西 恵美子 : 放射線防護の原則, 放射線医学総合研究所第42回放射線看護課程, 千葉県, 2005. 6
放射線防護の実際, 放射線医学総合研究所第42回放射線看護課程, 千葉県, 2005. 6
看護師と倫理, 日本生協連医療部会 看護管理者懇談会, 東京都, 2005. 9
医療倫理と看護職者の役割, 福島県民主医療機関連合会第10回看護活動交流集会, 郡山市, 2005. 9
実践講座: 看護倫理と医療の倫理, 2005年度医療生協課題別看護検討会, 大阪市, 2005. 11
看護実践に生かす看護倫理, 国立病院機構埼玉病院看護部講演会, 和光市, 2005. 11
ケアする人の職業倫理, 長野県民主医療連合会看護・介護学会, 松本市, 2005. 11
放射線防護の原則, 放射線医学総合研究所第44回放射線看護課程, 千葉県稲毛市, 2005. 11
放射線防護の実際, 放射線医学総合研究所第44回放射線看護課程, 千葉県稲毛市, 2005. 11
新人エンパワメント講座, 長野県看護協会, 松本, 2005.
放射線防護と看護, 長野県看護協会, 松本, 2005.
- 林 猪都子 : 大分市立三佐小学校 (4年生) ファミリーP T A 「胎児の発育」, 日本助産師会大分県支部, 大分市, 2005. 11
大分市立敷戸小学校P T A 「性教育」体験学習, 日本助産師会大分県支部, 大分市, 2005. 11
大分市立原川中学校 (1年生) 「大切ないのち」, 日本助産師会大分県支部, 大分市, 2005. 11
大分市立原川中学校 (2年生) 「命をつないで」, 日本助産師会大分県支部, 大分市, 2005. 12
現在の産婦指導の実際, 潜在助産師キャリア再開発研修会, 大分市, 2005. 12

- 看護概説「女性のライフステージにおける母性看護」, 放送大学, 大分市, 2006. 2
- 避妊法の選択, 第3回 日本助産師会大分県支部研修会, 大分市, 2006. 3
- 平野 亙 : 人が人として生きるために ―保健・福祉と人権―, 第9回 死と生に学ぶ公開講座, 大分市, 2005. 4
- 医療倫理と患者の権利, 大分県放射線技師会アドバンスドセミナー「医療学」, 大分市, 2005. 5
- インフォームド・コンセントと診療情報, 大分県放射線技師会アドバンスドセミナー「医療学」, 大分市, 2005. 5
- Bioethics 新しい医療倫理の展開, 大分県放射線技師会アドバンスドセミナー「医療学」, 大分市, 2005. 5
- 医療・福祉サービスにおける自立支援と安全管理 ―人権の視点から―, 別府市介護支援専門員連絡協議会総会 基調講演, 別府市, 2005. 6
- ヘルスケア提供システム論, 平成17年度 認定看護管理者ファーストレベル大分市, 2005. 6
- リスクマネジメント教育, 平成17年度 実習指導者講習会, 大分市, 2005. 7.
- 患者の権利と個人情報保護法, 大分県看護協会三重地区「看護の集い」, 豊後大野市, 2005. 10
- 看護職の責任と倫理, 大分県看護協会リスクマネジメント研修会, 大分市, 2005. 12
- 患者の権利と個人情報, 大分県看護協会リスクマネジメント研修会, 大分市, 2005. 12
- リスクマネジメントの役割と課題 ~解決策を考えよう, 大分県看護協会リスクマネジメント研修会, 大分市, 2005. 12
- 患者の権利と個人情報保護法, 平成17年度国保直営診療施設看護職研修会, 大分市, 2006. 1
- これからの健康づくり, 大分市給食施設担当者研修会, 大分市, 2006. 1
- 稲垣 敦 : 介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業サロン協力者研修会, 大分市, 2005. 6
- 介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2005. 6
- 介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2005. 6

6

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業，大分市，2005.

6

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業，大分市，2005.

7

運動・レクリエーション指導，大分丘の上病院 sports day，大分市，2005. 7

データ解析の基礎，平成17年度大分県看護協会研修会，大分市，2005. 7

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業，大分市，2005.

9

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業，大分市，2005.

9

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業サロン協力者研修会，大分市，2005. 10

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業，大分市，2005.

10

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業サロン協力者研修会，大分市，2005. 10

中高年の健康と体力，大分市ヘルスポランティア継続研修，大分市，2005. 10

中高年の健康登山（第1回：日帰り登山をしよう！前編），おおいた県民アカデミア大学インターネット講座，九重町，2005. 10

中高年の健康登山（第2回：日帰り登山をしよう！後編），おおいた県民アカデミア大学インターネット講座，九重町，2005. 10

中高年の健康登山（第3回：日帰り登山をしよう！(1)準備），おおいた県民アカデミア大学インターネット講座，大分市，2005. 10

中高年の健康登山（第4回：日帰り登山をしよう！(2)実践），おおいた県民アカデミア大学インターネット講座，大分市，2005. 10

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業サロン協力者研修会，大分市，2005. 11

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業サロン協力者研修会，大分市，2005. 11

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業サロン協力者研修会，大分市，2005. 11

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業，大分市，2005.

11

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業サロン協力者研修会，大分市，2005. 11

介護予防運動指導，大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業，大分市，2005.

11

介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2005.
11
中高年の健康登山 (理論編第1回: 上りの効用), おおいた県民アカデミア
大学インターネット講座, 大分市, 2005. 11
中高年の健康登山 (理論編第2回: 下りの効用), おおいた県民アカデミア
大学インターネット講座, 大分市, 2005. 11
中高年の健康登山 (理論編第3回: 精神的効用) ., おおいた県民アカデミア
大学インターネット講座, 大分市, 2005. 11
中高年の健康登山 (理論編第4回: 健康登山のすすめ—どう歩けばよいか?
上り編), おおいた県民アカデミア大学インターネット講座, 大分市, 2005.
11
中高年の健康登山 (理論編第5回: 健康登山のすすめ—どう歩けばよいか?
下り編), おおいた県民アカデミア大学インターネット講座, 大分市, 2005.
11
介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2005.
12
介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2006.
1
介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2006.
1
運動・レクリエーション指導, 大分丘の上病院 sports day, 大分市, 2006. 1
介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業サロン協力者
研修会, 大分市, 2006. 3
介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2006.
3
介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2006.
3
介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業サロン協力者
研修会, 大分市, 2006. 3
介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2006.
3
介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業, 大分市, 2006.
3
介護予防運動指導, 大分市介護予防モデル事業説明会, 大分市, 2006. 3
介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防モデル事業説明会, 大分
市, 2006. 3
介護予防運動指導, 大分市社会福祉協議会介護予防事業, 大分市, 2006. 3

稲垣 敦、高橋 敬、大賀 淳子:

中高年の健康登山, 大分県立看護科学大学公開講座, 玖珠町, 2005. 11

Kazama, JJ., Narita, I., Gejyo, F., Iwasaki, Y., Fukagawa, M. :

Role of Osteoprotegerin in the development of extraskeletal calcification, Japan Kidney Week, Yokohama, 2005. 6

Kazama, JJ., Narita, I., Gejyo, F., Iwasaki, Y., Fukagawa, M. :

Role of Osteoprotegerin in the Development of Vascular Calcification: Does It Have a Protective Function In Situ?, American Society of Nephrology, Philadelphia(USA), 2005. 11

伊東 朋子 : 看護学概説, 放送大学, 大分市, 2006. 2

影山 隆之 : 職場のメンタルヘルスー管理監督者の役割, 平成17年度大分県新任所長研修, 大分市, 2005. 4

メンタルヘルス, 大分市新任職員第1次研修会, 大分市, 2005. 5

事例から学ぶメンタルヘルス, 大分産業保健推進センター衛生管理者研修会, 大分市, 2005. 5

メンタルヘルス事例検討, 大分産業保健推進センター平成17年度第3回産業医研修, 大分市, 2005. 6

メンタルヘルス, 平成17年度大分県市町村職員「課長級研修」, 大分市, 2005. 7

職場のメンタルヘルス, 天心堂看護部研修会, 大分市, 2005. 9

カウンセリングを超えてー痛む人の「良き環境」となること, 北海道家庭生活総合カウンセリングセンター 犯罪被害者支援の日記念講演会, 札幌市, 2005. 9

メンタルヘルスの基礎知識, 大分県労働基準協会「メンタルヘルス指針基礎研修」, 大分市, 2005. 10

日々の生活について見直すー家族のストレス・思春期の生活リズム, 青森山田高等学校通信制課程特別講演会, 大分市, 2005. 10

介護職員のストレスマネジメント, 大分県竹工芸訓練支援センター向上訓練, 別府市, 2005. 11

学校教員のメンタルヘルスー聾学校の場合, 大分県聾学校職員研修会, 大分市, 2005. 12

騒音が人体に与える影響について, 大分県生活環境部環境保全課主催平成17年度騒音講習会, 大分市, 2006. 2

甲斐 倫明: 最近の放射線防護の話題, 放射線取扱者主任者部会九州支部主任者研修会, 大分市, 2005. 10

小林 三津子:実習指導計画・指導案, 実習指導者講習会(大分県看護協会), 大分市, 2005. 6

看護管理の基礎・副看護師長の役割, 看護管理研修(大分県立病院), 大分市, 2005. 7

看護理論と看護過程, 大分県看護協会研修会, 大分市, 2005. 8
看護専門職論, 認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修会, 大分市,
2005. 8

小林 三津子、藤内 美保、小西 清美、秦 桂子、安部 恭子：
高齢者の家庭看護－移動と食事の援助－, 文部科学省「地域における教育情
報発信・活用促進事業」, 大分県立看護科学大学, 2005. 12

小西 清美：三佐小学校 4年生 ファミリーPTA性教育「胎児の発育」, 日本助産師会
大分県支部, 大分市, 2005. 11

敷戸小学校「性教育」5年・6年：赤ちゃんだっこ・おむつ交換妊婦体験, 日
本助産師会大分県支部, 大分市, 2005. 11

原川中学3年生 性教育「今を大切に生きる」, 日本助産師会大分県支部,
大分市, 2005. 11

原川中学 2年生「命をつないで」, 日本助産師会大分県支部, 大分市, 2005.
12

自然分娩における助産ケアのエビデンス, 日本助産師会大分県支部, 大分市,
2005. 12

工藤 節美: 保健師教育課程, 大分県看護協会 平成17年度実習指導者講習会, 大分市,
2005. 5

家族の特性と支援の方法, 大分県看護協会 平成17年度第1回訪問看護研修
ステップ(I), 大分市, 2005. 5

高齢期の健康づくりと病気の予防, 庄内町高齢者学級, 庄内町, 2005. 5

訪問看護過程, 大分県看護協会 平成17年度第1回訪問看護研修ステップ(I),
大分市, 2005. 6

地域保健活動の展開－個別支援から地域保健活動へ－, 平成17年度大分県保
健師初任者研修会(前期), 大分市, 2005. 7

在宅呼吸管理に関する制度等の動向と実態, 大分県看護協会 平成17年度訪
問看護研修ステップ(II)(呼吸管理), 大分市, 2005. 8

家族の特性と支援方法, 大分県看護協会 平成17年度第2回訪問看護研修会
ステップ(I), 大分市, 2005. 11

地域保健活動の展開, 平成17年度大分県保健師初任者研修会(後期), 大分市,
2005. 12

訪問看護過程, 大分県看護協会 平成17年度第2回訪問看護研修会ステッ
プ(I), 大分市, 2006. 1

看護学概説(地域看護), 放送大学面接授業, 大分市, 2006. 2

宮崎 文子: 助産師教育課程, 平成17年度実習指導者講習会, 大分市, 2005. 5

思春期の性, 平成17年度大分県立大分西高等学校性教育講演会, 大分市, 2005.
6

大切ないのち, 大分市立原川中学校1年生対象, 大分市, 2005. 10

- 今を大切に生きる, 大分市立原川中学校, 大分市, 2005. 11
- 性差の理解とお互いを大切にする男女交際, 大分市三佐小学校6年生, 大分市, 2005. 11
- これからの助産師活動, 潜在助産師キャリア再開発研修会, 大分市, 2005.12
- 思春期の性教育ー健全意思決定のためにー, 大分県立大分豊府高等学校, 大分市, 2006. 1
- 性に関する基本的考え方、関連法規（母体保護法他）ー現状と課題ー, 日本助産師会大分県支部研修会, 大分市, 2006. 3
- 中村 喜美子：看護研究<基礎編> 調査研究の進め方の基礎, 大分県看護協会, 大分市, 2005. 7
- 子どもの睡眠から生活をふり返る, のだ山幼稚園PTA講演会, 大分市, 2005. 10
- 大賀 淳子：職場のメンタルヘルスー監督者の役割ー, 新任課長補佐級研修, 大分市, 2005. 5
- 主な精神症状とその看護, 大分県知的障害者施設協議会看護職員研修会, 大分市, 2006. 2
- 記録について, 日本精神科看護技術協会大分県支部研修会, 大分市, 2006. 2
- 小野 美喜：対象の理解, 訪問看護師養成講座 ステップ1, 大分市, 2005. 5
- 呼吸管理, 訪問看護師養成講座 ステップ2, 大分市, 2005. 8
- 対象の理解, 看護力再開発講習会, 大分市, 2005. 10
- 関根 剛：不登校児童・生徒への関わり方ー不登校のタイプと時期にあわせてー, 大分県教育センター保護者グループカウンセリング, 大分市, 2005. 5
- 中学生の発達段階からみた進路指導のあり方, 平成17年度公立中学校進路指導担当者研修, 大分市, 2005. 6
- 面接技術, 大分県看護協会訪問看護研修会, 大分市, 2005. 6
- グループエクササイズ, 大分市立東陽中学校校内研修会, 大分市, 2005. 6
- カウンセリングの実際, 大分県看護協会実習指導者講習会, 大分市, 2005. 7
- 電話相談の基礎, 大分子どもと親の相談センター, 大分市, 2005. 7
- 一泊研修会, 和歌山いのちの電話協会相談員養成講座, 和歌山市, 2005. 7
- 大人の見方、子どもの見方, 豊後高田市教育委員会, 豊後高田市, 2005. 7
- 思春期にそなえた小学校時代の育て方, 長湯小学校PTA役員研修会, 大分市, 2005. 7
- カウンセリングの進め方, 日田市教育事務所初任者研修会, 日田市, 2005. 9
- 対応が難しい電話への対応, 大分地方法務局人権擁護委員4年次目研修会, 大分市, 2005. 9
- カウンセリングの基礎のおさらい, 大分いのちの電話協会継続研修会, 大分市, 2005. 11
- マイクロカウンセリング、ロールプレイ, 紀の国被害者支援センター養成講

- 座, 継続研修会, 和歌山市, 2005. 11
- ロールプレイ, 患者の権利オンブズマン研修会, 福岡市, 2006. 1
- 国内における被害者支援の実情と臨床心理士の役割, 山口県臨床心理士会月例研修会, 山口市, 2006. 2
- 事件直後の支援から長期継続的支援へ, 全国被害者支援ネットワーク公開フォーラムパネルディスカッション・コーディネーター, 和歌山市, 2006. 2
- 高波 利恵: 高脂血症について, 高脂血症(高コレステロール血症)予防教室, 日出町, 2005. 12
- 高野 政子: 小児看護 指導の実際, 大分県看護協会 臨床実習指導者講習会, 2005. 6
- 高野 政子、山下 早苗、中原 基子:
家庭における小児の救急法, 文部科学省 地域における教育情報発信・活用促進事業, 大学コンソーシアムおおいた, 2005. 12
- 玉井 保子: 排尿ケア, 大分県看護協会, 訪問看護研修ステップ(特), 大分市, 2005. 6
- 排尿ケア, 大分県看護協会, 訪問看護研修ステップ(特), 大分市, 2005. 12
- 玉井 保子、福田 広美、大村 由紀美、小嶋 光明:
医療サービスと診療放射線技師の役割, 大分県放射線技師会医療学セミナー, 大分市, 2005. 6
- 藤内 美保: フィジカルアセスメントI, 第1回訪問看護研修ステップI, 大分市, 2005. 5
- フィジカルアセスメントII, 第1回訪問看護研修ステップI, 大分市, 2005. 5
- 看護過程(1), 実習指導者講習会(大分県看護協会), 大分市, 2005. 6
- 看護過程(2), 実習指導者講習会(大分県看護協会), 大分市, 2005. 6
- 看護過程(3), 実習指導者講習会(大分県看護協会), 大分市, 2005. 6
- 看護過程(4), 実習指導者講習会(大分県看護協会), 大分市, 2005. 6
- 看護過程(5), 実習指導者講習会(大分県看護協会), 大分市, 2005. 6
- フィジカルアセスメント, 大分県立病院新人看護師研修会, 大分市, 2005. 9
- 看護過程と看護記録, 看護力再開発講習会(大分県看護協会), 大分市, 2005. 10
- フィジカルアセスメントI, 第2回訪問看護研修ステップII, 大分市, 2005. 11
- フィジカルアセスメントII, 第2回訪問看護研修ステップII, 大分市, 2005. 12
- 看護学概説(臨床看護師の看護実践とその理念), 放送大学, 大分市, 2006. 2
- 藤内 美保、工藤 節美、小野 美喜、玉井 保子:
呼吸管理, 訪問看護研修ステップII(大分県看護協会), 大分市, 2005. 8
- 八代 利香: 看護学概説, 看護・保健のグローバルイゼーションと看護職の役割, 放送大学面接授業, 大分市, 2006. 2
- 吉村 匠平: 社会福祉法人皆輪会つくし保育園職員研修, 福岡, 2005.
- 社会福祉法人皆輪会つくし保育園相談会, 福岡, 2005.
- 対人関係のスキルトレーニング, 大分県保健師初任者研修会, 大分市, 2005. 7
- 現代社会の若い女性のコミュニケーション手段と不安 母子関係の変化, 母

子保健事業指導者研修会, 庄内町, 2005. 8

相手の話を受け止めるために必要な考え方, 母子保健研修会, 日田市, 2005. 11

吉留 厚子: 今を大切に生きる, 日本助産師会大分県支部 性教育, 大分市原川中学校, 2005. 11

命をつないで, 日本助産師会大分県支部 性教育, 大分市原川中学校, 2005. 11

褥婦指導の実際, 潜在助産師キャリア再開発研修, 大分市, 2005. 12

避妊法の選択, 第3回日本助産師会大分県支部研修会, 大分市, 2006. 3

9-2 研究指導

赤司 千波	臼杵市医師会コスモス病院
伴 信彦	大分赤十字病院
林 猪都子	天心堂へつぎ病院
稲垣 敦	大分文理大学工学部 別府県民保健福祉センター 別府市保健医療課
岩崎 香子	天心堂へつぎ病院
工藤 節美	国立病院機構 大分医療センター
大賀 淳子	厚生連鶴見病院 向井病院 日本精神科看護技術協会大分県支部
小野 美喜	大分県立病院
佐伯 圭一郎	大分県立病院
桜井 礼子	国立病院機構 西別府病院
関根 剛	国立病院機構 西別府病院
品川 佳満	臼杵市医師会立 コスモス病院
吉田 成一	国立病院機構 大分医療センター
藤内 美保	大分赤十字病院
梅野 貴恵	国立病院機構 別府医療センター
吉留 厚子	大分県立病院

9-3 学会その他の委員等

赤司 千波	大分県国民健康保険団体連合会介護給付費審査委員 第32回 日本看護研究学会企画委員
栗屋 典子	大分県高齢者医療費適正化推進委員会委員

大分県老人保健福祉計画策定協議会委員
 日本老年看護学会評議員
 独立行政法人国際協力機構(JICA) ウズベキスタン 看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家、基礎看護カリキュラム委員

伴 信彦 国連科学委員会国内対応委員会委員
 日本放射線影響学会渉外企画委員
 放射線影響協会 国際放射線疫学情報調査委員会専門委員
 (IAEA/RASSC担当)

小西 恵美子 International Journal of Nursing Ethics誌査読委員
 独立行政法人国際協力機構(JICA) ウズベキスタン 看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家、基礎看護カリキュラム委員
 独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員
 独立行政法人放射線医学総合研究所研修課程評議会委員
 内閣府原子力安全委員会核燃料安全審査会審査委員
 日本看護科学学会看護倫理検討委員会委員
 日本看護科学学会評議員
 日本看護研究学会評議員
 日本放射線腫瘍学会放射線治療看護師教育支援WG委員

草間 朋子 大分県国民保護協議会委員
 大分市総合計画検討委員会委員
 大分大学経営協議会委員
 原子力安全委員会専門委員
 原子力委員会専門委員
 疾病・傷害認定審査会委員
 医道審議会委員
 国立大学法人評価委員会委員

林 猪都子 大分県母性衛生学会学術講演会実行委員

平野 互 NPO法人「患者の権利オンブズマン」オンブズマン
 九州大学心臓移植外部評価委員
 (社)別府発達医療センター 安全対策等審議委員会委員
 大分県中央保健所運営協議会委員
 大分県福祉サービス第三者評価事業推進組織「第三者評価基準等委員会」委員
 別府市養護老人ホーム選定委員会副会長

伊東 朋子 日本ALS協会大分県支部運営委員
 独立行政法人国際協力機構(JICA) ウズベキスタン 看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家、基礎看護カリキュラム委員

影山 隆之 大分県こころの健康づくり部会委員

大分県介護保険審査会委員
大分県産後うつスクリーニングシステム推進検討会委員
大分県地域福祉権利擁護事業契約締結審査会委員
中央労働災害防止協会「メンタルヘルス対策支援事業」支援専門家
日本学校メンタルヘルス学会運営委員
日本精神衛生学会常任理事・編集委員長
労働者健康福祉機構大分産業保健推進センター産業保健相談員

甲斐 倫明 アジアオセアニア放射線防護協議会事務局長
九州大学非常勤講師
原子力安全研究協会 放射線影響に関する懇談会委員
国際放射線防護委員会(ICRP)第4専門委員会委員
国連科学委員会国内対応委員会委員
財団法人放射線影響協会 国際放射線疫学情報調査委員会委員
社団法人大分県放射線技師会監事
総合資源エネルギー調査会臨時委員
日本リスク研究学会理事
日本放射線影響学会誌, J.Radiation Research, Senior Editor
文部科学省放射線審議会委員
放送大学客員教授
名古屋大学工学部非常勤講師

小林 三津子 大分県「看護の日」実行委員
大分地方労働審議会委員

小西 清美 第20回 日本助産学会学術集会実行委員
大分県母性衛生学会講演会実行委員
日本助産師会大分県支部教育委員
独立行政法人国際協力機構(JICA) ウズベキスタン 看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家

工藤 節美 第3期 大分市介護保険事業計画及び大分市高齢者保健福祉計画策定員
独立行政法人国際協力機構(JICA) ウズベキスタン 看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家、地域看護カリキュラム委員

松尾 恭子 大分県看護協会学会委員

宮崎 文子 大分県男女共同参画審議会委員会委員
大分県母性衛生学会副会長
大分市男女共同参画推進懇話会委員
日本看護協会助産師職能委員
日本助産学会評議委員
日本助産師学会準備委員長

	全国助産師教育協議会常任理事 日本母性看護学会理事（6月まで） 独立行政法人国際協力機構(JICA) ウズベキスタン 看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家、母性看護カリキュラム委員 第20回 日本助産学会企画委員
大賀 淳子	大分県障害児適性就学指導委員 中小規模病院新人ナース研修事業スーパーバイザー 盲・聾・養護学校における医療的ケア実施体制整備事業に係る運営協議会委員
小野 美喜	大分県脳卒中懇話会世話人 中小規模病院新人ナース研修支援事業 独立行政法人国際協力機構(JICA) ウズベキスタン 看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家
定金 香里	大分県理科・化学教育懇談会幹事
佐伯 圭一郎	生涯健康県おおいた21推進協議会幹事 日本民族衛生学会評議員
桜井 礼子	大分県看護協会学会準備委員会委員 大分県建築審査委員会委員 大分県社会福祉審議会民生委員審査専門分科会委員 大分市営住宅等管理業務指定管理予定者選定委員会委員 大分市風俗関連営業建築物審議会委員 大分市民いこいの家等指定管理予定者選定等委員会委員 独立行政法人国際協力機構(JICA) ウズベキスタン 看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家、地域看護カリキュラム委員
関根 剛	紀の国被害者支援センター評議員 全国被害者支援ネットワーク研修委員会委員 大分いのちの電話協会スーパーバイザー 大分県配偶者からの暴力防止及び被害者支援基本計画策定委員会委員 大分県臨床心理士会非ギア者支援担当理事 大分被害者支援センター事務局長・理事 日本パーソナリティ心理学会パーソナリティ研究編集委員
秦 桂子	公衆衛生協会評議員
高波 利恵	大分県看護協会ホームページ委員会委員 日本看護科学学会法人化準備委員会事務局 日本看護系大学協議会高等教育行政専門委員会事務局 日本看護系大学協議会役員推薦委員会事務局
高野 政子	九州小児看護教育研究会 理事 大分県看護協会教育委員会 教育委員長

- 大分県小児保健協会 副会長 理事
独立行政法人国際協力機構(JICA) ウズベキスタン 看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家、小児看護カリキュラム委員
- 藤内 美保 大分市男女共同参画社会推進懇話会委員
独立行政法人国際協力機構(JICA) ウズベキスタン 看護教育改善プロジェクト短期派遣専門家
- 梅野 貴恵 大分県母性衛生学会幹事 (事務局会計)
- 八代 利香 NPO大分あんしんねっと 特定非営利活動法人成年後見・権利擁護大分ネット理事
大分県看護協会実習指導者講習運営委員長
- 吉村 匠平 臼津地区学習障害児等支援体制整備事業に係る専門家チーム委員
大分県高齢者虐待防止連絡協議会委員
- 吉留 厚子 大分県ナースセンター事業運営委員
大分県母性衛生学会総会, 学術集会実行委員
大分県母性衛生学会理事
第20回日本助産学会実行委員
平成17年度日本助産師会通常総会ならびに第61回日本助産師学会準備委員

10 助成研究

栗屋 典子、桜井 礼子

分担：看護ケアの質評価・改善システムの運用に関する研究（医療技術評価総合研究事業）厚生労働科学研究費補助金（3年予定の3年目）

安部 恭子

代表：酸化油脂のアレルギーへの影響 ～酸化イワシ油の気管支喘息増悪作用に関する実験的研究～ 文部科学省科学研究費補充金（萌芽研究・1年予定の1年目）

岩崎 香子

代表：糖尿病性腎症にともなう骨病変の病態生理と進行抑制に関する研究（腎臓内科学）文部科学省科学研究補助金 若手B（2年予定の2年目）

代表：2型糖尿病性腎症モデルの骨病変の病態生理解明（骨代謝）（株）クレハ 生物医薬研究所 受託研究（1年）

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

代表：黄砂の肺毒性、アレルギー増悪、酸化DNA傷害、内分泌攪乱の影響評価に関する研究（環境影響評価）日本科学振興会科学研究費補助金 基盤研究B（3年予定の2年目）

市瀬 孝道

分担：大気中ナノ粒子に含有された酸化ストレスを惹起するキノン化合物の生体影響（環境影響評価）日本科学振興会科学研究費補助金（基盤研究B）（3年予定の3年目）

影山 隆之

分担：自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究（地域保健）厚生労働省こころの健康科学研究事業（3年予定の2年目）

分担：医療職者のエンパワーメントとメンタルヘルスに関する研究－新卒看護職者の自己効力感を高めるプログラムの開発（基礎看護学）日本学術振興会科研費（3年計画の1年目）

分担：ウェブを利用した看護職のストレス対策教材の開発とその効果評価－看護職におけるストレス対処とアサーションスキルの向上（基礎看護学）日本学術振興会科研費（2年予定の1年目）

小西 恵美子

代表：日本における「よい看護師」の記述:近隣アジア諸国との比較による研究（基礎看護学）科研費基盤研究C（3年予定の1年目）

代表：患者からみた「よい看護師」に関する記述的研究:日韓比較（人文・社会科学）日本学術振興会日韓科学協力事業（3年予定の2年）

分担：女性の骨粗鬆症予防:リスク特性と症状の国際比較に基づく生活指導（基礎看護学）科研費基盤研究C（2年予定の1年目）

分担：地域看護における倫理教育プログラムの開発と評価（地域・老年看護学）科研費基盤研究C（3年予定の2年目）

品川 佳満

代表：高齢者宅内での生活音計測による見守りシステムの開発（人間医工学）文部科学省科学研究費補助金 若手研究（B）（2年予定の2年目）

分担：微弱近赤外光を用いた、健康指標としての臓器表面の血流変化に関する研究（人間医工学）文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（B）（2年予定の1年目）

定金 香里

代表：ディーゼル排ガスのアトピー性皮膚炎増悪作用に関する研究（環境影響評価・環境政策）文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）（2年予定の2年目）

高野 政子、草間 朋子、宮崎 文子、桜井 礼子

代表：子育て支援のための産後ケア調査研究 産後ケアシステムの構築—産後1ヶ月に重点をおいた産後ケアサービスステーションのシステム化をめざして—大分県産業創造機構 (1年予定の1年目)

高野 政子

代表：いきいき子育て支援のための産後ケアセンター構築に関する調査研究事業大分県 (1年予定の1年目)

藤内 美保、伊東 朋子、玉井 保子

代表：看護技術を保障する判断思考訓練法の開発に向けて—熟練看護師と新人の分析比較— (医歯薬学 基礎看護学) 文部科学省科学研究費補助金 (2年予定の2年目)

中山 晃志

分担：リスク認知とリスクを規定する要因に関する調査 原子力安全基盤機構 (3年予定の2年目)

福田 広美

代表：尿中サイトカインによる看護職者の身体的疲労度の定量的評価法の開発 (基礎看護学) 文部科学省科学研究費補助金 若手B (2年予定の1年目)

吉田 成一

代表：ナノ粒子の生殖系及び内分泌系に及ぼす影響に関する研究, 科学研究費補助金若手研究A (3年予定の1年目)

吉武 康栄

代表：ドライバーの力調節能力にPlateau Potentialsが与える影響 (神経生理) 財団法人スズキ財団 科学技術研究助成 (1年)

代表：片側での随意筋力発揮中に付随する不随意的反対側収縮の生理学的意義の解明 (神経生理) 財団法人ライフサイエンス振興財団 研究助成 (1年)

吉武 康栄、品川 佳満

代表：児童期の習慣的な運動が思春期後の力調節安定性に及ぼす影響 (応用生理学) 石本記念デサントスポーツ科学振興財団 学術研究助成 (1年)

1 1 海外研究派遣

関根 剛

研究実施国：ニュージーランド

研究期間：2005年8月6日～9月5日

研究内容：2004年に全国比会社支援ネットワークの一員としてニュージーランドにおける犯罪被害者支援視察団に加わり全国事務局と行政府のシステムを中心に知見を得た。そこで、現実の支援を実施しているChristchurchのLocalVictimSupportGroupにおけるボランティア養成講座に参加するとともに、ニュージーランド国内の地方組織の訪問とインタビューを行ない、実際のシステム運営についての情報収集を行った。また、被害者支援を支えている地域の社会資源について知見を得るため、Christchurch Polytechnic Institute of Technology看護学部、女性センター、StopViolenceServiceなどの民間団体を訪問し知見を得た。

研究実施機関：Victim Support Christchurch Group（NZ警察Christchurch Central内）他

研究報告：2005年12月22日、大分県立看護科学大学にて報告会

福田 広美

研究実施国：アメリカ合衆国

研究期間：2006年2月27日～3月24日

研究内容：学部や大学院の講義、臨床実習や研究指導に参加し、基礎教育の現状やNurse Practitionerなどの専門教育について研修を行った。日本の看護や看護教育について、また看護職者の疲労に関する研究について、教員や大学院生を対象にプレゼンテーションを行った。

研究実施機関：Pace University Lienhard School of Nursing

研究報告会：2006年4月5日、大分県立看護科学大学にて報告会

山下 早苗

研究実施国：アメリカ合衆国

研究期間：2006年2月27日～3月24日

研究内容：「不確かさ」理論構築者のDr. Merle H. Mishel (University of North Carolina)を訪問し、研究の方向性についてディスカッションを行った。また米国における小児がん看護の現状を知るために、Dana Farber Cancer InstituteやChildren's Hospital of Bostonを訪問した。Pace Universityでは、教員や大学院生を対象に、修士論文の一部についてプレゼンテーションを行った。さらに小児看護学の講義と臨地実習、Nurse Practitionerの活動に参加し、概要を把握した。

研究実施機関：Pace University, University of North Carolina, Dana Farber Cancer Institute,
Children's Hospital of Boston, The City University of New York

研究報告会：2006年4月5日、大分県立看護科学大学にて報告会

1 2 学外研究者の受入

1) 共同研究員の受け入れ

本学教員 甲斐 倫明

受入れ者 小野 孝二

所属 大分県立病院放射線科部

研究テーマ 放射線診断における画像撮影の最適化に関する研究

受入期間 平成17年4月1日～平成18年3月31日

本学教員 甲斐 倫明

受入れ者 久保 剛

所属 大分大学総合科学研究支援センター

放送大学修士課程

研究テーマ 生活環境のラドン・トロンの健康影響に関する研究

受入期間 平成17年4月1日～平成18年3月31日

1 3 教職員名簿

1. 専任教員

生体科学	教授	高橋 敬	
	助教授	安部 眞佐子	
	助手	岩崎 香子	
生体反応学	教授	市瀬 孝道	
	講師	吉田 成一	
	助手	定金 香里	
健康運動学	助教授	稲垣 敦	
	助手	吉武 康栄	
人間関係学	講師	関根 剛	
	講師	吉村 匠平	
	助手	佐藤 みつよ	
環境科学	教授	甲斐 倫明	
	助教授	伴 信彦	
	助手	小嶋 光明	
健康情報科学	助教授	佐伯 圭一郎	
	助手	品川 佳満	
	助手	中山 晃志	
言語学	助教授	G.T.Shirley	
	講師	宮内 信治	
	助手	岡崎 寿子	
基礎看護学	教授	小林 三津子	
	助教授	伊東 朋子	
	助手	玉井 保子	
	助手	吉田 智子	H17.4.1採用
	助手	日吉 孝子	H17.4.1採用
看護アセスメント学	教授	小西 恵美子	H17.4.1採用
	講師	藤内 美保	
	助手	安部 恭子	
	助手	玉置 奈保子	H17.4.1採用

成人・老人看護学	教授	栗屋 典子	
	助教授	赤司 千波	
	助手	小野 美喜	
	助手	大津 佐知江	
	助手	松尾 恭子	
	助手	福田 広美	
小児看護学	講師	高野 政子	
	助手	山下 早苗	
	助手	中原 基子	H17.4.1採用
母性看護・助産学	教授	宮崎 文子	
	助教授	吉留 厚子	
	助教授	林 猪都子	
	講師	小西 清美	
	助手	大神 純子	
	助手	梅野 貴恵	
	助手	田中 薫	H17.4.1採用
	助手	宇留嶋 佳子	H17.6.14採用
精神看護学	教授	影山 隆之	
	講師	大賀 淳子	
	助手	田村 充子	H17.4.1採用
保健管理学	教授	草間 朋子	
	助教授	平野 亙	
	助教授	桜井 礼子	
	助手	高波 利恵	
	助手	朝見 和佳	H17.4.1採用
地域看護学	教授	中村 喜美子	
	講師	工藤 節美	
	助手	時松 紀子	
	助手	大村 由紀美	
	助手	秦 桂子	
	助手	大島 操	H17.8.29採用
国際看護学	講師	八代 利香	
	助手	甲斐 仁美	H17.4.1採用

2. 非常勤講師

西 英 久	哲学入門
大 杉 至	人間と社会
合 田 公 計	経済学入門
日 高 貢一郎	言語表現法
三 船 求真人	生体微生物反応論
西 園 晃	生体微生物反応論
肥田木 孜	母性病態論
吉 良 國 光	大分の歴史と文化
宮 本 修	音楽とこころ
ホアン・ホセ・アルタミラノ	スペイン語
澤 田 佳 孝	美術とこころ
佐 渡 敏 彦	看護と遺伝
吉 河 康 二	看護と遺伝
劉 美 貞	韓国語
小 林 宏 之	法学入門
上 野 桂 子	母性病態論
宇都宮 隆 史	母性病態論
堀 永 孚 郎	母性病態論
福 元 満 治	保健医療ボランティア論
江 上 佐枝子	母性病態論
足 立 恵 理	文化人類学入門
金 順 子	国際看護学特論

3. 事務職員

○事務局

事務局長	三浦 洋一	H17.4.1転入
次長兼総務課長	小野 順一	H17.4.1転入
主幹	小手川 元晴	
主幹	玉田 逸子	

主査		足立 勝巳	H17.4.1転入
主任		高橋 厚至郎	
技師		那須 博文	
臨時職員		平川 昌子	H17.4.1採用
臨時職員		富内 美奈	H17.4.1採用

○学生部教務学生課

学生部長	併任	(市瀬 孝道)	
教務学生課長		三浦 始	
主幹		竹下 敏彦	
副主幹		佐藤 俊実	
主任		矢部 美香	
非常勤保健師		原田 幸代	
臨時職員		池邊 尚美	H17.7.19採用
臨時職員		山香 藍子	H17.7.15退職

○付属図書館

付属図書館長	併任	(甲斐 倫明)	
図書館管理係長		小野 永子	
非常勤司書		牛島 聡子	
非常勤司書		中野 美佐子	